
虎かぶりっ！

全信全疑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虎かぶりっ！

【Nコード】

N0487H

【作者名】

全信全疑

【あらすじ】

高校一年生の夏休み目前の7月6日。俺はある1人のクラスメイトに告白された。「と、友達になってください！」と。そいつは高校で有名な不良で、美人で、無口で、ケンカは（恐らく）県内最強で。だけど、そんな彼女の正体は「猫被り」ならぬ「虎被り」だった。これはちよつと（？）変わった女と、なんだかんだで面倒見のいい男の普通の非日常を描いた物語

序章 虎を被った少女

7月6日の木曜日。

高校に入学して約3ヶ月経ち、新しい環境にも慣れ始めた今日この頃に起きた出来事だ。

「と、友達になって下さい！」

と彼女に告白されたのは。ガバツと頭を下げる彼女。その反動で長い黒髪がふわっと浮いた。そして前に出された一枚の紙。それを受け取れずに覗きこみ読んでみた。

「えーっと、名前・橘柚希

身長178センチ・体重は50キロ・スリーサイズは上から86・

54・83。血液型はO型で8月1日の獅子座

趣味は運動 体動かすことなら何でも好き

特技は雑誌を破く タウンページ位なら余裕

好きな食べ物全部だけど、特に甘い物

嫌いな食べ物はないけどカニは苦手 食べるにくいから

以上

┌

読み終えた俺は取りあえず沈黙。そして思い切って聞いてみた。

「これは、その、何？」

「プ、プロフィールです。本に書いてあったから、です」

そのまま黙ってしまう彼女。

「なる程」

全くわからん。

だけど恐らくこれ読んで友達になるか決めてくれて事だろうと勝手に予測する。まあ彼女のことは前から知っていた。何せ高校の有名人だし。ただ、日頃の彼女のイメージとはだいぶ違ったけど。俺はとりあえず緊急の話題を口にして見た。

「えーっと、取りあえずロープほどいと、このロープ外してくれない？」

現在俺の両手両足はロープで縛られてたりする。

「だ、ダメ！・・・です」

ダメらしい。がっくりと肩を落とした俺は、この状況からの脱出を諦めて軽く目を瞑りどうするべきか考えながら今日1日を思い返していた。

はじめに+あらすじ。

初めまして。全信全疑といひます。名前は8割方思いつきで決めました。

「はじめに」と題してこんな大層な前書きにした理由は なんとなくです。あー前のページに戻らないでください。ブラウザ閉じるのも無しの方角で。たぶん1週間後位に後悔すると思ひますがここは現実から目を背ける方角で。

なんとなくでも一応目的はあつたりします。この小説でのルール(?)の発表です。

その1 . これを書くにあつて目標決めました。「ちゃんと完結させる」これでいこうと思つてます。諦める。挫折する。よくないです。

その2 . 章の終りごとにちよろちよろつとあとがき書こうと思つてます。そつちにも付き合つてくださつたら凄く嬉しいです、ハイ。

その3 . 更新頻度は最高で週1。最低で月1。宣言しちやつたのでちゃんと守ります。

その4 . 後書きは章の終り事にします。作品ともども読んでもらえると嬉しいです。

最後に . 見苦しい文が続いたりすると思ひますがそこは温かい目見守る+少しづつ文章力がつく(といいなあ)まで首を長くして待つてもらえると嬉しいです。あと、レビューやら感想やら頂けるとほんと嬉しいです。一言でも嬉しいですし、厳しい言葉でも嬉しいです。 Mとかじゃないですよ?

異常です。間違えました。以上です。つまんなくてすみません。思いついたらせすにはいられない性格でして。

作品の方は真面目に、ほんと真面目に取り組んでいるのでどうかお付き合いよろしく願います。

これだけではなんだと思ったのでタイトル通り少し詳しいのあらすじっぽいのを下に載せてみました。これ読んでいただけたらこの作品の雰囲気わかっていただけかなあと。でもほんと短い（読んで15秒くらい）ので過度の期待は禁物です。

ではでは次回の後書きで会いましょう。

高校一年生の夏休み目前の7月6日

俺はある1人のクラスメートに告白された

「と、友達になってください！」

と。そいつは高校で有名な不良で、美人で、無口で、ケンカは（恐らく）県内最強で

だけど、そんな彼女の正体は「猫被り」ならぬ「虎被り」だった

「よっ、宜しくお願いしみやふ！」

「落ち着け。まずはそれからだ。今回はそんなに難しいことじゃない。特訓をクリアしたお前なら楽勝だ」

「う、うん！じゃあ行ってくるよ！」

これはちよっと（？）変わった女と、なんだかんだで面倒見のいい男の普通の物語

「こ、これ下さい！」

「おお、美味しそうな菓子パンだな。だけど俺じゃなくてあの店員さんと行って買ってこような」

「こ、これ下さい！」

「いや、だから俺じゃな」

「これ、下さいい・・・」

「・・・作戦練り直すか」

「・・・うん」

失敬。普通の非日常を描いた物語

第1話 始まりはプレストに

俺、右片修司うがたしゅうじは空を眺めていた。

「この原子番号は覚える必要があります。ですが全てと言うわけではなく」

今は3時間目の授業中。教科は言わずもがな化学。理系好きの俺としては大丈夫だが、他は教師の子守歌で半分以上が脱落（爆睡）している。

「ですが安心して下さい。有名ないい覚え方があります。もう既に知っている人もいるかもしれませんが」

その脱落組の1人で、俺の友人である大倉雄馬は教科書によだれで世界地図を描いていた。

「すいへーりーべー僕のふ」

「ガラガラガラ」

先生が新たな呪文を唱え出したとき、急に教室の前のドアが開いた。寝ていた男子は俊敏に起きてそちらを向き、女子は軽く舌打ちをする。入ってきたのは背が高く黒髪を背中まで伸ばした女の子。彼女は教壇の前に来て先生に遅刻届を渡した。

「橘さん。もう少し頑張つて早く起きましようね」

先生が笑顔でやんわり注意する。

「・・・」

彼女は黙つたまま軽く頭を下げ、席まで移動した。

彼女の名前は橘柚希。高めの鼻筋に切れ長で大きな瞳。スラツとした長身で、腰まである黒髪ストレートはラフな感じで切られている。彼女のその美しさに目を奪われる人も多いだろう。

そしてもう一つ彼女が人目を引く要因がある。それが左目にある縦にバツサリ切れた傷跡だ。

噂ではポン刀持ったヤクザに囲まれた時についたらしいが、まあ噂はあくまでも噂だ。

だけど腕っ節の強さはかなりのもので、俺も一度見たが男子5人を一瞬で倒していた。

未だかつてケンカは常勝無敗らしい。あと俺が知っているのはかなりの無口で常に1人で行動しており、大抵外を眺めていることぐらいか。

「ああ、橘さんは今日も綺麗だなあ」

隣で世界地図を描いていた雄馬（橘が来てから起きるまで0.5秒）が呟いた。

「お前彼女いるだろうが。それもとびっきりの美人が」

そう。俺と違ってイケメンのコイツは世の中の男が恨みたくなるような子と付き合っている。

というか俺の逆隣の席である瀬上彩華なんだけど。

彼女は綺麗なパーマがかかった髪に、長身で胸が寂しい（絶対に禁句）ちよつと愛情表現が過激な美少女だ。中学校の頃は百人切りをしたという噂が流れたが本人は笑って否定していた。

まあとにかくそんな噂を誰もが信じてしまうほどの人気者なのだ。彼女はせつせと先生の言っている事をメモしていた。

「綺麗なものは綺麗なんだから仕方ないだろ。お前は和食・洋食・中華に順位付けられるのか？」

そう言つて憎たらしい笑顔する雄馬。

「おい瀬上。ここに面白い発言をしたO倉氏の声を録音したボイスレコーダーがあるんだけど聞かな「よーっし修司帰りに牛丼奢つてやる！」

瀬上に話しかけているといきなり雄馬が会話に割り込んできた。たく、マナーのなっていない奴だ。だが心の広い俺は怒らずに会話を続けた。

「マジで？あんがと。お前いい奴だなあ」

「だろ！？ところで話は変わるがそのボイスレコーダー俺に貸して下さいお願いします！」

雄馬が前のめりになって頭を下げてる。

「ああ別にいいぞ」

ちよつと貸すぐらい全然構わないのでそう答える。

「しゃー！さすがは親友話がわかる！」

「当たり前前だろ？今瀬上に貸してるから返ってきたら直ぐ貸してやる」

「修司ー！！」

雄馬の断末魔が響き渡る。

「大倉君。元気がありあまっているのはわかります。授業はあと5分で終了ですのでもう少し頑張つて下さい」

うるさい雄馬に先生が注意する。

「す、すみません」

雄馬が立って頭を下げる。そして座るときにこちらに思いっきりガンをとばしてきたが当然無視をする。何てったってこちらには最高の味方がいるのだから。その味方がいる右を見してみる。するとボイスレコーダーをイヤホンで聞きながら、ちょうど第2形態の般若になった瀬上がいた。

「ひいつ・・・！」

雄馬もそれに気付き顔を青くする。恐らく休み時間にくる地獄を想像したのだろつ。

「はん。幸せ者には死を」

そう言つて親指を下げる。

「右片君」

先生が授業を止めて話しかけてくる。しまった。どうやら今の発言を聞かれてしまったらしい。さすがに優しいと評判の化学の先生でもこの発言と親指下は不味かったか？と軽く後悔する。

「グツジョブです」

笑顔で親指を下げる先生。俺この先生好きだわ。周りの男子も俺のフラインプレーにほくそ笑みながら親指を下に向けた。

「くそう。ここに神はいないのか・・・！」

左隣で雄馬が味方ゼロの状況と逃れられない運命にもがき苦しんで

いる。
ふと。

おそらく本当に偶然だろうが、その雄馬の奥の席である橋と目があつた。

「……………」

だが彼女は直ぐ目をそらして窓の外を眺め始めた。

「キーンコーンカーンコーン」

授業終了のチャイムが鳴り響く。

「はははっなーんちゃって！さっき修司に言ったのは全部冗談でぎやあー！！」

それは同時に問答無用で雄馬の公開処刑の始まりを知らせるチャイムでもあつた。その悲鳴をバックミュージックに、俺はいつもずっと外を眺めている橋は何を考えているんだろうと、わかりもしないことを思った。

「おーい雄馬。約束通り牛丼奢ってくれ」

今は放課後。

終わりのホームルームを終え、俺は約束を守って貰おうと雄馬に話しかけた。

「……………」

返事がない。ただの屍のようだ。あの後瀬上に休み時間をフルに使ってボコられた雄馬は瀕死状態になりながらもなんとか4時間目を乗り切つた。

が。
昼休みになると瀬上の本気のラッシュ30分という本当の地獄が待っていた。それにより力尽きた雄馬は5時間目が始まってからピクリとも動かない。さすが瀬上の第二形態。威力から徹底ぶりまで八イレベルだ。

「修司、そんな奴ほっというて私と行こ。そこの屑の代わりに奢って

あげるから」

そんなことを考えていると本人の瀬上がなんとも男前な提案をしてきた。

「マジで！？ありがとー瀬上！顔もスタイルも良くてその性格なんて反則だろ！」

失礼なことを考えていた罪悪感をぶつ飛ばすために大声を出す俺。

「ふふっ、ありがと。あと瀬上じゃなくて彩華でいいって言ってるじゃん」

「いやあ、流石に人の彼女を名前で呼び捨てするのはちょっとな」

人に名前で呼ばれるのを嫌う彼女がそう言ってくれるのは嬉しいのだけど、さすがに無理だ。

「相変わらずお堅い考えだね。まっ、そっちはおいおいでいっか」
そして彼女は笑いながら俺の背後に回り込み背中を押し始めた。

「よし、じゃあご飯食べに行こー。私の場合は牛丼屋じゃなくてファミレスだけどね」

「ゴチになりまーす！」

俺は瀬上のちよっと大胆な行動に照れながら、何を奢って貰おうか考え

「2組の柏木だ！瀬上はいるか！？」

「げっ、優那」

ているときに現れたのはチアリーダー部の一年生、柏木優奈。

彼女は隣のクラスの女の子で茶髪の髪をポニーテールにしている。そして男口調の割に小柄でも可愛い顔をした女の子だ。さばさばした性格の瀬上とは個人的にいいコンビだと思う。

「ほうほう。歓迎してくれてるようで嬉しいよ瀬上。あまりの嬉しさに殴り倒してしまいそうだ」

「いやあ、私的には歪んだ愛情ノーセンキューなんだけど」

「そいつは残念。本当に残念だ・・・な！」

「ひいー！」

柏木は逃げだそうとした瀬上さんをいとも簡単にを捕まえてしまう。

「君は確か、右片修司だな？悪いが瀬上を借りてくぞ」

「お、おう。お気遣いなく」

「きよ、今日はその、部活の気分じゃなかなーと」

「ならキャプテンに直接言え」

「く、くそう。ごめんね修司。今度絶対奢るからー」

「お、おう。楽しみにしてる」

そして瀬上は柏木に首根っこを掴まれてずるとひきずられていった。そして教室に残っているのは俺と屍（雄馬）。他のみんなは既に帰ってしまったらしい。

「・・・帰るか」

そして俺も教室を後にすることにした。

只今の時刻は4時前。雄馬を放置した俺は、部活をやってなく今日は珍しくバイトも休みなので真っ直ぐに家に帰っている。今頃みんなは部活をやってるので、周りは人っ子一人いない。そんな中を俺はゆっくりと歩いてた。

「あっちーなー」

余りの暑さにほとんど無意識でぼやいてしまう。夏が近づき日が長くなっているため、未だに太陽がアスファルトを熱し続けているからだろう。さらに何の嫌がらせかは知らないが風も全く吹いておらず、セミの大合唱と相まって確実に俺の体力を削っていた。

「それでも俺は夏が好きなのだが、何でだろう？」

人気のない交差点に差し掛かったとき、1人ごちてみる。夏休みがあるからか？それとも実はMなのか？と悩みながら歩いていたせいだろうか。俺が前から来た人に気付かなかったのは。どんっとなぶつかる。

「っつと。すみません」

と謝ることが出来なかった。何故ならぶつかった時に首の後ろを殴られたからだ。ほら、よく漫画とかである手刀でトンツてやるやつ。まさか現実でやられる機会があるとは。俺は意識が遠のくという初めての経験を味わいながら、本当にこんなことで意識がとぶんだ

なと場違いなことを考えてた。ふわっと柚の香りがした。

ぼんやりと視界が明るくなってくる。その景色がはっきりなるにつれ、俺の意識も覚醒してきた。

「・・・あー。何か気持ち悪いー」

強制的に意識を奪われたのが原因なのだが、そんなことわかるはずもなく無意識に頭を手をもっていく。ことが出来なかった。

「・・・はい？」

何故なら、両手は後ろ手首を。両足は足首をロープで縛られていたからだ。さーっと全身の血が引いていくのがわかる。これはもしかしなくても・・・誘拐？

「は、はは。んなバカなこと。なあ？」

誰に言うでもなく喋り出す。当たり前だが誰も返事をしてくれなかった。

その事実一気に不安になる。俺はとにかく落ち着こうと、とりあえず深呼吸を始める。

「落ち着け俺、Be Coolだ。これまで熱くなって良かったことなんて何もなかっただろ？」

声に出して自分に言い聞かせる。はっきりいって俺に誘拐される心当たりなんて全くない。

家が金持ちでもないし、俺個人、特別なことなんて何もない。だが問題はそんなどうでもいいことではなく、どうやって此処から逃げ出すかだ。

そのためにまず周りの状況を確認する。俺が連れてこられた場所は、どうやらどこかの廃工場らしく様々な機械の残骸が転がっている。

広さは教室4個分くらいで、俺はそのスペースの一番奥でイスに座らされている。そしてとりつけられた窓を見るとおそらくここは二階らしいことがわかった。

そして次に自分の状況を確認。

「くそっ、ご丁寧なこっつ」

足が縛られているロープは近くの床からはえた鉄パイプに括りつけられていた。足を引いてみたが、鉄パイプはびくともしない。

「さてと、どうするべきか」

落ち着け。落ち着け。落ち着いて考えれば何かあるはずだ。

てんぱりそんな自分に言い聞かせる。そこで俺は今更ながら気付いた。

「そつだ携帯！」

いつもの定位置である右ポケットを確認する。するとそこには確かな膨らみがあった。

「よしっ！」

俺は持ち物をチェックしなかったマヌケな犯人に感謝しながら体を思いつきり左に捻る。そして後ろで縛られていた両手で携帯電話を何とか取り出した。瞬間。

「びびっびびっ」

携帯が鳴りだした。

「やべっ！」

この音は残りの電池が無くなったときに鳴るアラーム音だ。おそらくもう30秒で強制的に電源が切れてしまう。

「落ち着け。慌てるな。まずはオートロックの解除だ・・・！」

俺は何度目になるかわからない言葉で自分に言い聞かせながら後ろで画面の見えない携帯を操作する。だか手先が器用でない俺はちゃんと操作出来ているのかさえわからない。

「くそっ、んな事なら雄馬の携帯特訓に付き合っつ・・・そつだ！」

俺は携帯を体を捻って前に落とす。そしてイスからわざと落ちて携帯の前まで行き、舌でボタンをプッシュする。

(間に合っつてくれよ・・・！)

俺は心でそう願いながらオートロックを解除、すぐさま着信履歴を開く。

(よしっ！こいつなら速攻で出てくれる！)

そして着信履歴の一番上の人物を確認した俺はそう確信して通話ボタンを押し耳に押し当てる。

ワンコール。

ガチャッ。

「何？」

よし繋がった！Missワンコール（今命名）の名は伊達じゃないな！

「俺だよ俺！助けてくれ！」

「はあ？オレオレ詐欺とはまた随分とユニークな方法で金の催促するのね。いくら欲しいの？億？」

ブチッ。

携帯を見る。画面は電池切れをアピールし、そして真っ黒になった。「終わった」

ゴンツと頭が地面に落ちる音がする。言い方が少し悪かった俺も俺だけど、あんな風に受け取るあいつもあいつだろ。何処に友達にオレオレ詐欺するバカがいるんだよ。くそっ、早く出てくれる方に意識がいき過ぎて、冷静な対応をしてくれる方を考えてなかった。

「・・・っ！」

そう悔やんでいた俺は一気に現実へ引き戻される。何故なら

カン、カン、カン

誰かが階段を上がってくる音が聞こえて来たからだ。この場合、俺が考えなきやいけない可能性は2つ。

「A」 犯人。

「B」 それ以外

カン、カン、カン

だがこんな廃工場の二階なんて目的でもない限り普通は来ないだろう。よって答えはー

カン、カン、カン

「A」

ガチャッ、ギギィー。

錆びきつたドアが軋みながら開く。そこに現れたのは

「こ、こんにちは！」

顔真っ赤にした同い年の女の子。彼女のことは知っていた。何故なら

「・・・た、橘？」

噂のクラスメイトだったからだ。

「はいっ、橘柚希です！」

そう自己紹介をして彼女は頭を下げた。ちょっと待ってくれ。混乱しそうになる頭を無理やり働かせて情報を整理する。

- 1・放課後の帰宅途中に気を失う
- 2・目が覚めると廃工場
- 3・ロープで縛られて身動きが取れない
- 4・電話で助けを求める 失敗
- 5・犯人登場
クラスメイト

今ここ

6・なんやかんやで無事脱出（予定）というより希望」

いや待て。まだ橘が犯人と決まった訳ではない。今は何か1人で「いい天気ですねー」とか何故か世間話を繰り返しているが、ひよつとしたら何らかの方法で俺のピンチを知って助けに来てくれたのかも！

「あの！無理やりこんなとこ連れて来てごめんなさい！」

そして彼女は大きく頭を下げた。ドンマイ俺。どうやら犯人は彼女で決定らしい。だけど喜べ俺。どうやら彼女はちゃんとこれが誘拐であることはわかっていらしい。

「こんなことしたのは、その、大事な訳がありました！」

そう言っただけ彼女は大きく息を吸って深呼吸をした。おそらく気を落ち着かせているのである。裏を返せばそれほど重要もしくは重い内容だということだ。俺は自分が縛られて地べたに這いつくばっている状況を再確認する。そこから導き出される結論。

お願い!!脅迫

どうしよう、泣きそうだ。そんな時、彼女は眼を見開き俺がそれにひるんだところで言った。

「と、友達になって下さい!」
と。

そして現在にいたる。俺は今日1日を振り返るのを終えてゆっくりと目を開ける。そして結論を出した。

うん。結局訳が分からん。

という訳で、このままでは埒があかないと考えた俺は全部直球ド真ん中でいくことにした。

「あの、ちよつといいか?」

「は、はい!」

「何で俺を誘拐したんだ?」

彼女がうつと気まずそうな顔をする。

「そ、それは、その、ちゃんと話を聞いて欲しくて」

ははは、と彼女がとてもぎこちなく笑う。

「じゃあ次に、何でロープをはずしてくれないんだ?」

「その、ちゃんと逃げずに答えて欲しかった、から」

少しずつ彼女の元気が無くなる。

「じゃあ、答えたらほどこれるのか?」

「う、うん!それはもちろん!」

まるで水を得た魚のように元気を取り戻し、勢いよく頭を前後する。

「・・・ぶつちゃけ断ったらボコられるのか?」

「そっ!そんなことはしないよ!ただ答えが聞きたいだけだから!」
心外だと言わんばかりに両手を前に突き出しブンブンとふる。俺はそんな彼女をしり目に情報を整理する。そしてすぐに結論に至った。
簡単な話だ。

彼女が言ったことは嘘かも知れない。だからと言って俺にとれる選

「択肢はどうせ1つだ。
「なら答える。俺は
」

第2話 戻ってきた。かに見えた日常

「おう瀬上。うーす」

「……えーっと、修司のそっくりさん？」

「いやいやいや。どつからどう見ても本人だつて」

「しゅ、修司！？あんなんでこんな早く学校きてるの!？」

「失礼な。俺だつてたまにやあ早起きするよ」

「あー私今日きつと厄日ね」

「人を黒猫みたいに言うなよ」

ほんと失礼な奴だなあと、俺はため息をつきながら自分の席に着く。

「ん？何かいつもより元気くない？」

「別にそんなことないけど。まあ朝だからテンションも上がってないのかもな」

「……ふーん」

次の日の金曜日の朝。久々に30分前に教室に入るというまあ確かに俺にしちゃあ珍しいことをしたら予想通り瀬上に出会った。

「ところで瀬上、朝練は？雄馬はもう行ってるんだろ？」

このカップルは毎朝お互いの朝練の為にしよに登校してたりする。

……なんかむかつくので後で雄馬殴つところ。

「ええ。雄馬は今度の団体戦近いからね。私の方はたまたま休みだったの」

瀬上は肩をすくめていった。

あいつは中学のときから空手をやっており、腕前は県大会で優勝するほどだ。

そして高校でも当然のごとく空手部に入って先輩達をも凌ぐ強さを発揮しているらしい。

本来なら先輩方から妬まれたりもしそうなものだが、あいつは人付き合いがうまいからそんなこともないだろう。

「なるほど。一年でレギュラーとはさすがだな」

「ま、あいつにはそれしかとりえないしねえ」

「おっ？彼氏褒められて照れてんの？」

珍しく瀬上をいじれるネタを見つけてテンションが上がる。

「ねえ知ってる？雄馬から聞いたんだけど、手刀って相手の目を擦って失明させるパターンもあるらしいのよねえ」

「いやー！俺は綺麗な瀬上をずっと見ていたいから遠慮しとこうかなあー！」

そして速攻後悔した。

「ふふっ。ありがと」

やばい。一瞬般若が見えた。あの瀬上と付き合える雄馬はやっぱり凄い奴かもしれない。

「ガラガラガラ」

俺が（不覚にも）雄馬を見直していたとき、誰かが入って来た。

「あっ、お、おはよー」

「……」

こりやまた珍しく瀬上が挨拶で噛んだ。まあ俺以上に予想外の奴が登場したからしゃーないか。そしてその人物はチラッと一瞥して自分の席へ座る。と、思ったが途中で止まる。俺達は何だ？と顔を見合わせていると

「……はよ」

とても小さかったが、きちらを向いて確かにそう呟いた。そして席に戻って、いつものように外を眺め始めた。

（い、今の挨拶だよな？）

瀬上がアイコンタクトで話かけてくる。

（ああ、そうだろうな）

（それ以前に、橘さんが30分前どころか遅刻しないで来たことあったっけ？）

（……いや、俺の記憶ではないな）

（やっぱり私今日厄日だわ）

（お前ほんと失礼だな）

この間、かかった時間は1秒。長年の付き合いは伊達じゃない。横で「冗談でしょう？」と笑いかける瀬上を横目に、橘を見る。俺は宣言通りに橘が来たことに何故か戸惑いながらも昨日の出来事を思い返していた。

「なら答える。俺はー」

「断る」

「・・・っ」

彼女の目尻が下がる。

「悪いけど、友達にはなれない」

「そ、そっか」

彼女が悲しいそうな表情をするが、それも一瞬のこと。

「あ、ありがとうございます！ちゃんと答えてくれて。あっ！今口ープ外すからちよっと待ってて下さい」

橘はまたあのぎこちない笑顔をした。何故かその表情を見て苛ついてしまう。そんな自分の感情を押し殺して俺はロープをほどいてもらう。

「じゃあ帰るわ。また明日な」

言葉数少なく俺は彼女に背を向け歩き出す。ドアノブに手をかける為には右手を出す。が、その右手はドアノブを掴むことはなく、俺は立ち止まってしまった。理由はわかってる。また自分が『余計なこと』を言うべきか悩んでいるからだ。

「あの・・・！」

そんな葛藤している俺をよそに彼女が叫んだ。そして俺の反応を待たずに続けて言う。

「お、教えて下さい！どうして、どうしてダメなんですか？」

振り向く。彼女は真っ赤になって震えていた。その下がった目尻に涙を溜めて。

俺よりも背が高く、キリツとした顔立ちに加えて左目に傷のある彼女。

ケンカが強く、常勝無敗との噂がある彼女。

無口で、無表情で、いつも独りで外を眺めている彼女。

俺は何となくだがそんな彼女は精神的にも強いんだろうと思っていた。そんな彼女が今にも泣き出しそうな顔をしている。俺にはそれがとても儚く見えた。

でも。

それでも。

彼女は目を逸らさず、逃げ出さず、愚直なまでにこちらをまっすぐ見ている。彼女は何に怯え、そして何に立ち向かっているのだろうか。今の彼女か、普段の彼女か。どちらの彼女が本当なのかはわからない。

でも、それは『他人』の俺には関係ないと、無理やり言い聞かせ目線をそらした。

「橘はさ、友達に何を求めてるんだ？」

「え？」

きよとんとする彼女。「『それ』を言うのは止めておけ」という自分がいる。そんなことせずにこのまま無視して帰った方がお互いの為だと。だけどここのまま帰ることなんて出来ないし、かと言って『それ』を言うことも出来ない。だから俺は『それ』ではなく「建て前」を言う。

「無理やりこんなとこ連れて来て。両手両足ロープで縛ってよ。犯罪紛いの脅しで友達つくって何がしたいんだ？はつきり言ってお前、異常だよ」

他にもいるんな選択肢があったのだろう。もう少しマシな言い方をするとか、その場しのぎの適当な言葉を並べて逃げ出すとか。それでも、不器用で臆病な俺にはこの選択肢しか選べなかった。「建て前」という名の刃を振り回すことしか。相手を拒絶するため、そして自分の本音を隠すため。そう、『自分』の為に相手を傷つけている。

「俺は友達を自分と同等には扱わない、例えば、友達を脅して従えよう」としているような奴とは友達にはなれない。いや、正確には

なりたくない」

相手に振りかざしたはずの刃が自分に刺さった気がした。彼女は小刻みに震えて下を見ており、両手は悔しさからか怒りからかギョツと握り拳がつくられていた。これで橋も俺に幻滅しただろう。もしかしたらキレて半殺しにされるかもしれない。俺は腕っ節に自信があるわけでもないの、常勝無敗と名高い彼女とやり合ったら確実にボロ負けだろう。だけどこんな俺にはそんな結末もお似合いかと1人納得する。今度こそ右手がドアノブを掴む。そして

「わかりました！」

声を聞いた。

帰ろうとしていた体が、急な大声にびくつき、驚きのあまり反射的に振り向いてしまう。下を向いていた彼女があげた顔は何故か――

「その勝負受けて立ちます！」

何故か、すごくいい笑顔で輝いていた。

「へ？」

今度は俺がきよとんとする番だった。

「叱咤激励ありがとうございます！「友達と仲良くなるなら相手を知る」と確かに本にも書いてありました！この場合は普通を知ることだったんですね！」

何やら彼女は力説しだしたが、俺はそれどころではないほど混乱していた。

「いや、ちよっ……」

「今すぐには無理だけど、1年！……いや、3年、ひよっとしたらもつとかかるかもしれないけど。それでも！私、必ずやり遂げて見せます！そしてこの勝負に勝って見せます！」

彼女は気合いを入れたのか、左の拳を天に突き上げた。

「そしたら、そのときもう一度お願いさせて下さい！「友達になつて下さい」って」

花が咲いたようとはこういうことをいうのだろうか。そう言った彼女は満面の笑顔だった。

「……………」

いろいろ言いたいことがあった筈なのだが、橘の笑顔に思わず見とれてしまった俺は返事をするのも忘れていた。

「今日は本当にありがとうございました！」

ぺこりと元気よく頭を下げる。

「それでは普通になるための作戦を立てますので、今日はこれで失礼します！」

そしてしゅたつと片手を挙げ、橘は「本当にありがとうございましたー」と元気よく走り去って行った。

ぽつんと1人取り残された俺。今の心情を四字熟語(?)で例えるなら「台風一過」が妥当だろう。彼女は俺の脳内を荒らすだけ荒らし回って、訳のわからないまま帰っていった。

ようやく素に戻った俺はほっと一息つく。するとそれをきっかけにどっと疲れが噴き出してきた。俺は近くの壁にもたれかかる。

「わけわかんねえよ」

思わず「本音」がこぼれた。さっきの発言を勝負の申し込みと思える彼女が。あそこまで酷いこと言われたのを叱咤激励と受け取る彼女が。そして、3年もかけてでもまだ俺なんかと友達になろうとしている彼女が。

「ほんと、わけわかんねえ」

壁にもたれ掛かったまま、ずるずると腰が落ちて地べたに座り込む。さっきまで怒涛の展開だったので、もう1度落ち着いて考えてみた。考えれば考えるほどおかしな話だ。急に意識が飛んで、目が覚めたらロープでぐるぐる巻き。誘拐されたと思ったら犯人は普段とは性格の違うクラスメート。そして犯行理由が

「友達になつて下さい、か」

普段と今日の彼女、どちらが本当なのか。本音を言わなかったこと。何故俺なのか。想像以上に考えることが多くて頭がパンクしそうだ。「やっぱまた今度にしよう」

彼女の話では時間がかかりそうな感じだったので俺もじつくり考えていこう。ふと、座った態勢のまま顔を上げる。ゴンと壁に頭をぶつけたが気にせずに見上げると。

「うおっ、もう夜か」

ところどころ穴が空いている廃工場の屋根。その穴からは見えたのは、綺麗な夜空だった。

第3話 後の祭り。でもそこからが大事

「パシヤッ」

昨日を思い返していた俺は、その電子音で我に戻る。すると何故か瀬上が俺とのツーショット写メを撮っていた。それだけならまだよかつたんだけど、ちよつと見逃せないことが。それはお互いの顔と顔の距離およそ5センチだったりすることだ。

「うおっ、な、何してんだ？」

女性の顔がすぐ触れる位置にあったことや、ここまで近いづかれても気付かなかつた自分が恥ずかしくて顔が赤くなる俺。

「いやー、修司がばーつとして反応ないから丁度いいかなあって」
携帯を弄りながら話す瀬上。幸い赤くなつたことはバレていないようだ。

「どういうこと？」

俺はこのチャンスで自分の平静を取り戻しながらたずねる。

「前々から思ってたんだけど、昨日のことで確信に変わったわ。雄

馬は私をぞんざいに扱い過ぎなのよ」

「いや仮にそうだとして、何でさっきの写メが関け・・・おいちよつと待て」

落ち着いてきたところで俺はようやく気が付いた。瀬上がやるうとしていることに。

「ちよつと携帯貸せ」

俺の想像通りなら本来なら速攻で気付くほどの危険度Aの事柄。それが思わぬハプニングで出遅れてしまった。まさかこれを見越してわざとやってるんじゃないだろな？

「ん？はい」

意外にも素直に従う瀬上。俺の思い過ごしか？と思いつつ携帯を見ると画面にはこんな文字が並んでいた。

『送信完了』

「ごめん。もう送っちゃった。てへっ」

舌を出して瀬上が謝っているがそんなことはどうでもいい。問題は
何故瀬上が謝っているかだ。

問題です。

この4つの情報から見いだせる未来を予測せよ。

成功報酬・危機からの回避の可能性アップ。失敗罰則・デッド

1・顔がくつつきそうなツーショット写メ

2・送信完了画面が出ていた携帯電話

3・こちらに謝ってきた瀬上

大ヒント

4・瀬上には彼氏がいる

答。瀬上の彼氏・大倉雄馬が怒り狂う

「ごめん、俺選ばれし勇者だったらしいから魔王討伐してくる」

小学生が考えるような設定を口にしてこの世の限界スピードで逃げ
出す俺。

「その旅、俺も連れてってくれよ」

が、ドアの前にはすでにこの世のものとは思えないオーラを纏った
魔王がいた。

「や、やあ雄馬。悪いがお前は連れて行けないんだ」

さつきから冷や汗が止まらない。

「そりゃないぜ親友？俺とお前の中じゃないか。それに1人より2
人の方が可能性は上がるだろ？」

こいつ普段は体張ってまで瀬上のこと弄ってるくせに、嫉妬と独占
欲がメーターマックスなんだよなあこれが。その嫉妬に怒り狂った
魔王（雄馬）がじわじわとにじり寄ってくる。それに合わせて後ろ
に下がる俺。いやだって相当怖いんだぜ？

「だ、だっってお前を死なせたくないし。雄馬には瀬上っていう大事
な人がいるだろ？」

言った瞬間にしまったと後悔した。今まで無駄なあがきながらもな
んなベタな設定まで出してせっかく時間を稼いだのに、自分からそ

つちの話題に戻すようなこととしてどうするんだよ！

「ああそうだ俺には彩華がいる。それがわかってて何で「どうおりえー！」

殺す気で右ストレートを放った。罪悪感はちよびつとだけ。だけど雄馬は左手一本でいとも簡単に止めてきた。この化け物予備群が。

「うおーい勇者様。こりゃあいつたいどうということだ？」

雄馬が俺の拳を握り潰さんばかりに力を込めて言う。

「いや、その、だね……。そう！魔王の魂が雄馬に乗り移ったんだよ！だから親友の俺がお前を殺して悲しみの連鎖を断ち切って見せる！」

勇者修司編スタート

「なる程。じゃあ俺がお前を殺しちまってもそれは魔王様のせいだよなあ？」

「負けるな雄馬！自分を信じろ！俺はお前を信じてる！」

だって雄馬は俺にとつてかけがえのない友達だから。

「今までいろんなことがあった！だけどそのたんびにお前は俺を信じて友達でいてくれたじゃないか!？」

「・・・修司」

いつの間にか周りに軽く人だかりが出来ているけど、俺は気にせず続けた。ありつたけの思いを込めて。

「もう一度言うぞ!？俺はお前を信じてる!だからお前も俺が信じろお前を信じろ！キック！」

そう。ありつたけの死ねという思いを込めて渾身のローを放った。

後悔？んなもんより自分の命。世の中死ぬか死なすかだ。

「お前の考えはお見通しだ。言い残すことはあるか？」

それすらも雄馬はガードしていた。どうやら俺は死ぬ側らしい。雄馬は完全に戦闘態勢に入っており、もう隙をつける可能性は無さそうだ。全てを諦めて俺は言った。

「雄馬。今から言うことはとても大事なことだ。だから真面目に聞いて欲しい」

「何だ？」

「後遺症が出ない程度にお願いします」

「善処する」

It's a bloody party time. (血のパーティーの時間です)

返事が出来ない、ただの屍になってしまったようだ。どうも右片修司です。雄馬にボコられた俺は只今地べたに這いつくばってます。

今回は俺なんも悪いことしてないのに。俺をこんな目に合わせた張本人である瀬上は雄馬のやきもちが見れて満足したのかホクホク顔で、雄馬は雄馬で俺をボコって鬱憤がはれたらしくホクホク顔だ。

このホクホクバカツプルめ、南極行つて凍り付け。

「ところで修司は何で彩華にいいよるといふ身の程知らずもいいとこなことしたんだ？」

「・・・百歩譲つて俺が言い寄つてたとして、理由なんて幾らでもあるだろ？瀬上は美人だし人当たりもいいし」

もう弁解するのを諦めて素直に自分の意見を言った。よっこらせと立ち上がって埃を払うが、思ったよりも汚れてなくてホツとした。

今週の掃除当番の子はサボらずに頑張ってくれてるんだなあ、ありがとう。

「確かに彩華は俺の自慢の彼女だが、みんな非常に大事ところを見落としてるぞ？」

俺が掃除当番に感謝していると、雄馬がこんなことを言い出した。

「ん？瀬上つてなんか欠点あつたっけ」

んーっと、勉強出来るしスポーツ出来るし性格いいし・・・何か苦手なものもあるのか？瀬上も心当たりがないらしくきよとんとしている。そんな悩んでいる2人をよそに雄馬は言った。

「ああ。だつて胸は皆無なんだぞ？」

教室内の気温が5度程下がった。雄馬、お前はいつもその呪文を唱えては半殺し状態にされてるのにいつになつたら学習するんだ？それともあれか？逆に殴られたくてわざとやってるのか？なら納得だ。

だけど容量用法はしつかり守れよ？なんてったって般若を呼び出す呪文なんだから。その呼び出された瀬上は、人様には決して見せられない笑みで「ふふふっ」と笑いながらじわじわとにじりよる。俺は2人から離れながら雄馬はどんな命乞いをするのか参考にしようとしていると

「そうか！さては修司！お前貧乳好きやぶべっ」

あっ、拳が顔面に突き刺さった。自分から死を早めにいくとは見上げたマゾヒストだけど、俺は殴られて悦ぶ人じゃないしあれじゃあ参考にならないな。しかし、俺は今日新たに「バカは死ななきゃ治らない」は本当だったんだなと身（雄馬）をもって学んだ。俺は雄馬がせめて来世では賢い子になりますようにと、目の前で繰り広げられている惨劇に目を瞑り黙禱を捧げた。

「今日の日替わりは何だろなーっ」と

今はみんなうきうき昼休みタイムで、俺のテンションもアゲアゲだ。

「ほんと？ーいね」

「だってーだし」

「あははっーね」

「・・・き、昨日はコロッケ定食だったから今日は唐揚げがいいなー」

うちの学食はご飯・味噌汁・主菜に漬け物がついて300円と破格の値段が学生に大人気だ。

それが理由かは知らないけど、よくマンガであるような購買戦争なんかは起こってない・・・現実であんなの起こってたら俺なら通報するけどな。まあそっちもそこそこ人気があるみたいで毎日完売はしてるそうだけど、ご飯派の俺としてはやっぱり学食だ。

「もう、ーして」

「ははっ悪い悪い」

そして現在、朝に受けた傷が回復してきた俺は雄馬と瀬上を連れて食堂に向かっていたりする。てかぶっちゃけた話をすると、俺は1

人で食べたいんだけど2人が勝手に着いて来るってのが現状だ。別に1人が好きなロンリーウルフを気取ってるわけじゃないぞ？ただ一緒に居たくない理由があるだけなんだよ。察しの良い人はおそろくもう気付いているだろう。俺は我慢出来なくなり、結果はわかりきっているが聞いてみた。

「なあ、せめて今から30分でいいから俺を除け者にしてイチヤイチャすんの止めてくんない？」

「無理」

「はあ、さいですか」

こうなるってのはわかってたけどさ、やっぱりおかしくない？いや、雄馬があれだけの暴力を受けて生きているのはもうつつこまないとして、イチヤイチャすんなら絶対俺いらないうっていうよりむしろいい方がいいじゃない。これはあれだな、俺への新手的イジメだな。よしつ、今日の放課後は雄馬を殴って逃げよう。せめてもの仕返し俺が決意を新たに後ろにいる2人の甘々タイムを乗り切ろうと意気込んで食堂に乗り込む。

「おばちゃん。日替わり定食1つ」

「駄目です」

今の発言はおばちゃんが言ったわけでも俺が一人二役やったわけでもない。ようするに別の所から発せられたってことだ。俺は「何でだよ!？」と文句を言おうと振り返る。だって日替わり定食は誰にだって食べる権利はあるんだぞ!？強制的にバカップルを見せられるわ日替わり定食食えないわで俺は何に希望を持ってばいいんだよ!？怒りを露わにしながら声の主を見た俺は、素の表情で固まってしまった。

「もう一度言いましょうか？駄目って言ったんです」

そこにはクラスの、というよりは学年の女子のリーダー的存在、布施葵せあおいがいた。

彼女の見た目はつり目に長い髪をポニーテールにしたいかにも体育会系のスポーツ少女で、中身はリーダーシップはあるけど頑固なの

がたまに傷だそうだ。情報提供者は瀬上。本人曰わく一年生ながら泣く子も黙るその貫禄がすごいらしい。補足すると、お隣のクラスの学級委員さんで瀬上とコンビ（俺が勝手に決めつけた）の柏木と同じクラスだったりする。

「・・・何でだ？」

このセリフを言ったのは実は俺じゃないんだよなーこれが。

「胸に手を当てて考えてみたらどうですか？理由なんていくらでもでてくると思いますよ」

よし、ここで状況を整理させてくれ。

俺は食堂に入り、カウンターで日替わり定食を注文した。ここまではバカップルがうつとうしいくらいで平和な日常の1ページだ。ところがどっこい（こらそこ古臭いとか言うな）、ここで「駄目です」と発言する新たな人物が登場。そのセリフにムカツときた俺は、本能のおもむくままに声のした方へ振り返る。すると俺のすぐ横で対峙する布施とあともう1人、なんと橘がいたのだ。要するにあの発言は俺にじゃなくて橘に対してで、さっきの「何でだ？」ってのは橘が言ったということだ。要するに俺の勘違いだったわけだ、お恥ずかしい。

これで無関係だと判明した俺は心置きなく日替わり定食を食べたいところんだけど、ところがどっこい（このセリフちよつと気に入ってた）、そもいかなかったりする。何故なら布施と橘の距離はおそらく1メートルなく、そして俺と彼女らの距離も1メートルもないということとはだ、端から見たら「3人」が揉めているように見えるわけだ。今回の3人つてのは説明するまでもないけど、布施と橘と・・・俺だ。つまり、食堂の注文するカウンター前で2人が争っている中に俺が気付かず突入してしまったと・・・俺、もーちよい周りを見ような。2人は睨み合ったまま微動だにせず、俺は逃げる夕イミングを逸してしまっただけだ。だってここで逃げたら「当事者のくせに女の子2人をほって自分だけ逃げだした奴」と誤解されてしまうし、それ以前にこの空気で逃げ出せるほど俺に根性はない。

そうですね、どうせチキンですよ、だから誰か教えてくれ。俺はどうすればいいんだ？

「YESかNOとも言えないんですか？よくそれで人を昼食に誘えましたね」

布施が表情を変えずにさらりときついことを言い、それを橋は何も言わずにただじっと布施を見つめている。

ふと何故か、その姿が昨日の廃工場での彼女とだぶって見えた。

只今食堂はどんどんシリアスな展開へと突入していて、学校でもいろんな意味で有名な橋が揉めているので食堂にいる生徒はみんなカウンターにいる俺達を注目してシーンとしている。おそらく「あそこにいる男は何なんだ？」とか思われてるんだろうな。正直に言います。内心結構泣きそうです。

俺はズキズキと痛む胃をさすりながら周りに助けを求めようと見渡すと、ふと瀬上と雄馬の姿が目に入った。そうだがあいつ等がいたじやないか！あのバカツプルなら友達である俺のためになんとかしてくれるに違いない！なんてったってあいつ等は「まこと」の「とも」と書いて真友しんゆうと読む2人だからな！俺は最後の希望の光である2人にすぎりつくようにアイコンタクトで（助けてくれ！）と飛ばした。お願いだから気付いてくれ！するとさすが真友達、すぐに気付いてくれて2人ともアイコンタクトで（わかった）とこちらに頷いてくれている。よし、成功した！これであいつ等がなんとかしてくれるはずだ！頼んだぞ！

俺の期待を背負った2人は一度お互いを見て頷き合う。そしてこちららに向き直り、俺のために「

「.....」

黙祷を捧げてくれた。

そして2人はアイコンタクトで言うてくる。（これでいいだろ？）でしょ？）と。

「用件は以上ですか？なら昼食をとりたいんですけど」
俺は久々にキレた。

「いいわけあるかあ！」
勿論あのバカップルに。そして場が凍りついた。

第4話 激突。そして・・・？

もし仮に

穴があつたら

埋まりたい。

季語なんて考えてないので悪しからず。俺の今の状況は、あまりの恥ずかしさにカチカチなんてもんじゃなくギアチギヤチに固まっていて、それに続いて自分の顔がものすごい勢いで熱くなっている。やばいやばいやばいやばいどうする俺！？俺が急に叫び出しただけなら思い出し興奮とかテキストなことと言って逃げれた可能性があつたかもしれないけど、偶然にも上手いこと2人の会話に入ってしまったため食堂中の視線を独り占めしているからこの作戦は無理だ。「さつきからあえて触れませんでしたけど、あなた何ですか？」俺が極限状態に陥ってパニックしていると布施が話かけて来た。や、やばい！まだ何にも思いついてないぞ！？えーっと・・・そうだ！とりあえず時間を稼がないと！

「えっと、右片って言います」

とっさに思いついたのはた自己紹介をだらだらして時間を稼ぐ方法。かなりベタだけど贅沢はいつてられないし、これで少しは時間が

「それはわかっています。右片修司君ですよね？」

稼げなかった。

「は、はい」

一瞬何で俺の名前を知ってたんだ？と思っただけど、それを考えてる余裕なんて全く無いので無理やり忘れる。

「私はあなたは「誰ですか」ではなくあなたは「何ですか」と尋ねたたんです」

やべえ、会話に割って入られたせいかな布施の機嫌がすこぶる悪い。

今なら瀬上が言ってた泣く子も黙る貫禄って意味がわかるけど、出来ればもつと別の形で知りたかった。

「黙ってそこにいたかと思えばいきなり叫んで。あなたは私達と何か関係がありますか？」

「いや、それは」

当然布施の言い分が正しいので、俺は思わず黙り込んでしまう。

「関係ありませんよね？なら部外者は黙ってて下さい」

「は、はい」

そう言っただけ。そんな俺の心の中で埋め尽くされてるのはたった一言。

助かっただけ！！

まさか向こうから助け舟がくるとは思わなかった！もし「んなわけあるかあ！」発言のことを聞かれたら本当にやばかった。だって今更「布施に言っただけじゃなくてその後ろにいるバカツプルが・・・」と言ったところで誰もその場しのぎの嘘だろうと信じてくれないだろうし。俺はホッと一安心して肩から力が抜けた。これはあれだな、きつと日頃の行いが素晴らしい俺のために神様が助けてく

「どうせあなたはこの見た目だけの彼女を庇って自分の株でも上げようとしたんでしょうけど、はっきり言ってさっきの行為は最低です」

その言葉が心に引っかかり、イラつとした。布施が冷めた目線で俺を見てくる。

「知っているでしょう？彼女がどんな人物か」

そりゃあ同じクラスだし知っている。もちろん彼女が女子に嫌われ始めたあの事件も。それは入学式が終わって次の日の学校初日、当時から無敗伝説があつてみんなから距離を置かれていた橋に勇気を出して話しかけた女の子がいた。その女の子を橋はあろうことかガン無視して泣かせた。それだけならまだ良かったんだけど、泣いている子をそのまま放置して帰ったのだ。そしてそれを友達から聞いて正義感が強い（瀬上曰わく）布施は激怒し、その泣いている女の子とは面識がなかったんだけど「あなたはいいことをしようしました。それは胸を張っていいことです」と慰めた。そして橋に対して

は「彼女は人として間違っている」と次の日、遅刻して橋が来たと聞くと周りが止めるのも聞かずにすぐさまうちのクラスに乗り込んで来た。みんなが「いったいどうなるんだ？」と固唾を飲んで見守ったが結果は呆気なかった。ノーゲーム、試合すら始まらなかったからだ。何故なら橋は昼休みが終わる最後まで無視し続けたからだ。そして布施はそつちがそうくるならと『目には目を、毒には毒を』といわんばかりの行動を起こした。こちらは無視をすると。ここから先は集団女子の恐ろしさ本領発揮で、他の女子は当然布施の見方をしたので学校2日目にして橋に関わろうとする女子はいなくなり、男子も女子に恐れて声をかけなくなり、彼女の周りはいつもがらんとしていた。そして彼女は何故かは知らないが毎日遅刻するようになった。

「あのときは自分から拒否しておいて今更一緒に弁当を食べよう？ふざけているにも程があります」

布施の言うことは理論的にも感情的にも正しいだろうし、俺もそう思う。

「はつきりいつて私は彼女が嫌いです。だから一緒に昼食などとりたくありません。そして右片修司さん、あなたにも失望しました」
今度はこつちに矛先が向いた。

「周りがあなたのことをどう思っているかと、私は一目置いていました。ですがこんな人を庇うとはあなたもその程度の人物だったのですね」

イライラする。お前に何がわかるんだよ？と。だけど我慢して耐え抜くんだ俺。布施はあの事件から女子から絶大な支持を得て、男子からもその見た目とルックス、そしてそのリーダーシップから人気がある。そんな奴に噛みつきでもしたら、俺の学校生活たまったもんじゃない。

「私に人を見る目はなかったようです。あとこれはアドバイスですが彼女に関わらない方が賢いですよ」

・・・我慢だ。イライラするな。感情を押し殺せ。そう自分に言

い聞かせながら、怒りの気をそらそうと橘の方を見ると、彼女は俯いていた。

そして、見えた。

いや、見えてしまった。

みんなに背を向ける形になっているし、布施は横にいたのでおそらく俺以外は誰も気付いてないだろう。

その彼女の表情に。

「おそらくあなたのような人物じゃバカを見るだけでしょうから。それでは今度こそ昼食をとりますので失礼します」

言いたいことを言えて満足したのか、布施はそういつてこちらに背を向け周りの女子を連れて出口に向かう。はあ、ようやく終わる。直ぐカツとなる性格である俺にしちゃよく頑張ったよなあ。よし、帰りに自分のご褒美にプリン買って帰ろう。あとは彼女が食堂から出ていくのを数秒間待てばいいだけだし。そう、数秒待つだけなんだ。

「ちょっと待てよ」

だが、その数秒すら我慢出来なかった。だってそうだろ？お前に何がわかるんだよ。

始めに訝しげに取り巻きが、そして最後に布施が堂々とゆっくり振り向く。

「何ですか？いい加減昼食をとりたいんですけど。ひよっとしてバカにされたのを怒ったんですか？」

ここで布施は始めてニヤリと表情を変えた。うわあ、こいつ絶対ドのつくSの方だよ。いじめっ子オーラガンガン出てるし、何より貫禄がハンパねえ。普通の俺ならビビってそっこう逃げ出してるだろうけど、今回は例外だ。それにこういうタイプは、あいつで慣れている。

「なあ、知ってるか？」

「何をです？」

布施が態度を崩さずに真っ直ぐこちらを見て言う。それを見て決心

が少しぐらつき、それにつけ込んで弱い自分が訴えかけてくる。

『今からでも間に合うから止める、そんなこと言っても意味ねえよ』
潰す。

『二年前に似たようなことをしてあいつを傷つけてしまったじゃないか。そんな思いもつたから廃工場でも桶を冷たくあしらったんだろ？』

潰す。

『今ここで我慢出来なかつたら今までの苦労がパーじゃないか』
また潰す。

『それにこんな最低な俺が今更何するんだよ』

挫けそうな心を奮い立たせて、弱音を一つずつ丁寧に潰していく。
そして全て潰し終わったそこには、『本音』が残っていた。

「桶つてさ、見た目通りスポーツが得意なんだつてさ」

「はい？」

布施が何言ってるんだ？みたいな顔をしているが、俺は構わずに続ける。

「んでタウンページを余裕で破けるらしいぞ。ここまできたらゴリラだよな」

「ははっと笑う俺とは対称的に、周りはざわざわだし布施の目はすうーっと細くなった。」

「あとカニは食べにくいから嫌いらしいぞ。さすがのカニも味以外で文句言われたらかわいそうだよな」

自分で言ってる意味がよくわからん。まあ細かいことは気にしない方向で。

「何が言いたいかわかりませんが、私は彼女の事を知りませんし知りたくもあり」

「相手の事よく知りもしねーでベラベラ語ってんじゃねえよ」

お前に何がわかんだよ。橘の何が。

「……すみません、今何と言いましたか？」

先ほどまでと同じ無表情で敵意100パーセント。聞き直したという事はここで謝れば許してやるという意味を込めたのだろう。逆にいえば、ここで一步でも踏み出せばもう戻れない真っ向勝負が始まるということだ。よくある言葉で「しないで後悔するよりやって後悔した方がいい」ってのがあるけど、俺からしたらあんなの真っ赤な嘘だ。現に俺は二年前に思いつきつてあることをしたが、それがあいつを傷つけることになりすごく後悔した。もし過去をやり直せるなら真っ先に二年前に戻るくらい何もしなければ良かったと思っっている。だからこんなことしたらすんごく落ち込むんだろうなあ。

「よく知りもしない橘の事を語ってんじゃねえよつつたんだ」

それでも退く気はないけど。明日は土曜で学校ないしバイトもたま休みだから思いつきり落ち込もう。

「私が橘さんをよく知らないのは事実ですが、私が先ほど言ったのも事実しかありません」

布施は軽く笑ってバカにしてくると思ってたけど、意外にも真正面からやり合いに来た。

「じゃあ何で橘が顔だけの奴なんてわかるんだ？」

「さつきも言っただでしょう。彼女は独りであるところに好意で話しかけてくれた相手を泣かして帰るような人ですよ？その人のどこにいい要素があるんですか。むしろ顔だけでも褒めたところに感謝して欲しいくらいです」

布施は無表情で言っただけで、それを冗談ととったのか取り巻きがくすくすと笑う。

「じゃあお前は何で橘がそんな行動とつたか知ってるのか？」

それを聞いた布施は「はあ」と溜め息をついてかったるような態度をとる。

「さあ？虫の居所でも悪かったんじゃないんですか」

そのセリフに今度は周りからも笑い声上がる。俺は周りを無視して布施だけを見る。そして言った。

「へえ。じゃあお前は何でかわからないからって勝手に理由を決めてつけて相手を悪者にしたのか」

布施がぴくりと反応して真剣な目で見返してきた。

「……私が悪いと言いたいんですか？」

布施の眼光に射抜かれるが、それを真つ向から見返す。

「誰がいつ善悪の話をしたんだよ。んなこと言ったら怒ったお前がクラスに乗り込んだとき理由話さず無視し続けたあいつの方がよっぽど悪いじゃねえか」

布施は少し目を丸くし、そしてすぐ無表情に戻る。

「ではいつたいあなたは何が言いたいんですか？」

「だから始めに言っただろ。相手のことよく知りもしないで語ってんじゃないえって」

そして互いに無言になり、じつと睨み合う。いつの間にかざわついていた食堂はしーんとしており、昼休み終了5分前のチャイムの音だけが響き渡る。みんなが固唾を飲んで見る中、この均衡状態を破つたのは――

「布施葵はいるか!？」

いつぞやのチアガール、第三者の柏木優奈だった。てか前回もこんな登場パターンだったなこの人。

「おお食堂にいたのか。探すのに手間取ってしまったぞ。そもそも授業開始まで5分きつっているのにこんな大勢で何してるんだ？」

柏木が「何だ何だ？」とキョロキョロ周りを見渡している。

「貴方には関係ないことです。それより用件は何ですか？」

「相変わらず冷たい奴だな。友達無くすぞ？」

布施が俺から柏木に視線だけ移す。

「用がないなら邪魔しないでください。取り込み中です」

「そんなに睨むな。親切心にちよっとしたジョークを混ぜただけではないか。用件は我らの担任の言つてだ。職員室に来てと呼んでい
る」

「……そうですか。先生が呼んでいるというのであれば無視出来ませんね」

布施が柏木から目線を俺に戻して軽く目をつぶり、溜め息をつく。

「話は途中ですが急用ができたのでこれで失礼します。続きは次の機会にでも」

そして俺を一瞥してからそう言つと、目線をそらし出口に向かって歩き始めた。

「やべっ、授業はじまるぞ」

そんな誰かの声が聞こえ、みんなが食堂に掛かっている時計を見ると授業開始3分をきつていた。それを皮切りに集まっていた生徒達も「やばいつ」とか「遅刻するっ」とかいろいろ言いながら足早に食堂を出ていった。そして食堂には俺と雄馬と瀬上の3人だけになった。……3人？

「あれ？そーいえば橘は？」

当事者の1人がいつの間にかいなくなっていたのに気付いて思わず口に出していた。

「あー、みんなと一緒に出てったよ。えっと、その、ずっと下向いてたけど」

何だか言いにくそうに瀬上が言う。

「……そっか」

それを聞いた俺は橘が出て行ったであろう出口を見る。そして何があるわけでもないけどそつちをじーっと眺めた。

「なあ結局学食で昼飯食えなかつたし、パーツと外食しようぜ！」
そんなプチ黄昏状態であった俺の右腕を雄馬がガシツと取りながら大声で提案してきた。

「は？いや確かにかなり腹は減ってるけどさ、普通に午後の授業あ

るし」

するとタイミング良く「キーンコーンカーンコーン」とチャイムが鳴る。

「ほら言ってるそばから鳴っちまった！急いで教室戻るぞ！」

「いやーもう鳴っちゃったから間に合わないね残念だなあ！」

雄馬の手を振り切って走り出そうとしたら、左腕も瀬上にかしつと掴まれた。

「お、おい！言っとくけどサボタージユといういわゆるサボリなんて行為俺は絶対嫌だからな！」

「ねえ雄馬何食べようか！？」

「そうだな！徐々にイタリア料理の王道パスタなんてのはどうだ！？」

「それいいね！じゃあさっそくレッツゴー！」

俺を無視してどんどん話を進めていくバカップルを見て俺は思った。あ、あいつら、ひよっとしなくても完全に俺を舐めてやがるな？仕方ない。確かに最近下手に出てたかもしれないし、ここら辺でいっちゃガツンと言っておくか。じゃないとあいつら益々調子に乗るしな。よしっ。俺は2人にずるずる引きずられながらガツンと言ってやった。

「俺弁当だからって1人だけドリンクバーとか嫌だからな！？俺だってパスタ食べたいし、ちゃんとみんなで弁当処理しような！？」
せめてものお願いを。最後に俺の叫び声だけが食堂に残った。

第5話 SさんHさん。その後本命へ

「どーせ俺はこの世の底辺でくすぶってる駄目人間だよ」

「いやーそんなことないんじゃないか？」

「出たよ雄馬お得意の棒読み。どうせ鬱陶しい俺なんかほったらかして早く帰りたいんだろ？いいよいよ帰っちまえ」

「え、マジで？ありがと。正直帰りがたかったんだよ。んじゃまた明日な」

「.....」

「もう冗談だろ！？そんな隅っこ行って拗ねるなって！」

「うっせ、どっか行け」

「男にツンツンされても何にも嬉しくないから機嫌なおせよ！俺達親友の仲じゃねえか！」

「俺には何も聞こえませーん」

場所は安さで有名なイタリア料理のファミレス。そこで酔っ払いのような2人のやりとりを、私は他人ごとのように眺めている。一応弁解しとくけど2人ともしらふだよ？私達未成年だし。ついさつきまでは私が修司の相手をしていたから今は雄馬と交代して休憩中。もう結構あの落ち込んでローテンションのグダグダ修司の相手をしてるけど、何度やってもあのしんどさには慣れないね。

今の時刻は7時過ぎで完全に夜になっている。何でこんな時間にいるかというと、ファミレスに着いた私達は始め修司のお弁当つつきながらパスタを食べるっていうかなりアンバランスなこととしてたんだけど、30分位たった時に今まで強がっていた修司の仮面が剥がれて一気にローテンション。そのまま5時間くらいこんなやりとりを続けている。

「もう嫌だ。ビルから飛び降りて死んで詫びるてやるう」

「バカなこと言うな。んなことしたら掃除する人大変だろうが」

まあ私達が学校をサボってまで無理やり連れ出した理由がこれだっ

たりするんだけどね。修司はガンガン自分の中に溜め込むタイプだから、たまにためた分が一気に吹き出してこんな酔っ払いのようなグダグダな感じになる。こんな状態じゃ周りに迷惑かけるだけだから無理やり会話して修司を通常に戻してるわけ。

「まっ、これぐらいしか最低の私には償う方法ないもんね」
思わず呟いていた。

「彩華！もう無理だから代わってくれ！こっちまでテンション下がっちゃう！」

「じゃあ後5分宜しく」

「5分も!？」

「俺はいつたいどうやって償えってんだよお」

「お前は何にも悪いことしてないから償う必要なんてないだろ!？
くそっ、この状態の修司を相手するたびに5分の長さを痛感するぜ
！」

私は忘れることの出来ない過去の過ちを思い出しながら残り5分を
過ごすのだった。

イライラする。

原因は勿論先ほどのやりとりだ。

「布施さん気にすることないですよ。あんな奴のことなんて」

「そうですね。あんな見え見えのポイント稼ぎ、寒気がするったら
ありやしません」

周りの子達もこれをきっかけに次々に右片君の悪口を言い始める。
おそらくずっと無言でいた私を気遣ってくれているんでしょうけど、
私がイライラしているのは別に右片君が橘さんのポイント稼ぎをし
ていると思ったからではない。……まあこの子達の言うこと
を全否定するつもりはありませんけど。私達は職員室に行くために、
階段を登らずに廊下を右に曲がる。

「やあ、布施葵。ちよっと時間いいか？」

するとそこには先に行っていたはずの柏木さんがいた。

「申し訳ありませんが職員室に行かないといけませんので。そもそもあなたが教えてくれたことですよ？」

「ああ、そのことにも関係する話でな。なあに、すぐに終わる話だ。本来なら相手にしないで職員室に向かうところですが・・・。」

「相原さん、申し訳ありませんが皆さんを連れて先に教室に戻ってください」

「そんな、私達もお付き合いますよ！」

相原さんが心外だといわんばかりに詰め寄り、周りの子達もそれに同意するように頷く。

「気持ちはずごく嬉しいんですけど私のせいで多くの遅刻者を出すわけにはいけません。相原さんお願いします」

「うう・・・わかりました。それでは失礼します。みんな、行こ」

相原さんが渋々というよりは無理やり納得した感じで頷きみんなを連れて行く。そしてすれ違いざまに柏木さんを睨むが、彼女はそれをひょうひょうとした態度で軽く受け流していた。相原さん達が階段を上がって行く足音が響き渡く。そして足音が聞こえなくなつてから柏木さんは話し始めた。

「済まないな。人払いをさせてしまつて」

「人前で言えるようなら食堂で言つてくだされば済みますからね。それで話とは何ですか？」

「ああ、その前に謝っておきたいことがある。我が担任の言つて云々の件は嘘だ。申し訳ない」

そう言つて柏木さんは頭を下げる。

「まあそうでしょうね。それより早く本題をお願いします」

柏木さんは口調こそ尊大だが礼儀のない人ではない。そんな人が教師の呼び出しを知っているのにも関わらず呼び止めたということは、呼び止めるほどの理由があるかその呼び出し自体が嘘かのどちらかだと踏んでいた。

「君は頭は良いが本当に冷たい奴だな」

彼女は始めは驚き、そして最後は苦笑して言う。

「先ほどの右片修司とのやりとりについてだ。君が感情を露わにするとは正直驚いたよ」

私達の話聞いていたということは、あの何も知らないような登場の仕方は演技だったわけですか。とんだ狸ですね。

「そんなこと言うためにわざわざ引き止めたのならこれで失礼しますか？」

「待て待て本題はここからだ。君と右片修司の話し合いの根本は橘柚希が女生徒を泣かした事件だな？」

「まあ、間違つてはいませんが。それがどうかしましたか？」

「その事件が起きた次の日、偶然にも右片修司と話す機会があつたな。私は彼の中学時代を知人から聞いてい前々から興味があつたのでいい機会だと思つて質問したんだよ。「君は今回の橘柚希の行動についてどう思う?」と」

「それで?」

柏木さんの遠回しな言い方に一層イライラしてくる。

「彼は「あんたもか」とため息をついたんだ。これは思わず言つてしまったことらしくてね。彼は聞かなかつたことにしてくれと言つたんだがしつこく食い下がつたらようやく折れてくれたよ」

「勿体ぶらないで早くしてください。こちらも暇ではないんです」
授業が始まつてしまふというのに彼女のこの余裕が理解出来ない。
そんな私のイライラが頂点に達しそうになつたとき、

「彼は言つたんだ。柏木はその泣いた子は誰か知つてるのかと」

「え?」

私は意味がわからないことを聞いた。

「そう言つたあと、彼はこれ以上は勘弁してくれとその場を去つてしまつてね。その言葉の意味がわからない私は、とりあえずその本人に会おうと橘柚希と泣いた彼女のいるクラスに行つたんだ」

彼女は真つ直ぐこちらを見つめてくる。まるで自分は真実を話していると訴えかけるように。

「結論を言ってしまうえば見つからなかった。いや、正確には存在しなかったといった方が正しいな。私はクラス全員に聞いて回ったのだが、みな自分のクラスの女の子が泣いたという認識はあるんだが、誰が泣いたかになるとさっぱりだ。まあ泣かした橘のインパクトが強かったと言われればそれまでだが、それにしてもおかしい話だろう?」

「……」

確かにおかしい。もし仮に全員が入学したてで名前と顔を知らなかったから覚えていないとしても、泣いた本人まで覚えていないなど記憶喪失になるなどしないかぎりどう考えてもありえない。

「泣いた女の子は確かに存在した。それはクラスの大半が証人だ。だが次の日には彼女はいなくなっている。これはいったい何を意味しているんだろうなあ?布施葵」

挑戦的な目で柏木さんは見てくる。可能性としては、泣いた本人は何らかの理由があつて名乗り出ることが出来ない。それとも……いや、今考えるべきことではない。それよりも確認したいことがあった。

「……教えてくれたことには感謝します。ですが、あなたは嘘までついて私を呼び出してこのことを伝えた理由はですか?」

何度考えても完璧に部外者である彼女が自ら関わってくる意図がわからない。私はおそらく答えてくれないとは思いつつも彼女に訪ねてみた。

「さあな、私にもわからん。ひよっとしたら意地悪がしたかっただけかもしれない。なんてったって私は君を敵視しているからね」
柏木さんがほくそ笑む。

「私は別に敵視していませんが?」
それを毅然とした態度で受けて立つ。何しろ敵視されるのにはなれているから。

「そんなことはないだろう。なんてったって私達は」
柏木さんは背を向けて歩き出す。

「同じポニーテールで見た目が被ってるからな
ずっこけてしまった。」

柏木さんが去り、独り残された廊下に5限開始のチャイムが鳴り響いた。

「じゃあまた月曜なー!!」

「・・・おう」

「・・・バイバイ」

ファミレスにてストレスを発散させた俺はかなりホクホク上機嫌。今ならフルバイトからの徹マンで圧勝する自信があるね。それに引き換えあのバカツプルときたら、何があつたのか知らないけどテンションがカオスと化していて、無言で帰る2人の背中には渋い哀愁が漂っていた。・・・何となく俺が悪い気がするので今度プリンでも奢ってやろう。

そんなことを考えながら一人つきりになった俺は、真っ直ぐ自分の家に帰っている・・・とこなんだけど。ほぼ毎日通っているはず道がなーんか気味悪い。月は雲で覆われているせいで全く見えなから辺りはいつもにまして真っ暗になっているし、道にはたぶんたまたまだろうけど、人っ子1人いないから聴こえてくのも俺の足音だけだ。そんな道を電気がきれかけている街灯だけがチカチカと点滅しながら頼りなさに照らしてる。

てっつれっつれー

右片修司の死亡フラグがたつた。

「いやいやいやいやんははずないから!」

脳内で流れたメッセージを急いでかき消す。だって俺だぞ?人に恨まれるような真似してないし、そもそも知名度なんて無いに等しい。そんな奴をわざわざ狙う物好きなんて普通いらないだろ。

(確かに普通ならな。だけど通り魔や無差別にっことは十分ありえるぞ?なんせ最近は何騒な世の中になつたからな)

。。。。。

「怖ーくなんてなーいわー、おばーけなーんてうーそやー」
はあ？

他意なんて全く無いただ無性に歌が歌いたくなっただけだしはあ
？何言ってるの？

「やけどちよいと、やけどちよいと、わーいかって怖いわー」

決して怖さを吹き飛ばすために「お化けなんて嘘さ〜関西バージョ
ン〜」を歌ってるわけじゃないし。ほんと勘違いしないでくれよな
それにもうあそこの十字路を左に曲がれば愛しの我が家に到着だし。

「怖ーくなんてなーいわー、おばーけなーんてうーそやー」

そう、あそこを曲がれば。。。。。

「。。。。何かあの角から異様なオーラを感じるの、気のせい、
だよな？」

表現しづらい黒いどよんとしたオーラが充満しているんだけど・

。。。。うん気のせいだ！

俺元々霊感とか皆無だしそんなオーラとか感じるわけないもんなん
んよし行くぞお願い何も出ないでくれー！ごめんなさい本当はすこ
くびびってました。後半意志がポツキリと折れながら勇気を出して
十字路に踏み込み左を見る。するとそこにはー

「。。。。はあ、だから言っただろ？気のせいだつて」

安堵からか、思わず誰に言うでもなく呟く。そこには毎度お馴染み
の道が広がっていた。あぁー、なんか今ので緊張の糸やら集中力や
らがきれてどつと疲れが吹き出してきた

「カー！カー！」

「ーっ！」

思わず体が硬直する。カラスめこんな静かなところで急に鳴かれた
らびっくりするだろうが！

空気読めよ！鳥インフルエンザにかけてフライにするぞ！当たり前
の如く食わないで放置だけどな！

。。。。でもさ、よくよく冷静になって考えてみると、この時間

帯にカラスが鳴くってかなり珍しいよな？

「・・・帰ってそっこう風呂入って寝よ」

俺は気のせいだろうと自分に言い聞かせて不吉な予兆気から目をそらす。だから前を横切る黒猫の大群からも目をそらすし、切れた両足の靴ひもなんて無視をする。・・・何だこのベツタベタな不幸の前触れオンパレードは。あれか？俺今日死んじやうのか？そんな身の危険を感じているうちに着いた我が家Ⅱ築50年のアパート2階建。ちなみに俺の部屋は2階の1番端にある。だから俺は錆びてるオンボロ階段をギシギシいわせて登りながら「俺って生命保険には入ってたよな？」と割と真剣に考える。

「ーっ！」

声を出さなかつただけでも褒めて欲しい。

俺の住むアパートは典型的な2階建のアパートで、階段をあがると20メートル弱の真っ直ぐな通路があり左側に部屋が、右側には落ちないように柵がある。だから階段を登ってる途中から1番端にある俺の部屋の前も簡単に見えるんだけど・・・いたんだ。俺の部屋のドアにもたれかかって三角座りをする人が。俺は歩いて自分の部屋の前まできて声をかける。

「・・・よう。奇遇だな」

橘柚希、その人に。

「・・・」

1回目のチャレンジ、失敗。

「いくら夏休み目前つつつてもその格好じゃ風邪引くぞ？」

「・・・」

2回目のトライ、失敗。

「え、えーっと・・・そうだつ。よく俺ん家知ってたな。知ってるのは瀬上と雄馬・・・っと大倉のことな？ぐらいだと思ってたよ」

「・・・」

3回目のアタック、失敗。3度平静を装って話しかけたけど、橘はぴくりとも反応しないで無言。ということは今は話す気はないらし

い。俺は無言で立ち尽くすが、正直気まずいっただらありやしない。だって友達になるならないの事件の次の日の昼にれがあつての今だからなあ。どうしようかと悩んだ末、とりあえず橋を観察でもしようかとそちらを向く。

「っ！」

で、そっごう目をそらした。だ、だって夏服のスカートで三角座りしてるもんだからスラツとした綺麗な足が太もものかなり際どいとこまで見えてたんだよ！あれじゃちよつと風が吹いただけで見えちゃいますって！

何がと言わないけど！何がと言わないけど！！

勢いで2回思ってしまった。反省。

よし、予定を変更して橋の方を見ず煩惱を捨て去って落ち着いて状況を整理しよう。布施が俺の部屋の前に三角座りをしているということは、俺に何か用があるのは間違いないだろう。そしてそれは十中八九、昼休みの件。ここで要となるのが『俺』に対して『昼休み』の件で『何』の用があるのか？ということだ。こんな夜のオンボロアパートの前で待ち伏せしてまでの用だ。橋にとってよほど大事なことなんだろう。

「……どっかいしょつと」

俺は通路の半分くらいのところにあるドアの前に腰を下ろして一息つく。本来ならこんな所にいたら住民の通行の邪魔になって迷惑なんだろうけど、実はこのアパートの2階に住んでいるのは俺だけだったりするのでそんな心配はいらない。ちなみに他の住民は1階に2組だけだ。まあなんせ築50年の風呂なしオンボロアパートだから人気ないのは当たり前なんだけどな。

そして俺が明日何しようかなあと考えているうちに夜は更けていった。

第6話 衝突。そして戦いの結果

「ちゅんちゅんちゅん・・・」

まだ朝日が登ってないうちから雀が鳴いている。あいつらこんなに早起きして何が楽しいんだろなあ。朝と睡欲に弱い俺としては全く理解出来ないね。ん？そんなことより結局あのあとどうなったかだつて？んー、ぶっちゃけ別にどうもなつてない。だってその話現在進行形だし。

H a h a h a !

腕時計も携帯も持つてないから正確にはわからないけど、昨日家に着いたのがだいたい9時くらいで今が雀がなっているけど朝日が登つてないことから仮に5時だとすると8時間こうやって橋と距離をとつて並んでいる。そんなブラザーにグッドなニュースだ。この「VS橋、無言不動耐久レース」は未だに終わる気配がないんだぜ？H a h a h a !・・・ぐすん。

いや、かなり睡欲に弱く、過去に限界まで起きてられたのが28時間の俺としては正直かなり頑張つてる方だぞ？だってこの記録出したときは学校があつて意識が朦朧としながら二限の音楽を受けてたんだけど、その時にトドメとなつたのが大音量で流れた「魔王」でそれを子守歌に寝たぐらいだ。

ごほんつ。話を戻そう。

そして今回は、昨日起きたのが7時で今が5時なら22時間起きていることになりあと6時間で過去最高記録に並ぶ。そんな俺だから現在眠さのあまり異常な状態になっている。

だって初めての経験だぞ？くしゃみした勢いで意識がトんだの。たまたまどこかの犬が鳴いてくれたおかげで目が覚めたけど、あのままだったら確実に爆睡タイム突入してたねうん。あー、やばい。まったくそ眠い波がやってきた。このときは何をしてもそれが原因で寝てしまいきそうだし。どーすっかなあ・・・ZZZZ。

「ねえ」

そんなとき、ようやく橘が話しかけてきた。

「・・・っ！（ビクッ）」

ね、寝てない！寝てないぞ！け、けど別にお前のために寝てないとかそういうわけじゃないからな！勘違いすんなよ！・・・よし、自分へのもものすごい嫌悪感で少し目が覚めた。

「どした？」

だってようやく沈黙状態が終わったのに、俺が寝てましたじゃ橘の勇気が無駄になっちまう。そんなことしてしまったら俺は罪悪感にさいなまれ

「・・・お腹空いた」

よし、こいつをどう殺してくれようか。俺の今までの8時間返せ。

だって流れる的におかしいだろ？こいつはM（マジで） K（空気が） Y（読めない） のか？

「お腹空いた」

橘が三角座りのままこっちを見る。うつ・・・。そ、そんな目で見たとこで俺には無駄だ！このゼリーのようにならされた堅い心はそんなことじゃプルンともしないぜ！

「・・・とりあえず俺の家あがるか？」

ゼリー粉砕。

「うん」

橘が下を見ながらすくつと立ち上がるのを見て俺も立ち上がる。そして腹が減っては戦は出来ないんだから仕方ないと自分に言い聞かせながら鍵を開けた。

「ちよつとボロいけど我慢してくれ。掃除はちゃんとやってるから俺のアパートは風呂なしトイレありの2Kで、築50年というだけあって見た目もかなりボロい。まあその分家賃も安いから文句は言えないんだけどな。ちなみに風呂は近所の激安銭湯にお世話になっている。」

「・・・」

橘がぺこりと頭を下げた入ってきて靴を脱いできちんと揃える。

「おっ」

「・・・？」

「い、いや。何でもない」

靴を揃えるのをちよつと意外だと思ってしまった。うん、失礼なのはよくない。

「んじゃそこにテキトーに座って待っていてくれ。チャーハンでいいか？」

俺は部屋の真ん中にあるちゃぶ台を指差しながら聞いた。

「・・・うん」

橘がちよこんと正座して頷く。

よし了承も得たことだし始めるか。

「材料はあるよな」

まずは冷蔵庫の中をチェック。

ご飯、

ネギ、

玉ねぎ、

ウインナー、

卵、

愛情、プライスレス

うん、ちゃんと材料あったしつまらないギャグは無視して作り始めるか。フライパンをだして油を落とし火をかけ、その間に材料を切る。先鋒・ウインナー。

「あの、ね」

橘の声が聞こえる。

「自分なりに、頑張ったんだ。それで無理だったら仕方ないってまた頑張ろうって」

ぽつぽつと、小さな声で語り始める。そうか、このためにわざわざお腹空いたと言ったのか。きっかけがないと話し出せ無かったから俺は無理に相づちをいれるのもあれだなあと黙って聞くことにした。

「でもね、やっぱり断られたら落ち込んじゃうんだ。その、辛くて苦しくて……。そんなときなんだ。右片君が大声出して会話に入ってきたのは」

次鋒、玉ねぎ。こいつは目に染みて手強いな。

「私を庇ってくれたのはね、直ぐわかったんだ。だけど、それがなんか見下されたとか、同情されたとか、こんなことされた自分は惨めだとか。被害妄想が止まらなくなっちゃって」

お次はネギを切る。こいつは細かいし切りやすいし楽勝だ。ふはははは。

「八つ当たりだって自分でもわかってたんだよ？けど、それでも文句言わなきゃって思いは止まらなかった」

そろそろフライパンも温まってきたのでさつき切ったウインナーを投入。すると直ぐにジュージューと気味がいい音を立てて炒められている。やっぱこの音はいつ聞いてもいいなあ。

「それで右片君の家まで来てピンポン押したんだけど、留守みたいだったから家の前で待ってたんだ。そしたらそのうちどんどん自己嫌悪が始まっちゃって」

俺はネギと玉ねぎの兄弟(?)もフライパンに入れる。こいつらはそんなに炒めなくても大丈夫なので、ここで大御所ご飯の準備を始める。

「もう感情とか、考えとか。全部が全部ごちゃごちゃになってわけわかんないんだ。わかってるのは友達が欲しい。それだけなんだけど、そのためにどうすればいいかわからないの。だって、こんな自分でも嫌いな自分をどうやって好きになってもらうかなんてわからないもん」

小さな小さな声で自分の思いを吐き出した彼女はそれつきり黙ってしまう。俺はフライパンにご飯を投入する。そしてご飯を他の具材と混ぜながら落としてみた。

「好きにしたらいいんじゃない？」

「え？」

「だから自分の好きなようにしたらいいじゃないか。友達を作りた
いなら作ればいい」

核心部分に言葉の爆弾を。

ここにきて始めて彼女の目の色が変わった。怒りへと。

「・・・っ！それが出来ないから困ってるんじゃない！」

「じゃあ諦めればいい」

「ふえ！？」

隠し味と呼べるほど大したものじゃないけど、マヨネーズと醤油を
混ぜたものを少しだけ入れる。俺はこれが好きなんだよな。

「友達が出来ない理由ははっきりしてるだろ？自分が入学式の次の
日が原因だって」

「・・・そ、それは」

こちらを射抜いていた眼光が下に落とされる。

「それにどんな理由が合ったのか知らないし、そもそもただの気ま
ぐれだったのかもしれない。でも橘は女の子を泣かせて、それに対
して何の弁解もしなかった。まあ出来なかったのかもしれないけど
な。それでも今の状態じゃ悪いのは明らかに橘だ」

「・・・」

「黙り込むってことは自分でもわかってるんだよな？なら友達を作
る前にやる必要があるってのも気付いてんだろ」

「・・・私は、謝らないよ」

俺が言わんとするところを察して橘が先手をうつ。

「だろうな。謝るならとつくに謝ってるだろうし。だから言ったん
だよ。諦めればいいって」

「・・・」

「それに一応確認しておくけどさ。橘は昼の件で俺に文句を言い
来たんであつて相談しに来た訳じゃないだろ？」

「・・・うん。そう、だったね」

お互いが黙り込み、ご飯が炒められている音だけが部屋の中に響く。

ここまで俺がすらすら言葉が出てきたのは、昨日の夜からずっと考えていたからだっただけ。人間自分の芯にある考えを決めれば案外すらすら言葉が出るもんだな。ぶっちゃけるとこの選択が正しいかどうかなんてわからない。けど、自分で決めたことだ。

「……いよ」

「ん？何だ？」

聞き取れなかったので振り返る。橘の声でご飯を炒めてる音でかき消されたからだ。俺は聞き返しながら冷蔵庫から卵を2つ取り出し、それを割ってお椀に入れてかき混ぜる。彼女は俯きながらぽつりと呟いた。

「独りは、寂しいよ」

今度は聞こえた。

「独りは、辛いよ」

次も聞こえた。

「独りは、嫌だよ」

声が震えているが、何とか聞き取れた。

「お願いだよ」

俯いてた橘が顔を上げる。その目には涙を溜めて、俺と視線を絡ませる。そして、言った。

「……」

今度は声が震えてかすれてしまったから聞き取れなかったけど、彼女が言いたいことは目と口の動きで伝わった。

助けて、と。

「……なら話は早いな」

俺はちらちらとたまに視線を前に戻しながら卵をフライパンの中にぶち込む。

「共同戦線を張らないか？」

「……え？」

橘が目を白黒させる。まあいきなりこんなこと言われたら当然こんな反応になるよなと思いつつ俺は続ける。

「橘は女の子を泣かした件で、俺は昨日の昼休みに布施に嘔みついた件で。お互い全校生徒からよくて無視、悪けりゃ敵視されるだろ？」

塩コショウをして味付けをする。もう狭いアパートの部屋の中はとつくにチャーハンのいい匂いが充満していが、俺はよだれが出るどころか緊張で喉がカラカラになっていた。

「だから共同戦線。橘は友達を作るため。俺は平穏な日常を取り戻すため。そのためにお互い協力しないかってことだ。まあ2人じゃ大したこと出来ないかもしれないけど、1人よりはましだろ？」

橘は状況が飲み込めていないみたいで未だに目を白黒させている。

「まあ、その、なんだ・・・」

ここで不安から思わず言葉が止まってしまふ。ええいつ何びびってるんだ！？昨日さんざん考えたセリフだし、イメトレだつてあんなにしただろ！？言え俺！男は度胸だ！俺は落ち着くために1度深呼吸をする。そして、言った。

「わかりやすく言えば、な・・・友達に、ならないか？」

勇気を振り絞つて。

瞬間。彼女の顔から表情が消えた。

「・・・」

嫌な沈黙がお互いを包み込む。・・・い、今更だけど、やつぱりさすがに自分勝手すぎたか？確かに俺は一度酷いこと言つて断つておいて、今更俺の方から友達になつてくれなんて何様だ？つて話だ。たけど、橘はどこをどう間違えたのか勝負と勘違いしていたみたいだし、勢いで何とかなるだろうと思つた俺がバカで甘過ぎたか？終わりの見えない自問自答が始まる。

「友達つて、あの友達？」

俺が少し焦り始めたそのとき、橘が無表情のまま尋ねてきた。

「どの友達をさしてるかはわからないけど、たぶんそうだ」

「放課後とか、休みの日とかに遊びに行く友達？」

「おう。その友達」

さつき自分で言っというてあれだけど、これ以外の友達とかあるのか？

「修学旅行の夜に友達2人（仮にA子ちゃんとB代ちゃん）と好きな人の話してるときにA子ちゃんが自分の好きな人（仮にC朗君）と同じだって知って自分は気付かって嘘の好きな人を言うべきかどうか悩んじゃったりするあの友達？」

「お、おう。その友達・・・？」

思わず疑問系になる。何か雲行き怪しくないか？

「結局嘘について違う人の名前を言っちゃって軽く罪悪感感じる次の日人気のないところでいきなりC朗君に告白されて本当は嬉しかったんだけどA子ちゃんのことを脳裏をよぎったから断ったらその場面を偶然にもA子ちゃんに見られちゃってその後お互い気まずくなくてそこにお節介なB代ちゃんがA子ちゃんに私の本当の好きな人がC朗君で教えてそれを知ったA子ちゃんが怒ってお互い泣きながらケンカになってお互いの友情を確かめ合うあの友達？」

「・・・少女マンガ好きなのか？」

すごい肺活量と饒舌さだな。ツツコミとしては何だその詳細な設定は。そんなピンポイントな出来事は起こらないだろ。そもそも俺と橘じゃ性別が違うし好きな人はかぶらないし。

「・・・かぶらないよな？」

「バカにしているの？」

そんなことを考えていたら橘の平坦な声が聞こえてきた。もちろん好きな人がかぶるとい話ではない。俺は覚悟しながらそちらを向くと、彼女の顔は普段の学校でのごときと同じ無表情。だけどその目と雰囲気からはありありと彼女が怒っているのがわかった。

「俺はいたって大真面目だけだ」

冷静を装って話す。内心は心臓のドラムロールが大変なことになってるけどな。

前に廃工場での明るい感じとは違って学校のようにクールな対応

する橘。明るい彼女が本当の彼女で、今のクールな彼女は人を寄せ付けないための彼女か。またはクールな彼女が本当の彼女で、明るい彼女が友達を作るために演じているのか。どちらが本当の橘なのか。もしくはどちらでもないそれ以外なのかは俺にはわからない。

だけど今重要なのはそこではない。どうやって彼女に友達になってもらうか。さあてここからが正念場だ。

「私が友達になつてつて頼んだときは嫌だつていったよね？」

「ああ言つたな」

「じゃあ何で？」

間をおかずにすぐ聞いてくる。

「さつき言つたように協同戦線だよ」

「もし仮にその意見受け入れたとしても、友達になる必要はないよね。協力し合うだけなら」

クールなときの橘は頭の回転が早いらしく、もともと俺は口がまわる方ではないのですぐ言葉に詰まってしまった。

「私は確かに友達がものすごく欲しいよ。毎日どうすれば友達が出るかって考えてるくらいだもん。でもだからってどんな友達でもいいわけじゃない。むしろすごく望んでいるからこそ一切妥協なんてしないよ」

真剣に怒っている視線は俺に固定されていた。

「だから右片君にはふざけるなつて思つてる。2日前に断つておいてこのタイミングで友達になろうと言われても同情されてとしか思えないから。そんなのは友達だとは思わない。それは私を『橘柚希』としてじゃなくて『可哀想な人』として見てるつてことだから」

かなわないな、と思つた。彼女の不器用なまでのまっすぐな気持ちに。そして俺の『自分の1番嫌いな部分』を指摘する彼女に。

だから俺は早々にカードを切ることにした。『建て前』ではなく『本音』のカードを。俺は振り返り橘の正面に立つ。

こつからは俺のターンだ。

「自分勝手なこと言い出してるのは俺もよくわかつてる。でもな、

橘に「友達になって」と言われたあのときはダメだったんだ」

橘は意味がわからないだろうけど、無表情なまま俺の話を聞いてくれている。俺はそれに甘えて話を続ける。

「あのとき俺は「友達を同等に扱わない奴とは友達になれない」って言っただろ？実はあれさ、自分にも言い聞かせた言葉でもあつてな」

あの日は「本音」を隠すために「建て前」を振りかざした。そして、橘を傷つけた。だけど、今日は「建て前」を少しお休みさせて「本音」をさらけ出す。そして、橘に受け入れてもらうために。

「俺はさ、無意識に人を自分より下に見てしまっただよ」

右片修司が考える右片修司という人物の根本。俺が俺を好きになれない1番の理由。そして過去に「あいつ」を傷つけてしまった原因だ。

「仮にさ、あのとき友達になったとしてもそれははお前を『橘柚希』としてじゃなくて『友達がない可哀想な奴』という同情心で見えてしまっているんだ。言い訳すると自覚はないんだけどな。まさに橘に言われた通りだ」

自嘲気味に笑う。

「自分でも何度も直そうと思っただ。だけど、そもそも直し方すらわからなかった。気持ちの問題だしな」

友達といわれると無意識にその人の身の回りや背景まで考えてしまう。

「実際それで友達をすごく傷つけてしまったんだ。そいつに言われたよ。「あんたは『私』と友達になりたいの？それとも『可哀想な人』と友達になりたいの？」ってな」

それを言われたときに正直、けっこうきた。

「でも昨日の布施に噛みついた件で俺も学園内に友達は一気に減る・・・まあいなくなるわけじゃけどな。それでも今までとは雲泥の差だ。ぶっちゃけると、俺が下に見ていたお前の位置まで落ちて俺の中で対等の立場になったってことだ。これなら俺もいわゆる『可

哀想な人』だから同情心からじゃないと思うんだ」

「・・・自分でかなり酷いこと言っている自覚ある？」

ここで橘が口を開いた。時間を置いて冷静を取り戻したのか、クールな彼女のときの無表情だ。

「勿論だ。かなり屁理屈で自己中な押し付けがましい考えだってこともな。でもこれが俺の考えた結果だ。だけど・・・」

「何？」

「だけど、さ。昨日の夜の間ずっと今話したこと考えてたんだ。

それで頭を一旦リフレッシュさせようと、そんなややこしい話を全部捨てて頭をからっぽにしてみたんだ。そしたらさ、あつたんだ」
改めてまっすぐ橘の目を見る。

「ややこしい考えもないし、深い理由もない。ただ、」
息を吸う。そして言う。

「ただ、橘と友達になりたいって気持ちだ」

ターンエンド。

俺は言いたいことは全て言った。これでダメなら仕方がない。俺のやり方が悪かったただけだ。

「・・・」

お互いが黙り込む。時間にして1分程度か。橘がぼつりと言葉をこぼした。

「やつぱり、ダメだよ」

拒絶の言葉を。

第7話 誰が為の延長戦。 +

「……」

「自分から友達になってってお願いしたし、思わずその、助けとかいっちゃったよ？ だけど、やっぱりこのタイミングじゃどうしても同情からだと思っちゃおうよ」

橘がこちらをちらちらと見ながら言う。まるで何かを恐れているような、期待しているような、そんな眼差しで。

「そっか。……わかった」

だけど俺の言葉を聞くと、今度はがっかりしたような、何かを諦めたような顔になり俯いてしまった。だつてやることはやった。

これで無理ならしょうがないじゃないか。

「なら待つよ」

今は、な。

「へ？」

橘が顔を上げる。

「俺がちゃんと橘自信を見てるってわかってくれるまで待つし、友達になれるよう行動は起こす。そのために必要な努力は惜しまないぞ」

今が無理でも次がある。次がダメでもその次がある。急ぐ必要はない。協同戦線つてのも単なる言い訳だしな。

「悪いな。俺は諦めが悪いんだ」

意思を伝える。橘は再び俯き、俺も黙る。もう何度目になるかわからない沈黙が2人を包み込んだ。

「右片君」

「何だ？」

喋り出したのは橘からだった。

「焦げ臭い」

内容はびっくりするぐらい関係なかった。

「はい？」

思わず聞き返してしまう俺。だってそうだろ？こいつは何でまたM KY発言をしだ・・・ん？

「確かに、臭うな」

俺の鼻も確かにあの独特な臭いを感じとった。何の臭いだ？これは少なくとも昨日はこんな臭いはしな・・・待て俺、落ち着いて考える。そもそも何で俺は、橋を家に上げたんだ？

「チャーハン！！」

そう飯を食わせるためだ。俺は叫びながら後ろを向く。するとフライパンの上にはもうかつての友の姿はなかった。

「チャ、チャーハン・・・」

俺は思わず崩れ落ちそうになる。緑や黄で彩られた白白色のポディは真っ黒一色の塊に、少し艶が残るパサパサだった肌はガツガツサガツサになっている。ぶつちやけもう見る影もなかった。

「・・・はあ、作り直すか」

俺はフライパンを水場まで持っていき水で洗い流す。くそっ、焦げ付いた友がなかなかとれないな。昨日の友は今日の敵ってやつか。

みなまで言うな、全然上手く言えてないのはわかっているから・・・

・・・はあ。幸い換気扇をつけていたので部屋中煙だらけにはならなかったけど、やっぱり万年金欠の苦学生にしたら一回分の食事がパーになったのは痛い。あーあ、どっか削って食費に回さないとなあ。

「悪い橋。作り直すからもう少し待ってくれ」

俺は橋に詫びをいれてからようやく焦げ付きが取れたフライパンを拭いてコンロに持っていく。

瞬間。

「ーっ！」

「おわっ、ちよっ！」

橋が後ろから抱きついてきた。

ちよっ、お嬢さん背中当たってますよ！何がと言わないけど！

何がとは言わないけど！！ごほん。落ち着け俺。そして二度ネタは厳禁だ。あまりの柔らかさに思わず頭がパニックってしまった。・・・何がとは言わないぞ？しつこいか。

そんなことを考えていると橋の声が聞こえた。

「信じる、からね？」

「・・・」

何を？とは聞かない。俺もそこまでバカじゃないから。

「もう、1度信じたら私、疑うとか出来ないからね？」

念を押すように話す橋。それはまるで自分に言い聞かせているようでもあった。

「おう」

俺ははつきりと力強く返事をする。それに答えるように、橋の腕にきゅっと力が入った。

「始めて、だよ」

俺の背中に密着した橋が震えているのがわかる。

「初めて、友達が出来たよ」

発せられた声も震えていた。

「・・・自慢出来るような友達じゃなくて申し訳ないけどな」

気恥ずかしくなっただけと自分卑下してみた。

「いいんだ。私はね、右片君がよかったから」

余計恥ずかしくなった。だから「そうか」とだけ答えて黙り込む。

幸いこの格好じゃ俺の赤くなった顔を見られる心配もない。

「うん」

今までと違う、やわらかい沈黙が2人を包む。俺は彼女に誘拐もどきをされた時からずっと考えてた。そして昨日の夜から8時間かけて考え直した。橋に対して俺はどういう態度をとるのか？って。結果、俺は友達になるという選択肢をとった。この選択に絶対の自信があるわけじゃない。だからこの先、後悔して落ち込むこともあるかもしれない。だけど、悩んで悩んで自分で決めたんだ。なら胸をはって行こう。せめて俺を友達と認めてくれた彼女を安心させるた

めに。

「くうー」

そんな俺のシリアスな空気を、無情にも橘の腹の虫が引き裂いた。

「・・・は、腹が減ってはイグアナ食えずだよ」

「お前ん家ではイグアナ食うのか」

皮肉を込めて鼻声の橘につっこんだ。俺のシリアスを返せ。

「はぐつ、んぐつ、もぐつ」

今、橘は俺の作ったチャーハンを食べている。あの後、盛大に腹の虫を鳴らした橘のためにとりあえずもう1度を作ってやったのだ。

「・・・せめてもーちよい落ち着いて食えないか？」

「ふあひ」

「ああもう口に食いもんいれて喋るな。ご飯が飛んでる」

俺は橘が飛ばしたチャーハンを布巾で拭き取りながら注意する。俺達はもう高校1年生。なのに橘の食いは異様に汚い。てか幼い。スプーンを剣のように右手で握り締め、ガチャガチャと音を鳴らしながらチャーハンを食べている。

「だから落ち着いて食えって。口のまわりがご飯粒だらけだぞ」

俺はティッシュを取り出して橘の口を拭いてやる。

「んーっ、んんっ」

「動くなつて。直ぐ終わるから」

俺はそんな橘に呆れつつも自然と笑顔になった。始め、チャーハンを一口食べた橘は「こ、これがチャーハンなの！？ほんととはこんなに美味しかったんだ！」と目を輝かせていた。橘の言い方に気になるところがあったものの、料理を作った側としてはそのリアクションはかなり嬉しい。それに今の橘を見ると、ファミレスでお子様プレートを美味しそうに食べている子供とかぶってなんか微笑ましいのだ。

「はい。終わったぞ」
「ん」

さつき俺が「口に食いもん入れて喋るな」というのを守って、橘はリスみたいチャーハンを頬張ったままこくと頷き食事を再開する。俺はそんな光景を眺めつつ壁にもたれ掛かりながらこれからのことを考えてみた。俺は協同戦線を張るって言ったときの橘に友達をつくるというのはやるつもりだ。そこで問題になってくるのが橘の性格のギャップだ。俺と2人きりのときは明るくていいんだけど、人前になると彼女のクールな見た目通りの性格になってしまう。別にそれが悪いとは言わないけど、やっぱり明るい方が友達は出来やすい。まずはそこら辺の事情をどうにかするべきだろうなあと考えていると、

「うおっ」
視界が霞み、急に眠気が襲いかかってきた。今更だけど1日寝てない訳だし当然っちゃ当然だけど、今は橘が家に來てるのに寝てしまうのはやっぱりダメだろう。俺はやばいと思いきよとするとするのだが、体が欲望に圧されていることをきかない。そのままずると重力に負けながら仰向けになり、意識が遠ざかっていった。

「ご馳走様でした！」
チャーハンを食べ終わった橘柚希が大きな声でそう言う。

「もうすんごく美味し・・・」
そこでようやく彼女は右片修司が寝ていることに気付いた。彼は彼女の声にも全く反応せずに静かに寝息をたてている。

「寝ちやつたんだ・・・」
丸1日は寝ていない訳なので限界が来たのだろう。彼女にもそれはわかったので、起こさないように食器を洗い場に持って行き極力音をたてないよう気をつけて洗った。

「ふぁー」

食器を洗い終わると、思い出したかのように橘柚希にも眠気が襲いかかってくる。

「どうしょ・・・」

書き置きでもして黙って帰るべきか、それとも起こしてちゃんと挨拶をするべきか。彼女は友達と呼べる存在が今までいなかったのも他人の家に来たのも始めてだったりする。経験が『足りない』のではなく『全く無い』ので、こういう時はどうしたらいいのかわからないのだ。

「うーん・・・」

そんな自分がいくら悩んだところで答えなどわかるはずがない。そう考えた彼女は、なら自分のしたいようにしようと決める。

「あっ」

そこで思いついた。自分がかつて映画で見て憧れて、友達が出来たらやりたいとずっと願っていたこと。少し。いや、けっこう映画とは状況が違う気がするけどやるには絶対のチャンスだ。

「・・・べ、別にいいよね？もう友達、なんだし」

自分の口から出た「友達」という言葉に照れる。だけどそれがどうしようもないほど嬉しい。そんな幸せを噛み締めながら彼女を思いついた事を実行した。

土曜日の昼下がり。

私は雄馬と一緒に修司のアパートまでやってきた。

「いやー、絶好の奢らせ日和よね」

「わりい全く意味わかんねえ。基本的にそれはどんな日なんだ？」

「私のお腹の空き具合。今日は暑いせいかお昼ご飯もう消化されちゃったのよねー」

建て前は昨日お世話した分、昼ご飯をたかりに。本音は昨日の帰り

実際の修司のハイテンションは明らかにこちらに心配させないための空元気だった。おまけに今日はバイトもないと言っていたので、このままだと家で1人ぐだぐだするだろうと見越して雄馬と2人無理やり外に連れ出そうとしたわけだ。

「彩華。お前俺に二千円もするコース奢らせといて随分な言いぐさだな？」

「私じゃなくて天気と言つてよ。それに今から食べるのはパフェなんだから。よく言うでしょ？パンがないならジャンボパフェを食べればいいじゃないって」

「・・・確かに胸焼けして食う気は失せそうだな」

かんかんかんと2人が階段をあがる音がのどかな昼に響き渡る。そしてギシギシいう廊下を歩いて1番奥の修司の住む部屋の前に来てベルを押す。「ジーッ」と昔ながらの音が鳴り響いた。だけど家の主が出てくることもなく、ぼつんと立ち尽くす2人。

「ん？あいつが出てこないなんて珍しいな。まだ寝てるのか？」

「ひよつとしたらトイレとかかもよ？とりあえずお邪魔しとこうか」このアパートは古いし安いので殆ど音がまる聞こえなのだ。だからいつもは大抵ベルを押す前に修司本人がこちらに気付いてドアを開けて招き入れてくれる。お互い少し疑問に思いながらも雄馬が財布から鍵を取り出す。修司の家の合い鍵だ。

「はあ、男の家の合い鍵を持つ高校生なんて俺ぐらいなんだろっなあ」

「はいはい落ち込むのは後にして早く入るわよ。暑くて暑くてパフェ食べる気が失せるわ」

「あれ？俺そつちのが良くね？」

私はその意見を睨んで黙らせる。今は7月で地球温暖化の影響により気温は30度を超しているので、バカの相手は疲れるのだ。私は手であおぎながら雄馬を再び睨む。

「はいはい急ぐからそう睨むなって。たく、ほんと彩華は暑がりだよな」

雄馬がぶつぶつ言いながらガチャガチャ鍵をいじってドアを開ける。そして直ぐ閉めた。

「・・・何してるの？」

雄馬はドアを閉めたかと思うと表札を確認しだした。

「いや、修司の部屋ってここだよな？」

「何そのボケ？つまんない」

「その気持ちはよくわかる。だけど俺の気持ちもわかって欲しい。というわけでGOしてくれ」

そう言いながら雄馬は1歩後ろに下がりドアの前にスペースをつくつた。

「言われなくても入るわよ。こんな蒸し暑い日にそんなボケいらないわ」

私はとにかく暑いのが苦手なので早く涼もつとドアを開ける。

そして閉めた。

「・・・」

私は無言で表札を確認。そこには右片と書いてあった。気まずい雰囲気が辺りに広がる。

「・・・気持ち。共感できたわ」

「・・・そいつは何よりだ」

とりあえず和解の握手をする。だけど頭には信じられない光景が焼き付いて離れない。

「とりあえずもう一度確認してみようぜ」

「・・・わかったわ」

私は雄馬の提案にのり、勇気を出してドアを開ける。するとそこには当たり前だけど玄関がある。そして修司がいつも履いているスポーツシューズが一足。さらにもう一足見たことのないスポーツシューズがあった。

まあ玄関にスポーツシューズが二足なんて普通で何もおかしくはないし、修司が新しく買ったと考えるのが妥当だろう。

ゆっくりと視線を上げる。すると次は廊下に脱ぎ捨てられていた色

々な物が目に入った。まずはカッターシャツ。これはまあ修司のも
のだろう。

そしてストッキング（勿論女性用）。これはまあ修司がハイソック
スと間違えて買って履いているのだろうと無理やり言い聞かせる。
そして最後にスカート。これは実は修司は女装が趣味で履いている
のだろう・・・とはさすがに思えなかった。

そしてさらに視線を上げると部屋のドアが少し開いており、そこか
ら女性と思わしき人物の綺麗で長い素足が見えた。

私はゆっくりとドアを閉める。落ち着け私。先ずは目を閉じてゆっ
くりと深呼吸をしよう。

「すーっ・・・はーっ・・・」

よし、少し落ち着いていた。私は目を開けて前にいる雄馬を見る。そし
て恐る恐る雄馬に尋ねた私は

「・・・どう、思う？」

「女連れ込んで一発やった」

「死に晒せ」

とりあえずバカの股間を蹴り上げた。

「おおおお・・・！」

バカが股間をおさえてうずくまっている。うん、我ながらいいスピ
ードと角度ではいった。

「お、俺は、聞かれたから、答えただけ、だぞー!？」

「もう少しオブラートにつつまみなさいよ。レディの前でしょ」

「俺の辞書には股間を蹴り上げる女性はレディじゃなくてゴリラで
載ってたんだよ」

「ふん」

私はローキックを放つ。これは本来なら足を攻撃する技。だけど、
今回バカはうずくまっている+股間をおさえていてノーガードなの
で結果頭に直撃。

「うおう、・・・ふあんたすていつ、く」

すると雄馬な訳のわからないことをほざきながら糸の切れた操り人

形のようにその場に倒れ込んでびくりとも動かなくなった。

「はあ、何でこんなバカ好きになっちゃったんだろ」

私は雄馬を見下して嘆きながらちよつと真面目に別れるべきかな？と考える。だけどまあ私にそれは無理かと早々に諦め、当初の目的である事の真相を確かめるために雄馬の家のドアを開け中に入った。靴を脱いで短い廊下を通り過ぎ半開きになっているドアを開ける。

「うわあ、表現しづらっ」

するとそこには雄馬の想像とは違ったけど、常識から考えてもよくわからない光景が広がっていた。まず綺麗な足の持ち主はもしかしてと思っていた橘さん。最近修司といういろいろあつたみたいなので予想はしていた。だけどまさかの格好、体操服だとは思わなかった。何で体操服？

制服が寝にくかったのか制服にしわがつくの嫌ったのか。前者なら廊下に服を脱ぎ散らかさないだろうからおそらく後者。うちの学校の体操服はブルマなのでかなり寝にくいから修司がTシャツなりなんなり勧めただろうけど、恥ずかしくて着れなかったんだらうと勝手に考えて早々に自己完結する。何故ならそれ以上に謎な事が残っていたからだ。まず隙間から見えなかった位置には家の主である修司が仰向けで寝ていた。そしてそのお腹を枕にするように橘さんが横を向いて寝てる。

記号でいうと

こんな感じ。

修司が呼吸するたんびに橘さんの頭が上下する。腕枕ならぬ腹枕・

・何だそりゃ？よくわかんない、ほんとよくわかんないんだけど・
「なーんだ。励ます必要なかつたじゃん」

私は思わず笑みがこぼれる。2人の顔に視線を向ける。すると2人とも、特に橘さんはとても幸せそうな寝顔をしていた。

「あーいて。結局真相はどうだっ・・・うおっ!？」

下から繰り出したスマッシュをかわされる。スマッシュっていろいろ

はまあ簡単に言つと相手の頭をもぐパンチかな。

「何すんだよ!?!」

「帰るわよ」

「はあ!?!いや、ちよっ!」

私は強引に雄馬を押しして部屋から出す。

「おいおい真相はどうだつたんだよ!?!俺にも見せてくれ!」

「私が雄馬の分まで見といたから大丈夫よ」

雄馬から鍵をふんどくり鍵をかける。

「ぶっちゃ俺が見たいです!ちよつとだけ!チラ見でもいいから

!このまま帰つたら俺、真相気になつて八ゲてまうやん!」

「じゃあ今から育毛剤見に行こつか」

「ハゲた後よりハゲる前の努力が大事だから!あと最後関西弁になつてたところにつっこんで!」

「ぜーんぶ却下」

私は聞こえてくる声をガン無視しつつ、雄馬の首根っこをつかんでずるずる引きずつた。だってあの2人の邪魔をするのは・・・野暮だよな?

「かーみかーみ抜けーけ抜けーけもつとー抜けー」

「雨雨降れ降れみたいに明るい歌で怖いこと言うなー!」「髪は女性の命」とかいうけど男だつて髪大事なんだぞー!」

その心の叫びを聞いてくれるような優しい人は残念ながらここにはいなかった。てか私1人だけなんだけどね。

ふと、空を見上げる。するとそこには夏を思わせる清々しい青空が広がっていた。

「ジリリリーン。ジリリリーン」

瀬上と大倉が帰り、右片と橘が眠りこけている部屋に携帯電話の着信音が鳴り響く。

「ジリリリーン。ジリリリーン」

しかしほぼ丸1日起きていたせいでぐっすり寝ている2人が起きる気配は全くない。

「ジリリリーン。ジリリリーン」

本来ならばもう留守電になっているだろうが、機械に弱い彼は設定の仕方がわからないし、誰かにしてもらったところで今度は留守電の聞き方がわからないので、結局留守電の設定はしていない。因みに着信音が旧式の電話のベルなのは彼の趣味である。

「ジリリリリリーン。・・・」

そうして暫く鳴っていた携帯電話はちょうど13コールで切れてしまった。これは電話をかけてきた相手が「死の13階段」を意図してやった事なのだが、寝ている彼には知る由もない。

着信画面に『悪魔將軍』と出ていたのももちろん知る由もない。

追伸

起きて携帯見れば気付くだろつというツッコミは受け付けないので悪しからず。

第7話 誰が為の延長戦。 + (後書き)

予告通りやってまいりました作者です。

これでようやく序章が終わりって、舞台が整い伏線やら何やらが自分の中で一区切りつきました。なんか今更なんですけど、自分で読み返して「全然ラブなコメディしてねえ」と反省してたりします。でも素直な気持ちとしては「やっとここまでこれた」と少しだけ自分を褒めてたり。しかし継続力皆無な作者がこつこつこつこつまでこれたのは間違いなくレビューをくださった方々。ここまで読んでくださった方々のおかげです。ありがとうございます。何度も挫けそうになった時、皆さまのレビューの力で踏みとどまりました。重ね重ねありがとうございます。

なんかえらく真面目になってしまったので小話を1つ。

自分中学の塾講のバイトしてるんですけど、理科の授業で植物のことやっていると、生徒が「雄花」を「オバマ」と囁んで顔を真っ赤にしてみました。今、旬だもんねえ。

結局何がしたかったのか分からなかったくらいぐだぐだですけど、最後に次回予告っぽいものを。次からはようやくラブなコメディ入っていて、シリアス気味だった前回に比べてコメディ増やしたいと思います。これでようやくスタートライン。気合入れて頑張ります。……あれ？これ次回予告じゃなくね？笑

それでは今回はこの辺で。

次回また第1章の終りの後書きで会いましょう。

じせじせ

第一章 虎の皮を被ったガール

『猫被り』

?本性を隠して、うわべは大人しそうに見せかけること。またその人。

?知っているながら知らないふりをする事。またその人。

広辞苑より抜粋

『ガール』

英語。スペルはG i r l。意味は少女などなど。

第一章 虎の皮を被ったガール（後書き）

二か月放置状態ですみません。作者です。

これからゆっくりですが更新していきますのでよろしくお願いします。

第1話 暑くて熱くて篤くなる

「みーんみーんみーんみー」

「ピコ、ピコピコチュン、ピコ、ピロロロン」

「・・・はあ、・・・はあ、・・・はあ」

季節は夏。蝉の鳴き声に対して悟りの境地に入りだした今日この頃、あまりの暑さに俺のテンションは反比例のグラフの如く急激に下がっていく。

「みーんみーんみーんみー」

「ピココ、ピコピコ、ピロロロン、チュンチュン、チュン」

「右！右右み・・・あー左左！」

時間は昼前。俺の隣で座っている橋は、あまりの楽しさにテンションが反比例のグラフの如く急激に上がっている。

「とりやつ、よいしょつ、うわわ右右つ！」

「・・・ひい、・・・はあ、・・・ふう」

ここでちよいと状況説明だ。そのためにまずはマ オカートを思い出して欲しい。あれつてよく慣れてない人は右に曲がろうとしてコントローラーやら体やらを右に傾ける無意味な行動してしまったりするだろ？それでクレーも扇風機もない俺ん家で唯一のテレビゲームを橋は必死に体やらコントローラーを動かしてやっているわけだ・・・インベーターゲームを。そう、マリ カートじゃない。インベーターゲームをだ。いや、確かにあれも左右に移動するよ？でもそんな体動かすような遊びじゃないだろ。

「あー！左左ひだごぶつ」

今日何回目になるかわからない肘うちをくらう。俺ん家狭いしテレビ小さいから2人でゲームをやるときは必然的に距離が近くなるんだよな。マ リオカートしたての頃はあいつによくやられたなあ・・・悪意100パーセントで。

「デレレレレレーン」

「あー」

そして何回目になるかわからない肘うちをくらわせた橘は、今回も俺に肘うちをくらわせたことに気付かず何回目になるかわからないゲームオーバーに落ち込んでいる。

「ようし！今度こそ！」

そして何回目になるかわからないリベンジを決めるため自分に喝をいれていた。

「……なあ橘」

「打倒イグア、ん？何？」

おいおい橘。お前は食ったり倒したりそんなにイグアナに恨みを持つているのか？そんな疑問をひとまず留め、俺は橘に

「そろそろ、止めないか？」

4回目になるこの提案をした。

「え？」

「だからこのインベーダーゲーム止めないかって。夏休み入って一週間経つけどさ、俺がバイトない毎日こっちきてこれやってるし」

「……」

「……」

「よし、打倒イグアナだよ！」

「無かったことにするな！」

「あっつ」

左手で軽くチョップする。

「うー暴力はんたい」

頭を抑えなが橘が右手を上げて公害に苦しむ住民のごとく抗議してきた。

「やかましい。だいたいいくらなんでも同じゲームばっかやってたらさすがに飽きるだろ？」

「なんたつてインベーダーゲームだし。総プレイ時間そろそろ50時間越えそうだし。」

「うんうん全然飽きないよ？すごく面白いもん。だから、その、ま

「だやりたいなー・・・なんて」

「ダメ？と上目づかいでこちらをみる橘。」

「うっ・・・」

瞬間俺の振り絞った意志にひびが入る。俺より背が高くて見た目クールなくせに実際こんな子供なもんだから、なんか、こっ、父性？みたいなものがふつつつと湧き上がってきてついつい言うこと聞いちゃうんだよ。例えるなら孫の出来たおじいちゃん的心境。いや、孫いないけど。そんなこんなで3連敗した俺だけど今回はそうはいかせない！なんたってさつき思いついた秘策があるからな！

「ダメとは言わないけどさ、それはひとまず置いて外行かないか？なんか奢るし」

秘技・マネーグラビティ（金の引力）！ふはははは！金に屈っしぬ奴など存在せぬわ！これで橘を籠絡してくれる！

汚い？それが何か問題あるのか？お前の力じゃない？もう一度言う。それが何か問題あるのか？この世は勝者が正義！部活しないでバイトしている男の財力舐めんなよ！

「今はいいや。インベーターゲームしたいから」

「ぎゃふん！」

瞬殺された。

「え？何で！？奢るんだぞ！？タダなんだぞ！？」

「別に、いいやつと」

ゲームをしながら返事をする橘。

「そ、そんなバカラ」

俺の財力<インベーターゲーム。あまりの衝撃に膝から崩れ落ちる。俺の正義が敗北し、悪に変わった瞬間だった。ちなみにバカラとは賭けトランプの1つ・・・どうでもいいか。

「そっ、ほっ、うりやつ」

床に崩れ落ちている俺を完全に無視して橘がゲームをしている。橘よ。もーちよい別の掛け声は無かったのか？どう考えてもインベーターゲームをやるときの掛け声ではない。

「みーんみーんみーんみー」

蝉の鳴き声が響き渡る。部屋には俯せになっっている男（俺）とコントローラーをフリフリしている女（橘）の2人つきり。

「……はあ、どっこいしょ」

ボケても橘がツッコこんでくれないバからしくなっって起き上がる。

やっぱり相手してもらえないことほどつまらないものはないもんな。

「なあ、橘ん家にはやっぱりテレビゲームないのか？」

「ん？あるよ1本だけ」

ゲームに集中しながら気の抜けた返事をする橘。

「へ？そうなのか？」

こんなにはまってるもんだからてつきり初めてゲームしたんだと思っただ。

「そうだよー。でもあつちはすぐに飽きちゃった」

「もったいな。それ何てソフト？」

「シーマ〇」

「切なっ！」

さすがに切なすぎるだろそれは！シーションはみんなでやるゲームで橘のような友達いない奴が1人でやるゲームじゃないだろ！？いや1人でやつてもそこそこ面白いけどさ！

「でもあのゲームつままないよ？あいつ無愛想だし言うこといちいち腹立つし」

「いやあれそういうゲームだから」

愛想いい〇ーマンや優しい言葉をかけてくれるシーマ〇なんてシーマンじゃないし。

補足

シーションは凄く面白いゲームだからみんな今すぐ買いに行こう！よしフォロワー終了。そんなバカなことを考えながら未だ1人でゲームを続ける橘の背中を眺める。そして俺は1つ決心をした。

「なあ橘」

「なーにー？」

返ってくるのは相変わらずの気の抜けた返事。そんな橋に俺は言った。

「友達つくるぞ」

と。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

本日二度目の嫌な沈黙が2人を包む。

「よし、打倒イグア」「2度ネタ禁止!」

「あうっ」

そして本日2度目のチョップが炸裂した。

「友達つくるか」

「・・・・き、今日は止めとくよ」

「友達つくるか」

「いや、だって天気もちよっとよくないし」

「友達つくるか」

「今朝の占いも11位だったし」

「友達つくるか」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・嫌だ」ボソッ

「そーかそーか橋もそんなにやる気か!んじゃ善は急げ急がば回るな回らん角には福来たるー!」

俺は橋の首ねっこをぐいつと持ち上げ玄関へと連行する。

「いやーだー!意味も用法も無茶苦茶な言葉で行きたくないー!」
当然橋は暴れだすがなんのそのの精神でよろしく。

「つつこむとこはそこじゃねえってツツコミはしないので悪しからず!いつでもボケ拾ってもらえると思うなよ!」

一応弁解しとくけど、さっき俺のボケ無視された仕返しとかじゃないぞ?

「ぎゃー許してー!それ以外なら何でもするからさー!」

瞬間、俺の動きはピタリと止まり橋を離す。

「……へ？……へ？……へ？」

状況がのみこめてない橋がテンパっている。

それを見てちよつと和んだ俺はS側なのか？

「まあちよつと座ってくれ」

そう言つて俺はあくらをかいて座り、前の畳みをポンポンとたたく。

「う、うん……」

橋も恐る恐るといった感じで正座する。

俺ははコホンと咳ばらいをしてから話しはじめた。

「お前と橋が共同戦線を張る、もとい友達になつてから暫くたったわけなんだが」

「そだね」

「あんときの約束覚えてるか？」

「う、うん、覚えてるよ」

橋は友達をつくるため、俺は平穏な日々を過ごすため。

「んであの後すぐ夏休みに入ったわけなんだが俺はいたって平和な日常を過ごせたわけだ」

「わーおめでとー」

贈られる拍手。お、落ち着け俺。かつこよくいうと『Be Co o 1』だ。あいつに悪気がないのは今まででわかつてるはずだ。あいつはちよつと天然入ってるだけなんだ。だから間違つても怒ったりするなよ俺、せつかくこの展開にもちこめたんだからな。

「んでだ。俺ばっかりが得しちやってるから右片君としては心苦し
いわけですよ。だからそろそろ橋の役に立とうと思つんだ」

「余計なお世話だから結構だよ」

橋がそうのたまう。

「ふっ」

俺は思わず軽く笑みをこぼす。そして言った。

「あれっ、おかしいな幻聴か？有り得ない言葉が聞こえてきた。悪い、もう一度言ってくれるか？」

左手でアイアンクローをかましながら。決してイラっときたわけじゃないぞ？これは悪い子にちょいとジェントルマン流クールな対応をとったまでだ。

「あいたたたギブアップギブアップ！」

橋が涙目になって喚いている。自業自得だとツツコミたいところだが、なんか俺がイジメてるみたいで申し訳なくなってきたのですぐに止めた。

「ったく。お前には常識というものはないのか？」

「乙女にアイアンクローする人に言われたくないよーだ」

ふんっ、と涙目のまま橋がそっぽを向く。どうやらアイアンクローで拗ねてしまつたらしい。俺は少しやり過ぎたかと反省しながら橋を眺めて思い出す。

橋と友達になつたあの日を境に変わったことといえば、俺のバイトが休みの日にあいつは俺の家に来るようになった。逆にいうと変わったのはそれしかない。学校では俺が話し掛けても今まで通りのガン無視で俺の家の中でしか話さないというのが徹底している。おまけに遊ぶときも俺が雄馬や瀬上といるときにはこない。本人にその理由を聞いても前者は「恥ずかしい」後者は「友達じゃないし悪いの一点張りだ。俺はそれが嘘ではないだろうけど、全部本当だとは思っていない。でもそれは黙っているので言いたくない事なのだろう。なら無理矢理聞き出すものじゃないと結論づける。でも結論づけたのはいいけどこのままってのは良くないだろうと何度かアクシヨンを起こすんだけど流されたり押し切られたりして今日に至る。

「橋はさ、友達欲しいんだろ？」

「たった一歩でいい。」

「もう右片君がいるもん」

「俺1人だけじゃんか」

一歩でもいいから前に踏み出して欲しくて話し掛ける。
しかし

「1と0、いるといないのでは大違いだもん」

橘は微動だにしなかった。

第2話 スローガンは劇的ビフォーアフター 準備編

「確かにそれはそうだな。だけど0から1になるよりは1から2になる方がずつと楽だろ？なんせ0（ない）から1（ある）じゃなくて1（ある）から2（ある）なんだから。だからどうせなら友達もつと増やそうぜ」

「右片君みたいな変人そうそわないから無理だよ」

「日本を舐めるなよ？俺レベルの変人なんてそこら辺掘ったらザックザック出てくるぞ」

「……………それって返しとしてどうなの？」

「……………ゴメン、俺もさすがにこれはちよつと思つた」
少し反省、そして進撃。

「とにかく、俺が言いたいのはこのままって訳にもいかないだろ？つてことだ。高2で同じクラスになれるかわからないし、高校卒業後進路だつて違ってくるだろ？お前はの間ずっと友達俺1人でいく気か？」

「……………」
橘が俯く。俺も結構しゃべつたし言いたいことも言つたので黙つて橘に合わせる。さっきまであれだけうるさかつたセミの鳴き声今は遠くに感じた。そして3分くらいたつただろうか。

「……………やっぱり、私つて迷惑、なのかな？」

ボソツと。こちらに遠慮するよつに。泣きそうな上目遣いで聞いてきた。

「おう迷惑だ」

「……………つ」

「このままじゃ橘が心配で夜も眠れない」

「……………」

口をぽかんと開けて固まつた橘。

「……………」

口をしつかり閉じて黙る俺。さつきよりさらにセミの鳴き声が遠く
に感じた。

「今の台詞、私の心の中ですよ！異臭騒ぎになってるよ？」

「ストリートにください台詞と言ってくれ！余計恥ずい！」

顔が真っ赤なのはご愛敬。スルーするのが紳士淑女の嗜みだ。・・・

「くさいのは百も承知だ！それでもお前にはハッキリ言わなきゃわ
かんねえと思っただよ！」

「そっか、ありがとね」

瞬間、ふと橘が笑った。とても綺麗だけど、何故かはかなくみえた。
「お、おう」

急にしおらしくなった橘に拍子ぬけしながらも俺はそう答える。

「よしっ、じゃあ我は宇宙人を倒しに行くので参謀は作戦を考えて
くれたまえ」

そういつてまたインベーターゲームを始める橘。背を向けてゲーム
を始めた橘に俺は突っ込まずに眺めながら今後の予定を立てた。そ
の震える背中を見ながら。

「よし、んじゃ行くぞ」

「えっ！？もう！？話の流れ的に明日な感じだったよね！？」

5分後、立ち上がって発言した俺にインベーターゲームをしていた
橘が抗議してきた。

「善は急げって言うだろ？それに明日にして橘の気持ちが変わられ
ても困るし」

「友達信じようよ！信じる者は救われるんだよ！？」

「おう。俺は信じてるぞ。橘が“こんな急な展開に対応して見事友
達をつくる”ってな」

「その信頼には応えられません！」

「はいその意見華麗にスルーして行くぞー」
俺は無理矢理橘の脇に手を入れて持ち上げる。

「ひゃっ!?!ちよっ、や、止めてっ!わかった!行くから!ガンガン行っちゃうから!」

ひゃーと叫びながら顔真っ赤にして離れる橘。さっきの橘のセリフで顔を赤くしている俺は人として終わっているのだろう。

「よし、本人のやる気も出たみたいだし行くぞ」

「ちよっと待つて。真面目な相談があるの」

自分の胸に手をあてて深呼吸していた橘が真面目な顔してこちらを引き止めた。

「どした?」

「服を着替えたいんだけど」

俺は橘を見る。まずは顔。大きな目と眉は釣り上がっており、気が強そうに見える。

次はルックス。普通の男よりも足が長くて高い身長は相手を軽く威圧してしまうかもしれない。

次に衣装。この前俺とド キに行った時に買ったジャージ上下。

俺は思わず本音を零してしまった。

「あー、確かにこのままじゃヤンキーだな」

「気にしてるんだから言わないでよ……」

「悪い悪い。んじゃまずは着替える為に橘ん家行くか」

「右片君も来るの?」

「もち。建前としては橘が逃げないように」

「本音は?」

「橘が俺ん家来てばっかだから1度くらい俺もお前ん家行ってみたい」

「はあ、わかったよ。んじゃ行こっか」

苦笑いしながら橘が了承した。

「おう」

こうして俺達は橘の家へと向かった。

「……ここが橋ん家？」

「うん、そうだよ。驚いた？」

あの後、いつもの如く顔に傷がある極道のような面をにこりとませず仏頂面プラス無言の橋の横を歩くという拷問を受けた俺は、橋の家に着いて思わず尋ねた。まあ返事はこないだろうなあと思ってたけど、以外にも答えてくれた。あいつ、外でも喋るときは普通に喋るんだな。

「いやそりゃあ驚くだろ。だってここ……」

そんな考えをひとまずおいておき、俺はもう一度ゆっくりと見回して確認してから、言った。

「旅館じゃん」

やけに人がいない道を歩くと思った。やけに自然が多いところを歩くと思った。途中から山に入って「こっちであってるのか？」思わずと聞き返した。俺の家から自転車で30分。そこには体育館くらいの大きさの、江戸時代を思わせる立派な旅館があった。確かに俺の住むこの町は都会というよりは田舎で、ベッドタウンとしてそこそ有名だという話を聞いたことがあったが、この町には旅館の名物となるような温泉やら観光地がないのでまさかこんな本格的な旅館があるとは思ってもみなかった。

「やつぱり驚くよね。うちの旅館は一応温泉もあるんだけど、目的としては遊びよりもくつろぎに来るお客さんが大半なんだって。あつ自転車はこっちに止めてね」

連れて来られたのは旅館の裏側にある小さな小屋。その扉の鍵を開けて橋が入るのに続く。

「おう了解。確かに1泊でもすればすごくくつろげそうだよなあ」
「なんたって回りは静かだし自然がいっぱいだし。」

「でも近くに自販機すらないってのは不便だよ。毎日ここから学校

通うのも大変だし」

「旅館の中に自販機無いのか？」

「うん。雰囲気を壊さない為だつて」

へえー徹底してるなあと呟きながら自転車を止めて小屋を出る。橋は小屋に鍵をかけてからおそらく裏口であろうところから旅館の中へと入って行った。

「ただいまー」

「いよう柚ちゃんお帰り。友達のところ遊びに行つたんじゃないのかい？」

入ったそこには鍋や包丁などの料理器具が綺麗にいらんでいる。まさしく厨房だ。そこに現れたのはもろ板前さんの格好をした三十代後半くらいの男性。

ゲジゲジ眉毛に細長の目。料理人だからか髭はちつちりそられている。オールバックに鉢巻きをして出刃包丁を握る姿はその厳つい人相と相まって怖くて仕方がない。

「徹さんおはよー。ちよつと着替えに戻つて来たんだ」

「なるほどおめかししに来たのかい。てえーと後ろのが？」

そう言つてこちらを向く徹さん（と呼ばれていた人）。

「始めまして。柚希さんの友達でクラスメートの右片修司です」

軽く自己をして紹介頭を下げる。

「おう。俺はこの旅館の板前やつてる。蔵持徹だ。くひもちとほみよろしくな」

そう言つて蔵持さんは上げようとした俺の頭を掴むとがしがしと撫でて来た。

「んじゃ私着替えて来るからここでまつててね」

橋はそう言い残して厨房の奥へとかけて行った。そして残った俺と蔵持さんwith包丁。とりあえず俺に自分の身を守る為の武器を下さい。

「なあ坊主。聞きたいことあんだけどよ」

「は、はい。何でしょうか？」

急に話し掛けられて少しどもつてしまった。

「いきなりこんなこと聞かれても困るかも知れねーけど、柚ちゃんの事、どう思う?」

「えーっと、どう、とは?」

いきなりすぎて思わず聞き返す。

「何でもいい。とにかくお前さんの嘘偽りない気持ち聞きたい。なーに、別に何言ったって怒りゃしねーよ」

ふっと蔵持さんが軽く笑う。ならその包丁を置いてくださいと切に願うが、そのまま蔵持さんは動かない。諦めた俺は少しびくびくしながら橋のことを考え始める。そして正直に思っていることを言うことにした。

「本音を言つと、よくわかりません」

「わからないってのは具体的には何がだ?」

「殆ど全部です。まだ友達になつて1ヶ月経つてないつてのもあると思いますけど、それにしてもわからないことだらけです」

拉致つて相手にスリーサイズいりのプロフィール渡して友達作ろうとしたり、人前じゃ完全無言でにこりもしなかったり。流石に踏み込み過ぎた話だから聞けないけど、少なからず過去に何かあったのだろう。

「だからまずは彼女のことを知れる範囲で色々知りたいと思います」

「そっか……」

そう言つて細い目を更に細くして蔵持さんは黙つた。

「ふーん、色々知りたいねえ」

「うおっ!」

「お、女将さん」

驚いたのは俺。女将さんと心配そうに言つたのは蔵持さんだ。そして、いきなり聞こえた第三者の女性の声。振り返るとそこには和服に身を包んだいかにも大和撫子な女性がいた。

「蔵持さんおはようございます」

歳はたぶん三十代くらい。短めの黒髪を後ろで結い、人の良さそうな柔和な顔。少し低めの身長で控え目な綺麗さ、そして紺の和服を

見事に着込んでいる様はまさに俺の思う大和撫子そのものだった。
「あなたが右片修司君ですね？始めまして、柚希の母の柑奈です」
そう言つて頭を微笑む橘のお母さん。これが橘のお母さんか。言っ
ちゃ悪いが橘とはあんまり似てないな。いや、美人つて意味なら二
人ともそうなんだけど、派手寄りな見た目の橘には大和撫子という
言葉はあまりにも掛け離れている。

「こちらこそ始めまして。柚希さんとは仲良くさせてもらつてます」
もちろんそんなことは口に出さず、急いで俺は頭を下げた。そこで
感じる違和感。顔を上げるとそこには笑顔のままの橘のお母さん。
何度見ても人の良さそうな顔なんだけど、先程からなーんか歓迎さ
れていないような雰囲気を感じ出されているん気がするんだよな。
何が？つて聞かれてもちゃんと答えられないんだけど、まあり居心
地がよろしくない。例えるなら京都に住んでいる人の家にあがつた
瞬間にぶぶづけを出された感じ。わかりにくかつたらごめん。まあ
俺の気のせいだろうと自分に言い聞かせて気持ちを切り替える。す
ると、考え事を終えた俺はようやく橘のお母さんがここにこしなが
らこちらを見つめていることに気が付いた。思わず目が合つてしま
う。

「……………」
「……………」

き、気まずい！てか恥ずかしいからそんなにこっちを見ないでくれ
！俺は何もやましいことはないはずんだけど何故かプレッシャー
が痛いほど突き刺さってくる。そのプレッシャーのせいで視線を逸
らせず、見つめ合つたまましばらく無言が続いた。よし俺、物は考
えようだ。こんなに綺麗な女性にじろじろ見られる機会なんて滅多
にないんだから、これを機に俺の秘めたる露出願望を叶えるとする
か。

「あの、ど、どうしましたか？」

嘘ですごめんなさいそんな願望微塵もございません。女性に見つめ
られるなんて恥ずかしい状況に堪えられず、俺は勇気を出して噛み

ながらも橘のお母さんに話しかける。すると、橘のお母さんはその
柔らかな顔のまま

「 柚希に余計な真似をしないで下さい」
きっぱりと言いきった。

「へっ?」

思わず聞き返してしまう。俺の耳がおかしいんだろ?と思うほどの
予想外な言葉を聞いたから。

「あの、それって」

どういふことが尋ねようとしたら

「お待たせー。あつ、お母さんただいま!」

橘が着替えを済ませて戻ってきた。

「 柚希お帰りなさい。また出かけるの?」

「 うん!ちよつと町の方まで」

だよな?と俺の方を見てくる。

「あ、ああ」

先程からの衝撃が抜けきらないながらもなんとか返事を返した。

「 というわけなの。晩御飯までにはちゃんと帰ってくるからね」

「 わかったわ。気をつけてね」

「 わかつてるよ。じゃあお母さん、徹さん行ってきまーす!」

裏口っぽい所から外に出る橘。

「おう、気いつけてな」

それを徹さんの声を送り届けた。俺は先程の言葉が気になり橘のお
母さんの方を見る。

「 右片くーん!早く行こーよ!」

橘が俺を呼ぶ。どうするか悩んだ結果

「おーう!今行くー!」

俺は後ろ髪を引かれる思いでその場で頭を下げて「失礼します」と
言いその場を後にした。

第3話 スローガンは劇的ビフォーアフター 決行編

二人で並んで自転車をこぐ。道路交通のマナーとしては一列になるのが正しいが、あいにく俺の頭の中は先程言われた台詞でいっぱいだった。まあ確認するまでもなく、先程橘のお母さんに言われた「余計な事をするな」の件なんだけど。余計な事とはこの場合やっぱり橘に友達をつくらうとしている事をさすのか？橘が家で話してたら知っているだろうし。・・・やっぱり、俺のしていることは端から見れば余計なことなのかなあ。

「・・・・・・・・」

「ん？」

視線を感じてそちらを見る。すると橘に凄い目で睨まれていた。

「ど、どうした？」

「・・・・・・・・」

橘は無言のまま携帯を取り出しポチポチと打ち出した。そして震え出す俺の携帯。見てみると橘から「どうしたの？」というメールが来ていた。相変わらず外じゃ喋らねえのか、と苦笑して橘の方を向き「何でもない。それよりその目つきなんとかならないか？恐ろざる」と答える。そして横で顔を懸命に変えようとしている橘を見て思った。別に回りになんと言われようが関係ないか、例えそれが橘の母親でも。あれだけ悩んで決めたことだ。あるとき決めた通り胸を張って行くぞ。

「よしっ、着いたらまずは作戦会議だ！」

気分新たに気合いを入れるため、大きな声を出しペダルを思いっきり踏み込む。そして自転車はぐんぐん加速していった。

「明日があんねんー明日もあんねんー若ーいわいにーは夢があんねんー」

只今俺と橘はとあるカラオケボックスの一室にいる。

「いつーかーきつとーいつーかーきつとー叶ーえてみせるねんー」
薄暗くて狭い室内に若い男女が二人つきりなわけだが、ぶっちゃけムーデーー溢れる大人な雰囲気は微塵もない。

「明日があんねんー明日があんねんー明日があーんーねーんーてー」
まあそれはこんな歌のチヨイスをしている俺にもあるとは思うけど、それ以上に確実な理由がある。

「イツエーイ！」

そう、橘がびつくりするぐらいハイテンションだからだ。

「いやーカラオケ最高だね！」

満面の笑顔で言う橘。こいつ、初カラオケという魔に魅入られてやる。そんな橘を尻目に歌い終わった俺はカルピスを飲む。基本音痴な俺だけど、何故かこの歌だけはそこそこ歌えるんだよな。まあ音域やらなんやらが合うんだろう。

「よーっし、じゃあ次はこれ入れよ！」

さっきまでノリノリで合いの手を入れていた橘が、今度は機械を操作して曲を入れている。初めてカラオケに来た橘は当然サイバームを使えなかったわけなんだけど、今では履歴から曲を入れるほどかなり使いこなしている。

「ノリノリでいつちやうよー！」

橘がイントロのリズムにノリながら立ち上がる。やばい、ちよつと可愛い。画面には『丸のグラフィティ』の『ソーダ味』の歌詞。そし

てカルピスを飲み干した俺は深呼吸をする。よし、これで気持ちも落ち着いた。だから俺はいたって冷静なのでその上で考えよう。もう前フリは充分過ぎるほどすんだよな？だからもういいよな？

「許してよー乙女心よー！」

長い、本当に長い前フリを締めくくるため、俺は歌い始めた橘に

「なんでやん！ー！」

マイクを使ってシャウトした（つつこんだ）。そしてハウリング現状が起こった。

「あー耳がきーんてするー！でもそんなことじゃへこたれない今の私のテンション、プライスレス！」

「ポーズとりながら決め顔で言うな！あと辞書でプライスレスの意味調べ直してこい！じゃなくてあーもー！」

両手で頭をわしわしと掻きむしる。ダメだ、今までの経験上、橘のボケ全部にツッコミいれてたら日が暮れてしまう。それにこいつのボケはわざとなのか天然なのかわからないところがあるから対処の仕方難しいんだよ。今もさっきいれた『ソーダ味』歌いだしたし。

「よし、現状確認するぞ！」

とにかく話を進めたかった俺は曲を終了して今度はマイクなしで言った。

「あー！今からサビだったのにー！」

「サビだろうがBメロだろうが関係ない！お前はそこに正座！理由はなんとなくだ！」

「な、なんとなくって………」

橘は「はあ」とため息をつきながらも渋々といった感じでソファの上で正座をした。

「なあ橘。ここに来た目的は何だ？」

「歌を歌いに」

「おう、本来のカラオケの利用目的としては正解だな。でも今回の俺達からしたら間違いだ」

「むう………」

橘が唸りながら目線を下に下げる。本人も俺の言いたいことはわかっているのだろう。

「ここには作戦会議をしに来たんだ。俺とお前の二人でな」

そう、未だに人前では喋れない橘の為にだ。別にここじゃなくてもよかつたんだけど、カラオケボックスの看板を見た橘がまるで親の敵を目の前にしたかの形相で睨んでいた。「ああ、入ってみたいんだろうなあ」と判断して決めたからだ。あいつ、顔にやけそうならたらしかめる癖みたいなのがあるからな。ちなみにこれに気付いたのは知り合って結構早い段階でだったりする。

「というわけで、今すぐ問答無用で間髪いれずに作戦会議に入るぞ」

「・・・はい」

「なにもそこまで言わなくても」とぶつぶつ言いながらも橘は返事をしてくれた。

「よしっ、じゃあ始めるぞ。って言ってもまあ何するかはもう考えてきたけどな」

「始めに言っておくけど私、人前ではちっとも喋れない自信に溢れてるよ？」

「胸を張るな胸を。まったく威張れる内容じゃないことを堂々と言っちな」

そう言いつつも夏休みに入る前の食堂で起こした布施との一件を思い出す。あの時、結果的には失敗した。だけど布施が拒否したという事は橘がお願いした、つまりあいつは人前で喋ったってことだ。俺もちゃんと聞いた。『何でだ?』と布施に尋ねた橘の声を。あれ以来、あいつが人前で喋っているところを見たことがない。それだけあいつにとって人前で喋るという行為は辛いものなのだろう。でも、あいつにもちゃんと踏み出す勇氣はある。なら“慣れ”させて勇氣を出さなくてもいいようにすればいいと俺は考えた。

「作戦その1はこうだ。コンビ二行って自然な表情で缶コーヒーを買ってくる。以上」

「自然な顔って?」

「普段何もなしにしている顔だ」

「えーっと、本当にそんなことでいいの？」

「そんなことって・・・」

俺は思わずため息をつく。

「あのな、お前、普段人前でどんな顔してるか気付いてないのか？」

「え？一応無表情を心掛けてるけど・・・」

「俺ん家でも言ったけど、お前は生れつき凜々しい顔してるから恐く見られがちなんだよ」

「し、知ってるよ。だから普段から無表情になろうと努力してるしちよつと拗ねた顔をしてそっぽを向く橘。」

「ならばつきり言うけど、それ逆効果だ。無表情にしようとして力んで更に恐い顔になってる」

「うええ！？」

そしてすぐにこちらに向き直り、驚きから目を見開いた。本人気付いてなかったらしい。

「だから今回はこの作戦、自然な表情で缶コーヒーを買ってくることから始める」

「なるほど」

「それが出来て次に笑顔でだ。最終的にはアメリカ人みたいに相手に不信感与えずにフレンドリーな会話なんて出来たらパーフェクトだな。名付けて『目指せ！アメリカンガール！』だ」

「おお！ネーミングセンスはぶつちやけどどうよ？って思うけど、なにか作戦名があるだけでだいぶ違うね！主にかっこよさが！」

「作戦名に必要なのはかっこよさじゃなくてわかりやすさなんだよ！・・・たくっ」

俺はサイバームを手にとり操作する。少し遅れて画面に出てきたのは『ソーダ味』。

「・・・え？」

橘が意表をつかれたのか、ぽかんとした表情をしている。

「俺もこの曲好きなんだよ」

「いや、じゃなくて作戦は？」

「この部屋使えるのあと30分近く余ってたぞ？歌わなきゃ損だ
うが」

なんとなく恥ずかしくてそっぽをむく。

「あーあー。マイクテストマイクテスト」

意味もなくマイクテストをする。そして流れだすイントロ。それに
たいして橋は

「その曲は私のだよ！何人たりとも歌わせない！」

アメフトばりのタックルをかましてきた。

「ありがとうございましたー」

店員の挨拶を背に受けカラオケをでる俺達はー

「……………」

「……………」

ものすんごく疲れきっていた。

「……………結局、一曲も歌えなかったな」

「……………」

相変わらず外では話さない橋が無言で頷く。あのあと橋のタックル
により始まった闘いは店員の使用時間を知らせる電話により途中引
き分けとなるほどの大接戦だった。……………代償はでかかったが。
「なんかすんごく無駄な時間を過ごした気がする」

「・・・・・・・・」
ため息をつきながらこちらの肩を叩く橋。仕方がないよとでも言いたいのかもしれない。

「よしっ！」
ぐぐつと背を伸ばしながら声を出して気合を入れる。

「んじゃ今から頑張るぞ。「明日から頑張ろう」と今日止めると止め癖が出来て、明日になればまた「明日から」って同じ理由で先のはしにしてしまいがちだから」
少し顔をしかめながら橋がこちらを見てくる。

「心配するな。わざわざ隣の隣の隣町まで来たのは知り合いに会わない為だ。ここならさすがに学区が違うから知り合いもないはずだから」

それでも橋の表情は変わらない。

「それに始めは俺が隣にいるからさ。気楽に行こうぜ。無理なら無理で違う方法考えたらいいんだしな」

笑いかけながら今度は俺が橋の肩に手を置く。

「・・・・・・・・」
そこまで言っつてようやく橋の表情から少し力が抜けた。手を見ると握り拳をつくつて気合いまで入っているようだ。

「よし、じゃあさっそく目の前のコンビ二へ特攻だ。行くぞ」
橋の背中を軽く叩いて促す。すると少しぎこちないながらも前に進み始めた。目的地は目の前にあるコンビ二。俺は橋の横について一緒に歩く。すると、コンビ二の入口の少し前まで来た橋が止まって深呼吸を始めた。うん、別に焦る必要なんてないもんな。自分のペースでいくことが大事だし。そう思って橋の横に立つこと数分。

「・・・・・・・・よし」
橋が喋った。

「・・・・・・・・」
あまりの驚きに声を出しそうになるのを必死に堪える。そんな俺をよそに橋は店内へと入って行った。

「いらっしやいませー」

店内からもれてくる店員の挨拶を聞きながら思った。まだ橋の人見知り（？）を治そうと作戦を始めて数分だけど、あいつは早くも変わり始めている。この調子でいけばあいつが友達100人出来るのも時間の問題だなとふと思っー。

「うおっと。どうした？」

店内に入ると、入口付近でこちらに背を向けて棒立ちになっている橋がいた。

「い、いらっしやいませー」

さっきよりひきつった店員さんの挨拶が聞こえる。さてはあいつ、緊張の余りその場を動けず店員さんを睨んでるな？と判断した俺はひとまず店から出ようと橋の手をひく。

「橋、とりあえず店出るぞ？」

そう言っ店員さんの方に会釈しようと思っちらを見る。

「あっ」

そして目があった。

「……………」

店員さんと俺が互いを見たまま固まっている。そうか、これが原因で橋固まっったのか。神よ。何故貴方は基本的にDSですなんでしょうか？

「き、奇遇だな」

俺は比較的冷静を装って話し掛ける。

「……………」

向こうは無言。珍しくテンパっているみたいだ。そこにいたのはいつぞやごたごたがあった隣のクラスの委員長。

「こ、ここでバイトしてんだ。布施さん」

泣く子も黙る貫禄がハンパない女性のリーダー、布施葵さんだった。

第4話 スローガンは劇的ビフォーアフター どたばた編

やばい、状況がやばすぎる。いつかは知り合いに遭遇してしまうこともあるかもと思っただけだが、まさか記念すべき第1回目でもラスボスクラス+過去にいざこざありの布施さんというのは泣きつ面にパイルドライバーだ。

「は、ははは・・・」

とりあえず笑つとけという信条に従ってひきつった笑いをする俺。

「・・・」

無言で射殺すような視線を布施さんに向ける橘。

「・・・」

俺のさっきの挨拶を完璧に無視して真つ向から睨み返す布施さん。

誰か、胃に優しい食べ物と胃薬を用意してくれ。

「・・・」

嘆いたところで誰かが助けてくれるはずもなく、3者が無言の気まぐずい空氣が流れる。俺達以外に客がいなかったのがせめてもの救いだ。どうする？ 布施さんとは昼休み言い争ってからまだ一度も話をしていない。自分は間違っただけとは言っていないという俺のちんけなプライドと、橘が全ての元凶である過去の出来事について何も語らないのが理由で、「まあ話し合うのは橘の人見知りか治つてからでいいか」と浅はかな考えを持つていたからだ。こんなことになるなら無理矢理にでも謝っておくべきだったとか考えるがそれは後の祭ってか、そもそも誰もこんな事態想像出来ないわ！とかわけわからないこと考えだして頭がパニックだ。

「えーっと、布施さんはここでバイトしてるの？」

「じゃなきゃ何してるように見えます？ 部活動してるように見えませんか？」

「で、ですよー」

駄目だ。やっぱりというか当たり前というか、かなり不機嫌でいら

っしやる。ここは今からでも謝っておくべきだなっんそうしよう俺がストレスで胃潰瘍になっってしまう前に！

「あの、布施さ「布施葵」！商品の品だしはどうなっている！」「俺が謝ろうとした矢先、またもや意外な人物が登場した。

「か、柏木さん？」

これまた隣のクラスのチアリーディング部所属の柏木優那さん。この人はもうこういういきなりな登場しか出来ないのか？

「おう、右片修司と橘柚希じゃないか。とりあえず言わせてもらおう。いらっしやいませーと」

「いや、客に対する接し方としては0点だろ」

「ならば言わせてもらおう。畏まりましたーと」

「あれ？俺、コンビ二で喧嘩売られてる？」

「冗談だよ。相変わらず見事なツッコミだな、右片修司は」

笑いながらこちらに来て俺の背中を叩く柏木さん。独特の話し方も健在だ。

「柏木さん、アルバイト中ですよ？」

睨む布施さん。

「ああそうだったな。という訳で布施葵、商品の品だしを頼む」それを真正面から受ける柏木さん。

「……わかりました」

何か言いたそうにしたものの、布施さんはそう返事して店の奥へと入っていった。

「柏木さんは働かなくていいのか？」

「私は休憩だよ。今までずっと奥で作業していたからね。いやあ、それにしても半月ぶりだな。こんな離れた町に何のようだい？」

「いや、たまには遠くに遊びに行こうかって話になってさ」

少しヒヤツとしたものの、何とか平静を保って答える。橘の件は本人が隠したがっていたので伏せておかないといけないからな。

「へえ、たまには、ねえ」

そう言っつてニヤニヤする柏木さん。

「な、何だよ？」

「いやなに、『たまには』というほど普段から遊ぶ親しい仲なのかと勘繰っただけだよ。私の調べが間違っただけなら2人が知り合っただけだよ。この1ヶ月くらいだろうか？」

「言われてドキツとする。」

「……別にいいだろ。友達つくるのに月日や時間は関係ないし。照れ臭くなり、苦し紛れに臭い台詞をはく。……臭い臭いと言葉が続くとあんまり気分は良くないな。」

「全く以ってその通り。友人をつくるための教本やらテンプレートがあるわけではないしな。というわけで、だ。私と友達になるう」

「はい？」

「思わず目をまるくする。何だこの流れ？」

「傷付くりアクションだな右片。私が友人をつくるのはそんなにおかしいことか？」

「ゴメン、あまりにも急で驚いただけだよ」

「ふむ、なら本題に戻るか。で、どうだ？」

「そ、それは……」

「言い淀む。橘の方を向きそうになるのを堪えてはははとつくり笑いをする。柏木と友達になることを悩んでいるんじゃない。この場には橘もいることに悩んでいるんだ。ここで俺だけ、というのは橘にしちゃつらいだろう。なら、いつそのこと流れを無視して無理矢理にでも橘を巻き込むべ」

「ふむ、ここまでストレートに誘った手前、悩まれるのは結構堪えるな。じゃあ橘柚希はどうだ？」

「きか？などと考えていたら、柏木さんがそう言った。」

「……」

「俺。当たり前前の如くの無言に加え、柏木を睨む橘。驚きのあまり固まる。」

「……今日はついていないな。こうも立て続けてフラれるとは」

珍しく(?)落ち込む柏木。無と驚と哀、変なトライアングルが完成していた。

「へ?いや、あの・・・へ?」

思わず柏木に失礼なことをしてしまったとか、さっきの「友達になるう」発言は橘も入ってたのかとか予想外の出来事の連続で頭がこんがらがっている。

「いや、気にするな。十人十色、好きな奴もいればどうしても馬が合わない奴もいるものだ」

そういつて笑う柏木。不敵に笑う彼女にしては珍しく、その表情には物悲しさが漂っていた。

「では仕事もあるのでこれで失礼す・・・」

「携帯は!?!」

慌てて叫ぶ。今はテンパっている場合ではない。

「あ、ああ。ここにあるが」

柏木がポケットから携帯を取り出す。

「赤外線行くぞ!俺が送る方な!」

「いや、遠慮しておくよ。無理に聞き出すものじゃ」

「問答無用!友達つてのは誘った方に人権無しだ!」

大声出してテンションで乗り切る。

「そ、そういうものか?」

大声のせいか、珍しく戸惑いながらも柏木は携帯を操作してくれた。その間に俺も作業を進める。

「よしっ、送信!」

「ありがとう。ん?アドレス2つあるが上がそうか?」

「上が俺、下が橘のやつ」

「いや、本人に許可なくそれは」

「俺の友は俺の友、俺の友は橘の友。よってオールオッケーだ」
笑顔で親指を立てる。

「何だその献身的なジャインは」

ツッコミつつも、柏木はようやく笑ってくれた。うん。一時はどう

なることかと思っただけど、上手くいったようだ。

「柏木さん、いい加減こちらを手伝ってくれませんか？」

そんなことを考えていると、店の奥から明らかイライラしている布施さんが出て来た。

「おっ、よかつたら布施もアドレス教えてくれないか？」

「・・・嫌です。貴方は何を考えているんですか？こちらは今仕事中です」

瞬時ではなかったものの、きっぱりと断られた。うっ・・・やっぱこっちはあの件をすっかり話しあってからじゃないと無理そうだな。

「そっか、残念だけど仕方ないな。んじゃこれ以上仕事の邪魔するのもあれだからもう行くな。バイト頑張ってな」

右手で手を振り、左手で固まっている橋の手を掴んで俺はコンビニを後にした。

急にこの場所を去っていった2人。そして、静かになったコンビニにぼつんと残された2人。

「はあ、君も不器用な奴だな」

そんな空間を、作業している柏木の方から口火をきつた。

「何がです？」

同じく、作業をしながら答える布施。

「教えればよかつたじゃないか、アドレス」

「私、彼と和解した覚えはありませんが？」

「でも、この前シフトが一緒だったときに言っていたではないか。一度話し合いたいと。あとこうとも言っていたよな？橋柚希の真実が知りたいとも」

それを聞いた布施の動きが少し止まった。

「あの流れだと橋柚希との接点も出来たぞ？」

それに、と言いながら荷物を上に持ち上げる。

「右片修司は向こうからアクションが来るだろうが、橘柚希はこちらからアクションを起こさないとおそらく一生このままだ」

「……ならそれまでの縁ということですね。こちらが折れてまで彼女と知人になる必要はありませんし、なりたいたいと思いません」

荷物を受け取りながら布施が答える。

それに、と今度は布施が続けた。

「私は彼女を許してませんし、そもそも人としても認めていません」
「……はあ、前言撤回だ。君は不器用なんじゃなくてツンデレだったんだな」

「はい？ツンデレ？」

「気にするな。ただの戯言だ。おっと客が入ってきたな。こっちはやっとかから接客を頼む」

「はあ、わかりました」

布施はツンデレという言葉に疑問をもったみたいだが、

「いらっしやませー」

と言ってレジへと駆け足気味に向かって言った。

「……とはいつたものの」

一人残された柏木がその背中を見つめながらぼつりと呟く。

「はたして、あいつにデレはあるんだろうか」

その顔は苦笑していた。

橘の手を引きながら俺はある場所へと向かう。そこは

「いらっ、……しやませー」

「大人2人！時間は30分！機種は何でもいいです！」

「わ、わかりました。ではこちらの部屋をお使い下さい」

「どうも！」

俺は店員からマイクやら機械やらが入ったカゴを受けとって部屋へと向かう。そう、先程入ったコンビニの向かいにあるカラオケボックスだ。受付の人の笑顔が少し引きつっていた。たぶんここ出てから10分もたつてないのにまた来たよとか思われたんだろうけど、そんなのお構い無しだ。部屋に入って椅子に座る。そして・

「よっしやー!!」

「どーしよー!？」

2人の声が爆発した。

「きたきたきたー!きたぞこれ!!」

「うわうわうわー!どうしよお!？」

お互いを見る。

「「とりあえず!!」」

「よしっ!歌うぞ!」

「うんっ!歌おう!」

マイクを取る。曲はもちろん『ソーダ味』。流れる前奏。立ち上がる2人。そして、本日2度目のリサイクルが始まった。

5分後・

「「はあ、はあ、はあー……」」

2人して燃え尽きていた。

「はあー、歌ったな」

「うん、そだねー」

天を仰いで息を吸う。そうすることによって呼吸が落ち着いてきた。「なあ橘、お前携帯に何人のアドレス入ってる？」

聞きながらそちらを向く。すると橘も天を仰ぎながら呼吸をしていた。

「3人」

態勢はそのまま、右手だけを動かし指を3本立てた。

「うおっ、即答だな」

少ないとはあまり思わなかった。だって俺も似たようなもんだし。

「うん。だってお母さんに徹さんでしょ。あと右片君」

「よし、なら今日で4人だな」

「うっ……」

俺が言うと、橘はあからさまに動揺した。

「ねえ、そのことなんだけど」

「ん？」

「流れるに何かおかしくなかった？」

橘が仰ぎ態勢から一変して畏まった態勢になりながら尋ねて来る。

俺もそれを見て座り直した。

「だって自分でいうのもあれだけど、私だよ？普通なら私のアドレ
スなんか聞いてこないよ」

「……」

考える。どう話したものと。橘は俺の方を上目遣いでこっちを見
ている。体はでかいが気は小さい。そんな橘と出会ってから今まで
情報を整理する。

「……なあ。オオカミ少年って話、知ってるか？」

そして俺は話し始めた。

「えーっと、「狼が来たぞー！」って嘘ばかり言つて村人を困ら
せていた少年が、本当に狼が来たときに「狼が来たぞー」って言っ
ても日頃から嘘ばかり言つてたから信じてもらえなかった話だよ
ね？」

「おう。あの話って、最後は少年の飼っていた羊が全部狼に食べら
れたってオチの話なんだ」

それでさ、と言って一息入れる。

「あの話、俺は子供のころずっと納得いかなかったんだ」

「何で？」

「あれは日頃から嘘をついてばかりだと大切なときに信じてもら
えないから嘘をつくのは止めましょって教訓の話だろ？それ自体
はすごくいい話だと思うんだ。子供に嘘は悪い事だってわかりやす

く教えてるわけだし」

高校生の俺が偉そうに言うと、大人になったら付くべき嘘があるのかもしれないけどそんなのこの話を読む小学校低学年が考えることじゃないだろうし。

「だけどさ、あれってどうってバッドエンドじゃんか。んで当時小学校2年だった俺は学校の図書室で読んで思ったんだよ。なんで村人は少年が嘘をついたときに嘘はだめって教えてあげなかったのかって。少年だって子供だ。そりゃ村人の騙されるリアクションを楽しんでたんだから悪いのは少年なんだけど、ちゃんと誰かがしつかりと嘘をつくのは悪いことだって教えてあげてたらこんなこと起きなかったのにつて」

まあ嘘をつくのはやめましようって教訓の作り話なんだからあげ足とつても仕方がないんだけどさ。

「その不満をさ、家に帰って母親にしたんだよ。そしたらさ、嬉しそうに教えてくれたよ。実はこの話にはもう1つの教訓があるんだよ」って

「もう1つ？」

「おう。少年の羊は全部食べられちゃったんだけどさ、実はオリジナルの寓話では村人の羊も何匹か食べられてたんだつて。それで教訓、少年がいつも嘘を言っているという先入観に囚われず、人はちゃんと信じましようつだつてさ。結局はバッドエンドじゃんかって俺は全然納得いってなかった」

橘は黙って聞いてくれてる。

「今になって考えてみたら、寓話つてのは解釈の問題で10人いたら10通りの考えがあるかもしれないし、母親だつて実はつていいながらも俺のためにあの教訓を自分で考えてくれたんだらうなつて思っただけどな」

明らかに関係のない話に聞こえるけど、それでも黙って聞いてくれる。

「んでようやく本題なんだけど、勇気を出して信じてみないか？」

「えっ？誰を？」

橘がきよとんとしている。急に話題が変わったからついていけないのだろう。

「アドレスを聞いてくれた柏木を。彼女がどんなつもりで聞いてくれたのかはわからないけどさ。それでも、やっぱり信じてみないと始まらないと思うんだ」

純粹に友達になりたかったから。ただそこにいたから何となく。悪意を持って。考えうる理由なんていくらでもある。俺も柏木とはクラスが違うし話したのも数回だけだから詳しいことは知らない。でも、いい奴だと思った。

「友達、つくるんだろ？」

橘は村人のように人を信じることを怖がっているように見える。

「……うん」

「なら、いつしよに踏み出そうぜ？」

橘が立ち止まる度に背中を押してやる。あいつに1番必要なのは勇氣だと思っから。

「……うん、そだね」

橘が少し笑いながら小さく頷いた。

「よし！じゃあまずは人見知りを治す『目指せ！アメリカンガール！』作戦を仕切りなおす！メールの件は柏木の方から送ってくれた場合はその場で作戦会議、向こうからメールがなかった場合はこちらから夜になつたらメールするぞ！夜にはバイトも終わってるだろうからな！」

「りょーかいであります！」

「残り時間は！？」

「15分であります！」

敬礼しながら橘が答える。空元気なのは薄々感じていたがそこは触れない。

「よしっ！んじゃ先手を譲ってやるから行って来い！」

「サー！イエッサー！」

入れる曲はまたしても『ソーダ味』。実は橘はこれしか歌っていないという事実にも触れない。こうして本日3回目（以下略）が始まった。

第5話 夏の終わりはちょい過激

あれから数日がたった。

「・・・・・・・・くそ、くそっ」

今は夏の終わりが近い8月の27日。始めは一ヶ月も休みがある！とテンションがかなり上がった夏休みも、残すところあと5日しかない。そんな中、俺はある地獄を味わっていた。

「やつぱ無理・・・・・・・・いやっ諦めるな俺っ」

こんな状況で俺みたいな性格の奴ならまず経験するであろう、言っ
てしまえば夏の風物詩の1つ。

そう、

「宿題、終わらねえ・・・・・・・・っ！」

宿題ラツシユの地獄だ。いや、わかってるんだよ？早い段階で計画的にやればなんの問題もないってことは。

でもさ、自由な時間が山ほどあるんだぜ？そりゃあ怠けちゃうっしよ。ぶっちゃけバイトやら橋との特訓やらで疲れて後回しにしたのが理由だったりする。まあ中学生時代の3年間も夏の終わりはこんな感じだったけど。・・・・・・・・学習しないなあ俺。

「えーっと、オームの法則はV=R Iだから・・・・・・・・」

因みに今日橋は用事があるとかで珍しく俺の家に来ないとメールがあったのは幸先がいい。さっきは残り5日と言ったけど、実のところ明日と末にバイトを入れてるので丸一日空いているのは3日だけだ。あいつがいるとまず勉強はかどらないから貴重な1日が無駄になっってしまう。

「並列はかかる電圧がどこでも一緒だから・・・・・・・・」

9月の1日に提出しなければいけないのは理科と数学と社会のワーク。んでまずは得意なものからと理系脳の俺は理科のワークを朝の9時からない頭をフル回転させながらこなした。んで、朝にバナナとコーヒーを腹に入れたつきりで昼飯の時間も惜しんで勉強を続け

て2時になつてようやく終わりが見えはじめたときだった。

「頼もーう！」

全くもつてお呼びでない乱入者が現れたのは。俺は誰かわかりきつていながらも一応玄関をチラ見。そこにはなんの意外性もなく予想通りの人物が2人いた。そして俺は何事もなかったかのように理科のワークへと視線を戻す。この間0.5秒。

「・・・雄馬」

「あいよー」

背後に雄馬が来る。俺は完璧に無視してワークを続ける。そして、

「ふんっ！」

「ごふえっ！！」

バックドロップをかまされた。

「ぬおあー！！」

畳の上を転げ回る俺。メキヤツていったぞメキヤツて！

「修司、無視しないでよ。私傷つじゃない」

瀬上が何かをのたまってるが、俺はリアルにそれどころじゃない。

下手すりゃ俺の首は赤ん坊みたいにすわらない状態になっちまう。

「たくっ、んな大袈裟な。加減はしただろ？」

「ば、バックドロップをどうやったら加減なんて出来るんだよ！？」

痛みが引かないながらもあんまりな発言に無理矢理反応する。

「重力で落としたただけだろ？本気ならプラス腕力で地面に突き刺してるって」

「人間つてのは頭から落とされるだけで致命傷なんだよ！」

「そうか？でも俺は大丈夫だぞ？」

「自分の物差しで計るなこの格闘バカが！」

今度下駄箱に偽のラブレター仕込んでやる！一生外で待つとけ！

「まあまあ修司、ここは私に免じて許してあげてよ」

「いやあんた計画者だよね雄馬けしかけてたよね！？」

「あれっそうだっけ？修司ったら頭打って記憶が混乱してるんじゃない？ほら、映りが悪くなったテレビって殴ったら治るっていうけ

どさ、あれその場しのぎで実際悪化させてるだけの気がするじゃん？」

「よしつ、今すぐ帰れ！そして次に会うのは法廷でだ！しばらく刑務所で頭冷してい！」

「ごめんごめん冗談だって。修司だって私を無視したんだからこれでおあいこね」

「り、理不尽だ・・・」

勉強頑張る為に無視しただけでバックドロップ。まるで無理矢理運気が上がるがキャッチフレーズの壺を10万で買わされた気分だ。だけどどちらかが折れないと話が進まないと大人な俺はぐつとそこで我慢した。ぶつちやけのままやりとりを続けて貴重な時間を消費したくないだけだ。

「・・・はあ、わかつたよ。んでいったい本日は何のご用で？見ての通りこつちは宿題にラッシュをかけてるんで忙しいから急ぎじゃないなら夏休み終わってからまた来てくれ」

意識。とつとと帰れ。

「ところがどっこい、急ぎの用事なんだよねーこれが」

「へ？そうなの？」

瀬上の言葉に雄馬もうんうんと頷いている。てつきり俺が宿題におわれているだろうとふんで邪魔しに来たとよんでいた俺は真面目モードに入ってシャーペンを置いた。

「そうなの。私達だってこの時期修司が宿題におわれてるのはわかってたわよ。でもね、それでも来なくちゃいけない大事な用事があるの」

「それは悪かった。んで、どうした？」

俺がそう促すと、瀬上はその場に正座してこほんと咳ばらいを1つ。そして話始めた。

「単純に思い出してみて。私達の関係は？」

「か、関係？・・・と、友達ってことか？」

ちよつと照れが入るのは許して欲しい。

「はい疑問形アウト。ちゃんと断定して」

「・・・友達だ」

顔が真っ赤なのは許して欲しい。

「そう友達なのよ。じゃあ友達がすることは？」

「・・・はい？」

なんか話が訳わからない方向に進んでる気がする。

「だから友達がすること。さっきも言ったけど単純に考えて」

さっきは思い出してじゃなかったっけ？なんてツツコミはせず真面目に考えてみる。

「えーっと、助け合う？」

「惜しいっ。もっと日常的に友達がすること」

「んじゃ、遊ぶとか？」

「そうそれ！友達と一緒に遊ぶのよ！買い物行ったり映画見に行ったり文字通り遊んだりね！」

「お、おう」

急に瀬上がヒートアップしたので思わずたじろぐ。

「な・の・に！なのによ！？私、修司と夏休み入ってから1度も遊んでないの。これ、どういう事？」

「あー、そうですね・・・」

やっと瀬上が言いたいことがわかった俺は敬語。だって完全に俺が悪いからなあ・・・。

「そりゃ修司には修司の都合があるってわかってるわよ？私には私の用事があるし。でも修司、私に言ったわよね？「空いてる日出来たら連絡する」って」

「は、はい。言いました」

この時点で俺正座。瀬上は仁王立ち。いつの間にか立ち上がった瀬上の影響で威圧感アップだ。

「私待ったわそりゃもうまったわよ修司から連絡が来るのを。でも夏休みは残すところもう5日よ5日、1週間すらきっちゃってるわ」「そう、ですね」

俺冷や汗だらだら。瀬上笑顔でにっこり。

「それで直接会い来たら完璧に無視されて。これって悪いのはメルしない直接会いに来た私？それとも家でせつせと宿題していた修司？」

「私めが100%悪いですはい」

座右の銘は備えあれば憂いなし。そんな俺はいつでも土下座と逃走の準備万端だ。宿題？それより目先の我が命だ。

「そうよかった。返答しだいでは私、引っこ抜くところだったわ何を？と聞く愚行は犯さない。恐らく過去に引っこ抜かれたことがあるのだろう雄馬の真つ青になった顔で充分理解したから。痛いじやすまないんだろなあと。」

「いや誘おうとは思ったんですよほんとでも瀬上はみんなに人気で超多忙だろうから私めなんかがお誘いしてはいけなほんとすみませんでしたごめんなさい忘れてましたー！」

駄目だ、あの笑顔を前に嘘を付き続ける勇気が湧かない！

「よし、許してあげる」

「マジで！？真剣てかいてマジで!？」

即答で許しがでるなんて思ってもいなかっただけに嬉しさが3倍増しだ。

「ええ本気とかいてマジで。でも条件が1個だけ」

ある意味予想通りな展開だけどあんなに喜んだ後なのでテンションが地面にめり込んだ。

「・・・俺、今すごいピンチなんですよ」

「条件が1個だけ」

「ほんとかつつかつでさ。締切前の漫画家みたいな感じなんだよ。漫画家どんなのか知らないけど」

「条件が1個だけ」

「・・・」

「・・・」

黙る両者。しかしそれは一瞬で

「ざっ！」 俺がダツシユで逃げ出した音。

「じっ！」 俺が般若に後ろからどつかれた音。

あまりにも的確過ぎて地面に倒れ込む俺。

「さてと。雄馬、お願い」

「りょーかい」

「ぼ、暴力は、反対、だ」

雄馬の肩に担がれた俺は揺れる視界の中、無駄だとわかりつつも必死に抗議する。

「暴力じゃないわよ。撫でただけだもの・・・ちよつと強めに」

「こ、ここにも、格闘、バカがいた、とは」

ちよつと強めに撫でたつもりでの確に急所どつくってどんな撫で方だよ。飛んでる蚊を潰そうとグーで壁ごとぶち抜くドジっ子か・・・そんなドジっ子、いたら人口3割は減るわ。俺はわりと真剣こいつらに自分の物差しで人を測ってはいけないと教えるべきだと思ひ始めた。

「みーん、みーん。みーい、み、みい・・・」

蝉が短い寿命を終える、夏の終わりの出来事だった。

「あー気持ち悪い・・・」

まだ後頭部を殴ら・・・ごほん、撫でられた影響が残る中、なんとか踏ん張って歩く俺。だって意識があるのに男に担がれてるってのは抵抗ありまクリスティーだ・・・頼むから笑ってくれ、それで宿題という名の現実から目を逸らすから。

「もう、男の子なんだからしゃきつとしなさいよ」

俺を見てぼやく瀬上。

「・・・」

無言の男。

「なあ瀬上」

「ん？どしたの？」

「触れようかどうか悩んだんだけど、あえてこの話題飛び込んでみるわ」

んじゃ皆さんと一緒に、せーのっ。

「何で雄馬黙ったまんまなの？」

そう、あの『彼女が隣にいてテンションが上がりまくる男第1位』
(今考えた)がバツクドロップのくだり以降無言だったりするのだ。

「ああこいつ？ただ喋らないでって脅し(お願いし)ただけ」

状況と台詞によっちゃ男なんていちころなニコツとした笑顔で話す
瀬上。

「いやーあの、瀬上さん？。恐らくなんですけど、文字とそのルビ
が間違ってますよ。」

普通はお願い(脅し)のはずだ。

「これであってるわよ。ねっ、雄馬」

「うほっ」

言いながら横の雄馬にアッパーカットをかます瀬上。理不尽さでい
うと某青狸漫画の初期に出てくるジャイ ン級だ。

「これ何度目の質問になるかわからないけどさ、今回は何やらかし
たんだ？」

「聞いてくれる！？あのね、雄馬ったらー」

有無を言わさない会話のラッシュ。瀬上の口から出てくるのは、ま
るで決壊したダムから流れる水のような大量の言葉の数々。ほぼ愚
痴100%の話は雄馬が「他の女性を見る」だとか、「自分をぞん
ざいに扱い過ぎ」だとか。まあぶっちゃけ要約すると、内容は一言。
『のろけ話』

本人にとつては深刻なのかも知れないけど、俺からしたらただの痴
話喧嘩。こんなことなら早く帰って宿題やらせてくれ。

そして3分間に15個目という驚異的な愚痴の最速ラップを瀬上が
叩きだしたときだった。

「ひいー！」

「くそっ！くそっ！何なんだよ!？」

眼前を二人の野郎(チャライヤンキー風)が通過したのは。だって
金髪にピアス、腰パンにじゃらじゃら鎖つけてだらけたような服装

つていつたらお決まりのパターンだろ？んでそのとき、さつと雄馬が瀬上を庇うように前に出たのが気に入くない。それで瀬上も少し顔を赤くしながら「雄馬・・・」と呟いてるのも腹がたつ。まあとりあえず言いたい事は2人をぶん殴りたいってことだ。普段ならそんなことを考えるはずの俺が、今回は頭が真っ白になっていてそれどころではなかった。

なぜならー

「・・・・・・・・」

ヤンキーを追いかけけるように、後ろから爆走している橋がお馴染みの無表情で眼前を通過したからだ。あ、あいつ何やってんだ？

「な、なあ。ひよつとしなくても今の橋だったよな？」

2人に同意を求めようと話し掛けながら振り返る。

「今まで、その、ごめんね。ちよつと理不尽過ぎたよね？」

「気にすんな。惚れた女だ。殺されても悔いはねえ」

おでんの大根もびっくりなくなりなうのアツアツだった。このアツアツバカップルが、エジプト行って干からびる！

「もーどーなつてんだよ・・・・・・・・っ！」

「雄馬・・・」「彩香・・・」と2人の世界に入っているバカップルを放置して、俺はぼやきながら1人で駆け出す。悪いけど今の俺にほつて置くという選択肢はない。もうあいつとは無関係ではないからな。そんなこんなでお節介から走り出したのはいいものの。

「はあっ、はあっ、は、早い・・・っ」

俺はすではばてそうだった。部活をやっていないとはいえバイトを結構な頻度で入っているし、中学では運動部に所属していたからそれなりに体力には自信がある。なのに橋が早いのはともかく、その橋から今だ逃げる事が出来ている体育会系のヤンキー2人に納得がいかない。タバコとか吸って肺がボロボロになってんじゃねーのかよ！ 偏見

そんなことを考えながらなんとか橋を目視出来る距離を保っていた俺に幸せな映像が見えた。

「よしっ！右に曲がった！」

そこは進めば行き止まり。ようやくこの鬼ごっこから逃げ出せるバカなヤンキーに感謝する。

「はあっ、はあっ、はあ．．．っ！」

右に曲がった橋を追いかけて最後のダッシュ。俺の体もつてくれよ！と思いつながら右に曲がる。ようやく終わったと安堵しながらゆっくり歩いて息を吸う。

「はあっ、はあっ、．．．ごへっほっ」

すると途中でむせてしまった。

「さてと、何がいったいどうなってるのかなあつと．．．」

呼吸が落ち着いてきたところで前を見る。そして俺は固まってしまった。

「うぎゃー！！」

「ごはあつ！！」

そこには2人どころか軽く10人はいる不良達。そっか、あいつらは仲間のいるここに誘い込んだのか。馬鹿は不良達じゃなくて俺だつたんだとか、さっきの俺の最初で最後の感謝を返せとか思うけど、今はそれどころじゃない。

「ごふえっ！！」

「この化けもあああ！！」

その10人以上いる不良達を前に橋が善戦どころか圧倒しているからだ。確かに橋は県内最強とか言われてるし、実際に不良と戦ってるのを見たこともある。でもそのときは3人だったし見たのも3階からだったからこんな近くではなかった。やべえ、瀬上の般若超えてるわ。あっちは強いというよりか非情だし。

「もーちよい橋に対するツッコミ抑えようかな．．．」

俺がそんなチキンなことを考えている間に橋は全員を倒し終えていた。ん？戦闘描写？俺の物語はそんな安易に戦闘をいれるそんじよそこらの小説とは違うんだな！これが。決して面倒くさいとかじゃないからそこんとこよろしく。

「おい橘。いったいこれはどうしたんだよ？なんかこいつらにされたのか？」

とりあえず話を聞こうと橘に歩みよりながら話し掛ける。

「……………」

しゃがんで不良の一人をもそもそといじっていた橘が、何かを取り出しポケットに入れて立ち上がる。そして眉間にシワをよせながら（驚いた顔を隠すため）俺の方を見ると携帯を取り出す（人前で喋れないからメールを打つため）。うわぁ、（）で説明してみたら普通の文より補足の方が多くなってよ。特訓の成果で一言くらいなら喋れるようになったのになぁと思いつつこっちも携帯を取り出すとポケットに手を入れる。

「ほんと、そこの兄さんのゆう通りだな」

その瞬間、後ろから声が聞こえてきた。

第6話 激突。虎被りVS眼無し龍

振り向くとそこには黒髪でラフな感じのショートカットの少女が1人。服装は制服で、俺達のは違ふことからよその高校だというのがわかる。スカートが少し短めにされていたり、うっすらと化粧、いわゆるナチュラルメイクをしているところからも今時の女の子だ。まあ胸が少しけしからんとところから高校3年生だろうと予想をつける。ここでまだ喋れない橋に代わって軽く質問だ。

「えーつと、どなた？」

「ただの通行人だよ。んなことより、これはちーつとばかしやり過ぎじゃないか？」

女性（年上と判断したことにより少女から変更）は目を鋭くして橋を見る。その周りにはまあ当たり前だけど先程の不良が転がっていた。

「あんたが不良を追っかけてるのを見かけて来てみればこれだ。まあ相手からちよっかいかけてきたのかも知れないけどよ、それでも気絶させるまでやるのは良くないだろ」

女性は怒っていた。そりゃもうわかりやすいぐらい敵意を剥き出しにして。間違っても「これだからゆとりは。カルシウムとれカルシウム」と俺のウィットにとんだ絶好調のギャグも言えそうにない。

「私は武術をやってるからわかるけどよ。漫画みたいに首筋殴って気絶させたりなんて真似、そうそう出来るもんじゃないしするもんじゃない。それほど意識を奪うなんて行為は難しくって危険だからだ」
「ただ、ゆっくりと話しては間をおく。これはまず自分の意見を言っつて、いつでも相手が話し出したら聞けるように配慮しているからだろう。だから彼女はおそらく悪い人ではない・・・と思う。てか、その危険な行為ってやつを俺も橋にされたよな？・・・うん、気のせいだということにしておこう。」

「.....」

話を戻して本題もとい問題はこつち。

「何でも喋らない？自分が悪いって自覚してるからか？」
違う、橘は喋らないんじゃない。そう説明しようと
1歩踏み出す。

「ここまで言っても喋らない、か。なら・・・」
彼女の全身からフツと力が抜けたようにみえた。

「- 体に聞くまでだ！」
次の瞬間、一気に駆け出して来た。

「え！？嘘お！？」
思わず叫ぶ。あんたやつは悪い人なの！？いや彼女は短気なだけだ
うんそうだと自分に言い聞かせて彼女の前に立ちはだかる。

「落ち着いてくれっ！実は-」
「悪いがあんたにや聞いてないよ」

被せ気味に喋ってくる彼女に止まる気配は微塵も感じられない。
（こうなったら抱き着いても止めてやるいやあのけしからん胸に
飛び付こうなんてやましいところは微塵もないようないない）と
煩惱にまみれながら両手を広げてタックルをかます。

ぶつかる。と思った瞬間。
「あんたは素人だね」

目前で彼女が消えた。驚いて後ろを振り返るとそこにはかなり前傾
姿勢になったまま走る女性の姿が。しゃがんだことよって視界か
ら消えて抜き去られたのはわかったが、しゃがんだことが、そして
横を通っていったのがわからないくらいの速さだった。

「橘っ！」
体は驚きと恐怖からか動けない。間に合わないと判断し、無意味と
わかっていても叫ばずにはいらなかった。

「・・・・・・・・」
橘は無言不動のまま、2人の距離がみるみる近づく。距離が半分に
なる。ここにきて橘は前傾姿勢になりながら左足を前に出して両手
をだらんと下げ、右の拳をわかりやすく握り込んだ。俺でもわかっ

た。フェイントか本気かはわからない。が、右の拳で迎え撃つというアピールだと。それに対して、女性は軽く口の端を上げながら両手を掲げ、左の拳を握り込む。そしてお互いがあと1歩踏み込めば手が届く距離に入った。瞬間、

「っ！」

「っ！」

両者が同時に動いた。女性は目にも止まらぬ速さで左の拳を振り下ろし。橘は体を起こしながら右の拳を少し弧を描き気味に振り抜く。両者の拳が交差し、鳴り響く鈍い音。結果 -

「っかはっ」

『橘の』拳が相手の顎を見事に捕らえた。速さでいえば女性の拳の方が速かった。しかし橘は体を起こしながら距離を詰めることにより、その拳をかわした。渾身の左だったのか、攻撃をかわさたまままだ動けないでいた女性の顎に橘の拳が突き刺さったのだ。要するにカウンター。それも膝が伸びきったところという体重の乗った。威力を物語るかのように女性の体が一気にのけ反り、

「やるじゃねえか・・・」

ながらもかわされた左の拳を引かずにそのまま橘の頭を掴んだ。そうすることによってなんとかのけ反りの衝撃を堪えきる。そして

「なかなか効いた・・・っ」

無理矢理左足を1歩前に踏み込み

橘の頭を強引に引き寄せ

のけ反ったことにより出来た距離さえも助走に使い

一息に

「ぜっ！！！」

頭を振り抜いた。

始めは現地を見ながらも何の音かはわからなかった。それ程、日常では聞かない音。それ程、さつきとは比べものに鳴らない嫌な音が辺りに響き渡った。技名はヘッドバット。パチキ。頭突き。そして出来る上がる光景は逆。

女性は頭を振り抜いた勢いで前傾姿勢になり。

頭を離された橘は頭突きの衝撃で後ろに吹っ飛ぶ。

そして不良達が横たわる地面に落下し、そのまま転がった。

「橘！！」

未だ驚きと恐怖で固まる体を無理矢理前に倒すことによつて今度はなんとか駆け出す。一瞬、女性に警戒されるか？と考えたが構わず走る。しかし女性は横を通過しても前のめりの体を起こすだけで何もしてこなかった。地面を転がっていた橘は回転が弱まるとそのまま勢いを利用して膝をついた態勢に立て直した。

「橘っ、大丈夫かつ！？」

俺は橘の横にしゃがみ込み、肩を支える。すると苦しげながらも縦に頷いてくれた。しかし -

「橘、お前・・・」

その額を上から一筋の『血』が流れてきた。俺は驚きの余り声が出ない。そりゃ血なんて膝擦りむいたら出てくるしそれほど珍しいものじゃない。だけどそれが『頭から』となれば話は別だ。

「ほんと、やるねあんた」

声の方に振り向くと、女性が苦笑していた。

「あの初撃のクロスカウンターもどきもそうだけど、まさか逃げられないと悟るやいなや防御を捨ててヘッドバットで腹筋使つて緩んだところに左手で鳩尾突くなんてね。よくまああんな短時間で判断して体重乗せてくるよ。お陰で呼吸止まって昼飯もどすところだった」

女性がお腹をさすりながら軽口を叩く。しかしその眼は笑つてなかった。それを聞いた橘は流れてきた血が口までくるとそれをペロリと舐めて立ち上がり、俺の1歩前に立って相手と睨み合う。まるで俺を庇つて立ち向かうかのように。

「馬鹿何してんだよっ！？お前は今すぐ病院だ！」

橘の手を握つて前が出る。そのままずんずんと歩いて女性の前まで来た。

「のいてくれ。病院に行ってくる」

「そりゃ出来ない相談だ。こっちもただ戦いたくて体張ってる訳じゃないからね」

言って再び拳を構える。

「まだそつちから話を聞いてない」

その眼をみて相手が真剣だというのがわかった。

「橘、下がってる」

俺は1歩前に出て、こちらに来ようとすする橘を手で制する。

「あんたがかい？素人が勝てるほど私は弱くないよ」

「教えてやるよ。そういう猫の慢心から窮鼠は噛み付くんだけ？」

俺も構える。ただ武術だなんて高校に入ってからの体育の授業でやった柔道くらいだ。だけどそれじゃ相手のあの速いストリートには対抗出来ない。だから『あいつ』の教本のような綺麗な動きを思い出す。そして見よう見真似で構えた。

「私の慢心じゃなくて自信だよ」

さつきも思ったけど、その眼に揺るぎはない。

「口じゃいくらでも言える。答えは30秒後、アスファルトの上で知るだろうさ」

「へー。そいつは楽しみだ」

でも引く訳には行かない。

「……………」

「……………」

お互い無言になる。負けるのはまず俺だろう。いくら先程橘が与えた顎と鳩尾のダメージがあるといっても、相手はあの橘と同等レベル。さつきの左の拳が全く見えなかった俺じゃ全く歯が立たないのは歴然だ。ここまできたら月とスッポンどころじゃない。モハメド・アリと蟻の対戦だ。

（それでも……………）

拳をさらに握り込む。

（それでも、退けない理由がある）

意思を固めて戦意に変える。

「橘、お前は休んでろよ」

後ろにいる橘が少し動いた気がして、意味ないかもしれないが一応釘を刺しておく。仮に今は我慢してくれていても、俺がタコ殴りにさられば怪我なんてお構い無しに飛び出してくるだろう。あいつはそういう奴だ。優しい奴なんだ。

「.....」

「.....」

再び訪れる沈黙。しかし、今回は直ぐに終わる。

「はあ、はあ、はあ、ととつうわあっ!？」

またまた新たな乱入者によって。

「はあ、はあ、いたたたた.....」

今度現れたのは男の子。少し茶が入った髪にこれまた少したれている目尻。加えて長い睫毛に白い肌、160もなさそうな身長から女の子に見えなくもないけど学ランを着ているので男の子確定だ。更に幼い容姿と大きめの学ランから中学生だと判断した。彼女の背中の方から急に現れたかと思ったら何も無いところでこけた男の子は走って来たのか、ばてながらゆっくりと立ち上がった。

「えーつと、どなた？」

思わず口からさっきと同じ言葉が漏れる。『このワンパターン野郎!』とか『テンプレ返ししか出来ないのか!?!』といった苦情は受け付けない方向で1つ。しかし、俺と対峙している彼女はその男の子に背を向けてい形になるので当然見えていない。

「勇樹!？」

はずなんだけど、その男の子の声を聞いた瞬間に俺そっちのけでガバツと後ろへと振り向いた。その様子から多分だけかなりテンパってるっぽい。

「あんたいつたい何でいるのってかどうしたのってか怪我大丈夫か!？」

うん、わかりやすいぐらいテンパっている。.....あれ?ひよ

つとして今攻めれば俺勝てる？

「……………」

なんて卑怯丸出しな事を考えていたら橘がお決まりの無言ですたすと歩き出した。

「ちよつ橘っ」

慌てて止めようと右手を出すかひらりとかわされてしまう。

「ちっ！」

そして橘の接近に気付いた女性は舌打ちしながらこちらに向き直った。

「勇樹っ、隠れてな」

彼女は少年を背に守るように立ちほだかる。少年はというと後ろからひよっこり顔を覗かせた。

「あっ！さっきの人！？」

そして驚きの声を上げた。

「へ！？勇樹の知り合い！？」

橘に対して構えてた女性がまた驚きから振り返る。何かもう展開がぐだぐだだ。黙々と歩いてきた橘が女性の前に到着すると、ポケットに手を突っ込み何かを取り出す。

「あっ、お守りっ！」

それは、年期が入ってそうな古ぼけたお守りだった。慌てて女性の前から出てきた少年が橘からお守りを受け取る。

「よかったぁ……本当にありがとうございます！」

少年は嬉しそうにお礼を言って頭を下げた。

「勇樹、それ……」

「うん、茜から貰ったお守りだよ。さっき中学の時の友達にとられちゃって……あはは」

「友達って、またあいつらか！そりゃあんたが思っているだけだろ？向こうからしたらただのオモチャ扱いじゃねーか！」

「それでも友達なんだよ……てうわあっ！？だ、ただ大丈夫ですか！？」

2人の話を聞きながら、こんな絶滅危惧種のお人よしまだいたんだなあと俺が感心していると急に驚きの声をあげる少年。その目は橘の頭に口ツクオンされていた。

「……」

それに気付いた橘が頭の血を腕で拭う

「はいちよいストップなー」

のを右手で掴んで無理矢理阻止。

「雑菌入ったらまずいだろ？ほら、拭いてやるからじっとしてろ」
そしてポケットからハンカチを取り出し血をそっと拭いてやる。始めはテンパってた俺だけど、さっきの少年と女性のやり取りを見てたらなんでか落ち着いていたのだ。あれか？これがいわゆる癒し系か？でもまあ頭から垂れた血も始めの一滴だけだし、おそらく大丈夫だろう。この後、病院には無理矢理にでも連れて行くけどな。

「……」

なすがままに拭かれる橘。

「あぁっ！疑いたくはないけど、あの怪我ってひょっとして……」

「」

それを見ていた少年が何かに気付いたように振り返る。

「うっ……」

その目線の先にいた女性は速攻目を逸らした。

「やっぱり！いつも言ってるでしょ？むやみやたらに手を出しちゃういけないって」

「いや、でもあいつ不良どもをばったばったと殴り飛ばしてたんだぜ？」

「それはよくないことだけど、ちゃんと事情は聞いたの？」

「聞いたって！でもあいつだんまり決め込んで答えなくてさ。それで……」

「それで？」

「体に聞くしか「はいアウト！」きゃっ！」

少年のチョップ炸裂。さっきまで凜々しかっただけに可愛い悲鳴に

グツとくる俺。うんこれは仕方がないことだ。

「なんでそーなっちゃうんだよ!？」

「いや、だって、なあ？」

「聞いているのは僕だよ!？もう。じゃ、謝りなさい」

「あー、この後予定が」

「ないね。学校終わつたし茜バイトやってないしそもそも今日僕達遊びに行く予定だったし」

「あつ、そういえばこの前さー」

「何もなかったね。はいその話おしまい」

「〜」

「口笛吹いてごまかさない」

うわぁ、何気にこの少年S入ってるなあ。えげつないほど退路断つてるよ。

「……………」

「……………」

またまた両者沈黙のパターンが訪れる。

「あーつとさ」

言いながら女性が橋に向き直った。

「……………」

無言の橋。まああいつの場合喋るって選択肢がないんだけどな。

「えーつ、その……………」

両手共にポケットに突っ込んで話す彼女。照れ臭いのか、目線があつちへいつたりこつちへいつたり。やがて-

「ゴメンっ！悪かった!」

そう言つてガバツと頭を下げた。

「ほんとゴメン、私つてすぐかつとなる質でさ。もうこうだ!つて思つたら一直線なんだよ。いやー自分でもわかつてはいるんだけどね」

あははーと苦笑いしながら片手をポケットから出しぽりぽりと頭をかか。

「まさか勇樹が取られた物を取り返してくれてたなんてね。ホントにゴメンっ！」

今度は両手を前で合わせて拝むポーズ。薄めを開けてこっそりこちらを確認しているあたりがなんか微笑ましかったり。

「僕からも謝ります。ごめんなさい」

それに合わせて少年も頭を下げた。女性が少年の方を見て何やら言いたそうにしていたがグツと堪えたみたいだ。

「いや、お互い様ですよ。彼女俺の友達なんですけど人見知り激しくて。でも内面はサバサバとした奴だから大丈夫ですよ」

すかさず橘の代わりに答える。

「うん、大丈夫」

「ほら、だから頭を上げて……へ？」
頭が真っ白になった。

「そっかそっか！こっちもそう言って貰えると助かるよ！」

「もう、ホント調子いいんだから」

少年が苦笑している。が、それを理解するだけの余裕がない。

「本当にありがとうございます。あっ、自己紹介まだでしたね。僕は前川勇樹って言います」

「私は須藤茜。私達は西高の1年だ」

「……橘柚希。私達は、北高の1年」

「おおー！お隣りの高校か。まあ会う機会は少ないだろうけどよろしくな」

「よろしくね」

女性改め須藤さんと少年改め前川くんが右手を差し出す。

「うん」

それを橘は返事と共に2人の手を握り返した。

「んで、そっちの兄さんは？」

ここに来て自己紹介していないのが俺だけという事実にと気付く。

「あ、ああ。ごめん、俺は右片修司。よろしく」

テンパリながらもそう言つて2人と握手する。だって、あれ？俺の聞き間違いか？『あの』橋が一言どころか3回も連続で喋つた？

「どうかしたんですか？」

前川が心配そうにこちらを覗いてくる。まあ一緒にいた奴がいきなり異常なくらいテンパリでしたら心配するわな。

「い、いや。その、橋早く病院連れて行かないとなあと思つて」

「あつそうか！いやー、あまりにもケロツとしてたから気付かなかつたよ」

ポンスと手を叩きながら須藤さんが言う。

「加害者が何言つてるんだよ・・・」

「うおいつ！向こうも反撃してきたつて！むしろ地味だったけどこちの方がトータルでダメージでかいつて！」

「はいはい。橋さん、人間凶器はほつといて橋病院行きましようか。保険証今あります？」

「ある」

また喋つた。やっぱり聞き間違いじゃない。本当のテンションとは違つし、顔も無表情だけど確かに会話をしている。

「勇樹の発言も立派な凶器だからな！」

普段なら弄られっぱなしの須藤さんかなりの親近感が沸いてくる・・・はずなんだけど。俺は橋が喋っている事実で頭がワニワニパニックだ。

「よし、じゃあ行きましようか。お金は茜が出しますし」

「よしつ、そろそろ弄つてあげようよ私を！だってウサギは死ななくとも私は寂しさで死ぬるから恐らく！」

「近くの病院つてなると・・・やっぱり駅の方へ行くべきだね」

「さては勇樹今回はかなり怒ってるな！？でも私だってまだ橋を認めた訳じゃないぞ実は！だってあいつが不良達に暴力振るつたことにはかわりはないからね！」

歩き出す2人を追つて須藤さんが走り出す。いろいろと衝撃的な出来事ラッシュでテンパつてた脳がようやく落ち着き始めるのを感じ

ながら思った。

「俺の物語にもあったな。安易なんてもんじゃないけど戦闘シーン」とりあえず来るべき日に備えて体鍛えるべきか？

「何してんだ右片っ、早くこっち来い！んで私と一緒に土下座するぞ！それはもう地面にめり込まん勢いでな！」

「須藤さんのさっきの怒ってるぞアピールはどうしたんだよ。それとその石頭じゃ比喻に聞こえないって」

「マジだ！本気と真剣を足して2で割れないくらいマジだ！」

「・・・橘の外科の次は須藤さんの脳神経科か」

「あつ、もう行ったけど無駄でした。末期ですって」

「よーしいい度胸だあんたらそこに並べ！これから順番に土下座してまわるからな！」

謝んのかよとツッコミながら、俺は今後についていろいろ考えて始めていた。

橘の怪我は頭が少し切れていただけで軽傷ですみ、俺達は知り合った記念にとファーストフード店で昼飯を食べようという流れになったのだけど

「ごめん、この後用事ある」

という橘の一言により、ご飯はまた次回にということと赤外線で連絡先交換だけして解散した。その帰り道、橘と2人きりになったところを見計らって俺は話しかけた。

「今日、かなりビビったぞ。いつの間にあんなに喋れるようになったんだよ？」

いつもならここは普通の道なので返事はメールのはずだ。だけど今回は――

「……………」

ポケットから携帯を取り出す橘。そして震える俺の携帯。あれ？

「実は1人でこっさり猛特訓したからねー！」

今回もメールでの返事だった。携帯から顔をあげる。橘の表情は眉にシワを寄せたいつものしかめっつらだ。

「何！？気付かなかった（汗。さっそく成果が出るなんてすごいじやねーか！」

「そりやもう文字通り猛特訓だからね！でもちよつと疲れちゃった」

「そっか、おつかれさん。夏休みに入って3人も友達出来たし、このままなら友達100人も夢じゃねーな」

「うん、任せて！じゃあ私こっちだから」

「あいよ。今度今日の不良の件詳しく聞かせてくれよな。んじゃまた」

最後だけ口で喋って挨拶をする。橘はこくと頷いて自分の家の方に歩いて言った。

「あいつも陰で頑張ってたんだな」

1人帰りながらぼやく。ふと、橘と2人でした特訓を思い出した。

橘の成長が嬉しい反面、何でか少し淋しい気もする。まあそんな風を感じることも事態、橘に対して失礼なんだろうな。

(…………でも、今回は少し不安だな)

そう考えながら今日出来た2人の友達を思い出す。だってあの2人は1人目の柏木と大きな違いがあるから。

「よし、ここが俺の踏ん張り所か」

気を引き締める。橘は1人で少しだけ喋れるようになったんだ。

おそらく並々ならぬ努力の末に。だったら橘がそれに集中出来るようにする手助けくらいなら俺にもやれるはずだ。

「よしっ、まずは宿題をぱぱっと終わらせなきゃな」

アパートの前に着いて階段を上がる。まずは気分を入れ替えるために英語だな。その後途中までやっている理科を殲滅してやるぜ！ふははは覚悟しろーと脳内で痛い発言しながら自分の家のドアを開け

た。

般若がいた。

速攻でドアを閉め「させないわよー修司」

俺の家の玄関から現れた瀬上が右足をドアの間に突っ込んで右手で俺の腕を取った。こいつ、訪問販売の方々の強引技を応用してくるとは……!

「お疲れー。いったい何処に行っていたのかな？」

「いや、その、だな。えーっと」

「あれれー？直ぐに答えられないようなところ行ってたんだ。へー」
語尾を伸ばして間延びした言葉を発する笑顔の瀬上。だけど目は笑ってなかった。まあ何が言いたいかというと、ベタな表現しか出来ないほど俺の心は恐怖で満たされているってことだ。

「いや俺だつて悪いと思っただぞ？だけど2人があまりにも自分達の世界に入りこんでいたからさ」

「何言ってるの修司？あときは私と修司の2人つきりだったじゃない」

「へ？いや雄馬「誰それ知らない存在しない……よね？」

人の会話に割り込んで話し掛けてくる瀬上。笑顔+笑ってない目は継続中だ。恐怖で理性が働かず訳がわからなくなる。

「いや、雄馬つて瀬上のっ！？あ、ああーれー！？そういえばそんな奴知らないなあ何で俺変な事言い出したんだろうなあ！？」

馬鹿正直に「彼氏だろ？」と答えようとしたら瀬上の後ろに血まみれの何かがあった。いや、あつたの方が正しいのか。やけに見覚えのある奴だとかそれが人なのかモノなのかなんて今は重要じゃない。とにかくどうやって自分が生き残るかだ。俺の物語は格闘モノどころかホラーまで始まったらしい。

「もう修司つたら変なんだからー」

「だよなー俺変だよなー!？」

あはははーと、全く抑揚のない笑いと引き攣った笑いが響き渡る。

「さてと、修司」

「な、何だ？」

「覚悟はいい？」

左手の拳を掲げて瀬上が死刑宣告のカウントダウンを始める。その血まみれた拳にはメリケンサックが装着されていた。ああ、やつぱり後ろの人をモノに変えたのは貴方様だったのですね。

「優しい優しい瀬上さん。1つだけお願いがあります」

「あらかしら？」

「朝日が拝める程度でお願いします」

「んー、努力はするけど多分無理かな？じゃ、お休みー」

振り抜かれる拳（血まみれ）。やべえ、始まったのはホラーじゃない。スプラッタだ。そんな事を考えながら、俺は心の底から悲鳴を上げた。

第7話 一難去らずにまた、一難・・・？

ぶーん、ぶーん、ぶーん。

勉強をひとまず置いて、左手で震えながら光る携帯を手に取り受信メールを開く。

『どうもー、バイトお疲れ様。橘さん家の柚希ちゃんでーす。宿題諦めずにちゃんとスパートかけてる？毎日こつこつとやって終わらせた私は最終日の今日も元気に遊びに行きまーす 相手はまたまた茜ちゃんです』

画面には予想通り橘からのメールが表示された。今日は8月31日。そう、夏休み最後の日だ。

『わかってんなら邪魔すんな！こちとら宿題残すところあと国語で泣きそうなんだよ！』

現在の時刻は昼の3時。ついさつきバイトを終えてすぐ帰って来た俺は、昼飯の時間さえも返上して宿題に取り組んでいるわけだ。本来ならほっと一息ついてお洒落なカフェテリアにでも行ってランチを頂きたいところ。しかし、国語の宿題は文法・古典文法のワーク計40ページとシンプルにしてDS丸出しのわかりやすい仕様となっていたりする。ちなみに1ページにかかる時間は瀬上で10分。ようするに400分、7時間弱も彼女はかかったわけだ。これでいくと単純計算で終わるのは夜の10時頃。しかし、これは勉強が、特に国語が得意な瀬上が休日丸1日使ってかなり急いでやった結果だ。理系の俺は当然国語は苦手だ。なら、どういう結果になるかなんて考えるまでもない。てか物理的に考える時間さえ惜しい。徹夜？無理無理。だって俺、1日6時間は寝ないとふとした拍子に意識吹っ飛ぶタイプだし。

『なははー、いい具合にテンパってるねえ。頭が地面にめり込まんばかりに土下座したら優しい私はワークを見せてあげるよ？』

『黙れ悪魔っ！俺が信じるのは己の力のみだ！あとその土下座のく

「だり須藤さんのだろうがっ」

『昨日ちやーんと本人から著作権を譲渡してもらいました。んじゃこれ以上邪魔しちや悪いしまたね』

『あいよ、テンパって何かしでかさないように気いつけてな』

『うんバイバイ』

須藤さん達と友達になってまだ5日だけど橋は5日とも一緒に遊びに行っているらしい。

『いやいや、お前あんま会話出来ないのに遊べんの？』
と聞いたら

『頑張つて会話してるもんね！・・・てのは建前で、殆ど茜ちゃんが突っ走ってる感じ』

と苦笑いしながら答えていた。

「さてと、俺も頑張るか」

メールを終えた俺は気合いを入れ直して前を見る。そこには圧倒的戦力をもつ敵（宿題）がいた。

あれから7時間が経過。

「えーっと、いまそが・・・ZZZ・・・」
「ゴンッ！」
・・・
あうち

リタイアしかけていた。今のは意識がとんだ瞬間頭が机の上に急転直下した音だ。本日すでに3度目で頭にこぶが出来そうな勢いなんだけど、これのおかげでなんとか戦闘離脱しないですんでいる。ポイントは何について手に頭を乗せないことだ。あれだと確実に寝てしまうからな。だってもう22時だし、慣れない勉強、しかも苦手な国語を9時 - 14時半のバイトをこなしてぐから家に着いたのが14時50分。そこからぶっ続けでやってるから疲れてるし俺は既に限界だ。現在終わったのは21ページ。7時間で21ページだ。だいたい1ページ20分かかってるから、このままのペースでいけ

ば残り19ページは6時間弱かかる。今が22時だから終わるのは深夜4時。いや、正しくは早朝4時かもしれないが今はそんなどこまでが深夜でどこからが早朝なんて事どうでもいい。重要なのもう俺の死亡フラグが確定してしまっていることだ。

太陽は東から上り西に沈む。

川は上から下へと流れる。

人は自然には勝てない。

右片は夜更かし出来ない。そういう事だ。それか一か八かで出来るとこまで突っ走るか？・・・いや駄目だ。もう限界はすぐそこまできている。次頭を机にぶつけても目を覚ます自信がない。途中で寝てしまつて次の日の朝に絶叫している光景がありありと想像出来てしまつて。

「こつなつたらあれしか・・・いや、やっぱあれは流石にきつい」
出来れば使いたくなかつた俺の切り札にして両刃の剣。

「でも背に腹は変えられないか・・・くそっ！」
でもそうでもしなければこの現実を覆す事は出来ない。

「・・・やるしか、ないか」

俺は決意した。俺はスツと立ち上がりある場所へと向かう。そして、冷蔵庫という名のパンドラの箱へと手をかける。

それは、卑怯にして絶対のタブー。

それは、体を壊しかけない劇薬。

それは、過去に二度と手にしないと誓つた禁忌。

それは、パンドラの箱（冷蔵庫）の1番奥にひっそりと存在する。

俺はそれを手に取り忌ま忌ましげにその名を呼ぶ。

「まさか再び手に取る事があるとはな・・・『眠眠打つ破あくん』」
そう、『ドーピング』（眠気覚まし）だ。この眠気覚ましは栄養ドリンクのような瓶の形をしている。過去に1度だけこれを飲んだことがあるけど、その時は身体は怠いんだけど眠気は吹っ飛んでかなり助かつたのを覚えている。ただその後屍のように動かなくなつただけだな。だつて睡眠をとらない＝身体の休息をとらないってこと

だからそのツケが回ってくるのは当たり前だ。しかもあまりの効果に今度は寝たい時に寝れなくなって更に地獄を味わったのも覚えてる。うわぁ、そんなこと考えてたら飲む気が某総理大臣の支持率顔負けの勢いで急降下してきた。

「よしっ、考えが変わらないうちに」

俺はフタを開けて、一気に注ぎ込む。独特の味が口の中に広がるのを我慢しながら俺はなんとか飲みきった。

「……ふう、これで今夜は大丈夫だ」

後の事は無理矢理考えないようにする。これぞポジティブシンキングだ

ただの現実逃避

「しゃー！テンション上げてくぞ！敵は卓上にあり！」

俺は目の前にある怨敵を睨みつけて戦闘態勢に入る。俺にドーピング（しつこいけど眠気覚まし）まで使わせたんだ。覚悟は出来てるんだよな？

「んじゃさっそくやるか」

左手でシャーペンを持つ。ここでお得な情報。俺は右利きだったのを左利きに変えたという世にも珍し

ぶーん、ぶーん、ぶーん。

「誰だ？こんな時間に」

人がせつかくナイスな情報提供しているときに。携帯を見る。ふとまたあいつがかけてきたのかとも思ったんだけど、

「……橘？」

しかもメールじゃなくて電話だった。

「もしもし、こちらドーピングに手を出したけど反省してないでもちよっぴり後悔している右片です」

「……」

まさかの無言だった。

「おい、どしたー？さすがの俺も数あるボケ殺しの一つ、ガン無

視をされたらひとたまりもないんだけど。いや、どう俺が流石なのはわかんないけどな」

「……」

それでも無言。

「おい、本当にどうしたんだ？」

周りに人がいて喋れないのかとも思ったけど、ならメールをしてくるはずだ。

「……あはははは」

そんな事を考えてると橘が何とも気が抜けた笑い声を上げた。

「……橘？」

そして、

「ごめん、友達減っちゃった」

そう呟いた。

「……はっ！……はっ！……はっ！……はっ！」

漕ぐ。前籠に袋を入れ、寝間着代わりのジャージのまま全力でチャリのペダルを回す。

『今日さ、会ってから様子が少し変だとは思ってたんだ』

思い出されるのはやっぱり先程の電話でのやりとり。

『向こうはずっと喋らないし、私はまだ自分から話しかけるってのには抵抗あったし。だからお互い無言のまま道を歩いてたんだ』

俺の心を占める感情は後悔。そして怒り。

『そしたらさ、茜ちゃんが「あーもうこんなの私のキャラじゃねえ

！」って頭掻きむしり出して。それから、「悪いけどぶっちゃける

ぞ。お前の学校での噂を聞いた。女の子を泣かせたって」。そう言われたんだ』

落ち着け、冷静になれと自分に言い聞かせるが、チャリを漕いでるせいもあるのか身体の熱が収まらない。

『訳があるなら言わなくていい。話せない事情があるならそれで構わない。ただ違うって。その一言だけ聞いたら信じるからって』
・私、何も言えなかつたんだ』

かなりとばしてきてるので、目的地まではあと5分もかからないだろう。

『そしたら茜ちゃん、そっかって呟いてそのあときっぱりと言われちゃった。あんたとは友達になれないって』

あの時の橋の声はもう思い出したくない。

『そりゃそうだよー。こんな女の子泣か』

『橋、今どこいる？』

『……家の近くの公園』

『わかった。そこ動くなよ』

そして電話を切った。思い出し終えてまた後悔する。俺は気付いていたはずだ。柏木は橋の事件を知ってて友達になろうと言ってくれたこと。あとの2人は出会ってすぐ友達になったから橋の事は無口な子としか知らないだろうと。そして怒りの感情が膨れ上がる。知らなかったの気付かなかったならただの言い訳野郎だが、知っていたの気付いていたの俺はそれ以下の奴。ようするに橋が傷つくとかつていながら何もせずに見捨てた最低の人間というわけだ。

『……くそっ』

自己嫌悪に陥っているとようやく公園が見えた。チャリの上から公園を覗くとブランコに人影が見えた。俺は公園の中に入ってチャリをとめる。

『……おう、元気か？』

そして話しかけた。

『ぼちぼちでんなー』

ブランコに座っていた橋がこちらを見ないで言う。

『ボケる元気はあるんだな』

「まあね」

さらにはあはは、と渴いた笑みで答えた。強がってるのは明らかだ。

「ごめんね？勉強中に。あと夜苦手なのに」

「気にすんな。どっちみち徹夜コース確定だったから眠気覚まし飲んでる」

「そっか」

それだけ呟いて橘は黙り込む。きーきーこというブランコの音だけが聞こえてきた。橘の家の近くなだけあって辺りはとても静かで街頭も少なく、まるで世界に取り残されたかのようだった。

「来てもらって申し訳ないんだけど、私は全然大丈夫だから橘が未だ俯いたまま話し出す。

「人に嫌われるのなんて日常茶飯事だし、もう慣れっこなんだよ」その肩を震わせながら話す。

「ただ、友達から嫌われて他人に戻ったのは初めてだからさ、ちょっと動揺しただけ」

そう言つて橘はようやく顔を上げた。目には涙を溜めて、それでも精一杯の笑顔をしている。おそらくこちらに心配かけないために無理をして。

「.....」

拳を強く握り込む。ふと橘と初めて話したことを思い出した。あいつは廃工場で俺に友達になりたいと言つてきた。無口な虎の皮を被つた状態ではなく、素の自分のままで。特訓最中の今でさえ話すがやつとな橘があ頃だけの思いと覚悟で頑張つたのか。それを思うと胸が締め付けられる。

「それにね、決めてたから。悲しいことがあつてももう泣かないって」

真剣な表情で、まるで自分に言い聞かせるように橘が言う。

「昔から泣いてばかりだったから。だから今は友達がいて幸せなんだから泣かないって」

たぶん橘にとっては大事なことなのだろう。でも俺には無理してい

るように見えた。

「だから安心して？またすぐ友達増やすからさ」

「は？」

思わず声を漏らす。俺の驚きの声にビクツと震えた。

「ほ、本当にもう大丈夫だから。今回はちよつと失敗したけどさ、また私頑張るから。だから、ね」

精一杯の笑顔が消え、不安そうな表情になる。そして、

「まだ、右片君と、一緒にいてもいい、かな？」

そう言った。

「・・・・・・・・」

俺は絶句した。ああ、そうか。そうだったのか。俺から友達になりたいと言ったときあいつは言っていた。「友達を選ぶのに妥協はしない」と。そんな彼女が果して本当に“友達の数を増やしたい”と思っていたのか？
違う。

だってあいつは友達に妥協しないから。自分の素が出せる、心を許せる友達が欲しかったのだから。橘が俺の家でインベーダーゲームばかりしてたときに俺は執拗に「友達増やさないか？」と提案した。そのとき、始めは嫌がっていた橘は綺麗な、けどどこかはかない表情で笑いながら承諾してくれた。あれはこういう結果になるだろうとわかっていて、それでも俺を心配させないために無理矢理出した笑顔だったのか。辛い状態になるとわかっていた。それはとても嫌だった。だけど、それでも立ち上がってくれた。俺に嫌われて友達がいなくなるのが怖くて。そして、それ以上に「友達を増やそう」と提案した俺の意見を尊重するために。俺は何もしてなかったんじゃない。ちゃんと橘を“追い込んで”いた。

「・・・・・・・・」

更に拳を握り込む。爪が手のひらに食い込んだ。

「・・・・・・・・」

俺は橘に背を向けて歩き出す。また失敗した。1人の女性を傷付け

た。今回も自分の独りよがりな押し付けがましい行為のせいだ。だから熱くなつてもいい事なんて何も無いと言つたんだ。布施と昼休みに対峙したときに止めておけ、黙ってやり過ごせと言つたんだ。

「あのさ、これ」

そんな自分の心の弱い部分が訴えてくるのを無視して、チャリの前籠から袋を取りさらにそこからあるものを取り出す。

「かなり遅れちまつたけど、誕生日のプレゼント」

俺が今しなきゃいけないのは自分を責めることじゃない。そんなことを考えながら取り出したのは、綺麗に包装された大きめの袋だった。

「ふえっ？」

目を真ん丸にして驚く橘に半ば強引に持たせる。

「えつと・・・見てもいい？」

急な展開にまだ状況が飲み込めていないのか、おどおどしながら尋ねてくる。

「おう」

俺がそう答えると、橘が丁寧に袋を開けそこに手を入れる。そして取り出されたのは――

「・・・靴？」

運動性に優ていそうなシューズだった。

「本当は8月1日の橘の誕生日当日に渡したかったんだけどさ、その日、俺バイトで。どうせ別の日になるなら夏の特訓の労いもかねて2学期始まつてから派手にやるっかなって」

この夏休み、俺なりに橘の好みをリサーチしていた。あいつは白色で結構シンプルなものが好きらしく、そんなシューズを店員さんにも付き合ってもらって選んだ。そして見つけたの某スポーツメーカーのシューズ。橘の好みに合う白を基調としたいろに黒のラインが数本入ったシンプルな設計。軽くて動き易いので運動靴にも日常履く靴にも使える。まあちょっといいやつにしたから予算オーバーで、食費の方も削つての出費だったけど。でもそのおかげで納得のいく

ものを買えた。

「橘今履いている靴、かなり使い込んでそうだったからさ」

始めから靴にしようとは決めていた。ちよつとした願掛けで、その靴にこれから学校始まりいっぱい友達も増え、遊びに行く機会も増えますようにという願いを込めて。流石にこれは恥ずかしいので墓まで持つて行くつもりだ。

「……………」

目を見開いたまま固まる橘。

「……………ひよつとして、チヨイスミスったか？」

あまりにもノーリアクションなので不安になつて思わず尋ねる。

「ええっ！？そんなことないよ！すごく嬉しいよ！？ただ、プレゼントなんて家族以外から貰えるものなんだって感動してただけ！」
橘が目には涙を溜めたまま手をバタバタさせてテンパっている。

「そっか、そりゃよかった」

ホツと一安心。

「んじゃさ、そんなに嬉しいなら…」

一息吸う。

「泣いてもいいぞ」

「えっ？」

橘が聞き返してくる。

「嬉しいんだろ？なら我慢する必要なんてないじゃないか。遠慮なく喜べ。んで、まあ、泣きたいなら、その、好きにしたらいい。この場には俺しかいないしな。なんなら胸も貸してやる」

あまりの恥ずかしさから顔を真っ赤にしながらも、決して目はそらさないで言いきった。

「……………」

橘が少し吊り上がり気味の大きな目を、さっきよりもさらに見開いた。

「……………」

「……………」

その状態のまま、何ともいえない沈黙が二人を包む。臭いセリフを吐いた羞恥心やら、拒絶されるんじゃないかという恐怖心やらで胸がぐちゃぐちゃになる。だけど目だけは決して反らさなかった。1分、3分、5分と長い長い時間が過ぎていく。そして、

「………そっか」

橘が視線を落とし、そう呟いた。そしてこちらに1歩踏み出す。

「じゃあ、お言葉に甘えちゃおっかな」

そう言いながら、ぼすんと俺の胸にもたれかかってきた。それは、こちらが予想していたのよりずっと軽い衝撃で。

「あは、あはは。初めて友達からプレゼントもらっちゃった」
声を上げて笑う橘。

「ほんと、嬉しいな。嘘じゃ、ない、よ？」

「わかってる、橘は嘘つくの下手だからな」

「もう、酷いなあ。でも、素直な気持ちだが、伝わって、いるなら、今回は感謝、かな？あは、ははは」

橘が、話す。

「ははは、あは、はは。ひっ、うう。ひい。ひっく」

そして、橘は俺の胸に顔を押し付け、声を殺して、泣いた。俺は黙って橘の背を子供をあやすように叩く。あいつは泣かないと決めた。橘が自分で決めたことだ。なら、今俺がしたことは余計な事かもしれない。でも、それでも後悔はない。あいつは今まで我慢して、いるんなものを内に溜め過ぎたと思うから。橘が泣くような事態になったのは100%ではないにしろ、ほとんど俺のせいだ。でも、俺は謝らない。俺がここで自分の罪意識から謝ってしまったら、俺が悪いと認めてしまったら、俺を信じてくれたあいつはどうすればいいのかわからなくなってしまう。だから俺は謝らない。ただ胸を張って橘の隣に立ち続ける。あいつが俺に頼れるように。俺があいつの負担を軽く出来るように。

「なあ、橘」

「な、何？」

自分の不安を押し殺し、虚勢だろつがなんだろつが張り続ける。あいつが安心出来るように。

「鼻水つけるなよ？」

「空気、読んつ、でよ。馬鹿あ」

そう、決意を固めた夜だった。

どれくらいの間こうしていただろつ。橘の背中を叩き続けていると、ようやく呼吸が落ち着いてきた。

「あぁーっ！」

んで急に叫び出した。

「うおっ！人の胸で急に叫ぶな！心臓に悪いわ！」

「今何時!？」

こちらを無視して尋ねる橘。

「えーつと10時半過ぎ」

「あちゃー!どうしよう!？私の門限10時だよ!？」

天を仰いで手でどこを押さえながら言う橘。そんなベタなりアクシヨンを久しぶりに見たわ。

「てか橘が俺に電話してきた時点で10時だったし」

「なら早く言つてよこのすつとごどつこい！」

「すつとごどつこい!？すつとごだけでも激怒ものなのにその上ごどつこいだと!？さすがの俺もー我慢ならない！」

「キれるポイントズしてるよ!そんなことより早く帰らないと！」

「逃げようつたつてそうはいかなつ・・・て本当ちよつと待て！」

俺のチャリにまたがろうとしている橘に慌てて飛び付く。

「邪魔しないで!こつちは一刻を争つもの!右片君は歩いて帰つてよ」

「ぬかせ！こちとら考えないようにしてたけど、まだ夏休みの宿題残ってたぞ！？無駄な体力使えるか！」

「そのまま忘れちゃえ！人間なるようになるよ！」

「馬鹿野郎っ！んな超絶バッドエンド迎えるなんてゴメンだ！」

こうして言い争うこと3分。

「はあっ、はあっ、はあっ・・・っ！」

結局、俺はチャリで二度目の全力疾走中。橘はというと

「もっと漕げ漕げー！自慢の筋肉は飾りなのー！？」

こんな感じで俺のチャリの荷台にてヤジを飛ばしている。笑いながら声を張り上げる橘。強がっているのは明らかだった。

「うっせー！いつ俺が筋肉キアラピールしたよ！？そもそもここまでしてやってる俺に感謝言葉の1つや2つ寄越さんかい！」

でも、それは見ていてホツと出来る笑顔だった。

「人にものを頼む態度じゃないっ！いつたいどんな教育受けてきたの！？」

「突き落として轢いて帰るぞこの野郎！」

ぎゃーぎゃー騒ぎながらもグングンとチャリは進んで行く。そして橘の家が見えた。まああの公園が橘ん家の近所だから正直5分もかからないんだけど。その瞬間、お互いピタリと会話が止む。そしてチャリの速度もどどん遅くなる。そこに今の状況なら当たり前的人物がいたからだ。チャリが家の前に着く。

「お帰り、柚希」

橘のお母さんだ。

「ただいま、お母さん」

はははっ、と愛想笑いをする橘（娘）。

「・・・」

橘（母）はそれに対して無言、ただじっと橘（娘）を見つめている。「ゴメンね、ちよっと遊びに夢中になっちゃってさ。気付いたら門限過ぎちゃってた」

それでも橘は申し訳なさそうに喋り続ける。母親に心配されたくない

いのか、嘘までついて。

「……柚希、中で蔵持さんが夕食作って待ってるわ。先に入ってなさい」

ようやく口を開いた橘のお母さんは、なんにも触れないでただ家へと促した。

「わっかた、けど。お母さんは？」

「私はこちらの方に用があるから。先に行って食べてなさい」
そう言っつて、俺を見た。

「おっ、お母さん！？違うの！今日遅くなったのは右片君は関係ないの！」

違う。

「今日は別の子と遊んでたの！ほらっ、この前話した茜ちゃんっつて子！」

そうじゃないんだ。

「それで2人で遊んでて、ちょっと夢中になりすぎ」橘
普通のトーンで、けどどしっかかりとした意志を込めて呼び掛ける。

橘、お前は勘違いをしている。

「また明日な」

そして強引に別れを告げた。

「……」

何か言いそうだったが、ぐっと堪えて黙った橘は不安そうに自分の母親と俺を見つめてくる。

「……わかった。また、明日ね」

「おっ」

そして橘は何度もこちらに振り返りながら家へと入っていった。そして残ったの俺と橘のお母さん。夏の終わりにはまだ早いはずが、冷たい風が2人を通り抜けていった。

「前に言いましたよね？余計な事はしないでくださいと」

無表情で、しかし誰が見てもわかるほど、怒っていた。

「はい」

橘のお母さんは帰りの遅い自分の娘を心配していたのだろう。こんな夜中に一人玄関の前で待ってるほどのだから。だから橘も勘違いしたのだろう。橘のお母さんは帰りが遅かった事に怒っているのだろうと。

「確かに言われました」

俺は言われた。「余計なことはしないで下さい」と。これを橘は知らない。そして後日、橘は門限を過ぎて帰って来た。真っ赤に泣き腫らした目をして、その男と。

「そうですか。よかったです。私の勘違いではなくて」

そう、橘のお母さんは門限を過ぎて帰って来たことに怒ってるんじゃない。

「なら聞きます」

目がいつそう鋭くなる。

「何か申し開きはありますか？」

娘が泣いて帰って来たことに対して怒っているんだ。だからこそ、恐らく次に発する言葉はとても大事なんだろう。それによって橘のお母さんの態度が決まると言っても過言ではないかもしれない。だから俺はゆっくりと目を閉じ、頭の中でもう一度自分の考えを確認する。そして、

「ありません」

そう、言った。

「.....」

それを聞いた橘のお母さんは表情を一切変えないまま俺をじつと見ている。言い訳はしない。というよりする言い訳がない。橘が泣いたのは事実で、俺が関係しているのも間違っていない。だから、何を言われようとも全部受け止める。でも、断言出来る。引く気は全くないと。

「そうですか」

それだけ言って再び黙り込む橘の母親。最近こんな嫌な沈黙の状況にいる俺はわりと真剣に自分の胃袋を心配し始める。

「あの子が、目を泣き腫らして帰って来たのはこれが初めてではありません」

そんな俺をじっと見たまま、何の前触れもなく橘のお母さんが話し出した。

「今までも、何度かこういうことがありました。そして、柚希がその理由を話してくれることはありませんでした」

俺はそれを黙って聞く。

「今回も、こちらがいくら尋ねたところでおそらく本音は話してくれないでしょう」

その顔は無表情。でもどこか悲しそうだった。

「でも、目を泣き腫らしたあの子があんなにも楽しそうに帰って来たのは初めてです……まあ、多少の空元気ではあるみたいですが」

そう言つて、ようやく無表情だったのが苦笑に変わった。しかしすぐに無表情に戻つて言葉が続ける。「意見は変えませんが、余計な事はしないで下さい」

そして、

「ですが……今回は、ありがとうございました」
そう言いながら、俺に対して頭を下げた。

「へ？いや、あの……へ？」

ぼろくそに言われる覚悟をしていたところへのこれなので、肩透かしやら思わぬ展開やらで軽くパニックに陥る。

「では、失礼します」

そんな俺の事などお構いなしに橘のお母さんは家へと帰っていった。その結果、当たり前前の如く取り残される俺。さっきよりも冷たい風が吹いた気がした。

「……とりあえず、俺も帰るか」

橘のお母さんの心の内は正直よくわからない。俺を疎ましく思っているのか橘の友達でいてほしくないのか。だけど、ここにいたからといってその問題が解決されるわけでもない。宿題もまだ残つ

ているわけだし、何もなければそれでいいか、とポジティブシンキングに切り替えてチャリに乗る。そして自宅へときぎはじめた。

「まあ、不幸中の幸い・・・か」

帰路に着きつつ、いろいろとイベントが目白押しだった今日を振り返る。辛い事はあったけど、それでもまだましな方だと思う。

問題はここからだ。橘の事をどうするか。

「これは、踏み込んでみるべきなのか？」

あいつの過去の事。どうして今のような状態になったのか。そして始業式にいったい何があったのか。

「でもなあ・・・うーん」

だけど、すぐにその気持ちが萎える。だって、俺はそういう相手の過去を調べるといふ行為が好きじゃない、むしろ嫌いだからだ。それは本人にも理由があつて話さないことなのだろうから。

「どうするにしろ、繰り返さない事が大事だよ・・・」

今回、俺はまた一人で先走り過ぎた。前回からなんの学習も出来ていない。だから、もっと橘のペースに合わせるのが第一だ。

「よし、俺はとにかく前向きにだ。ポジティブポジティブ」

長い長いまつすぐな一本道で、口に出して自分に言い聞かせる。するとかなり前に人影が見えた。

「・・・・・・・・」

そして0.2秒（数値適当）ですぐに黙る俺。だって一人でチャリこぎながらポジティブ呟いている奴なんてどうみても痛い奴だ。てか、これって自分で自分を痛い奴だと認めてるよな？・・・ぐふっ。一人で自爆しながらもチャリをこぎつつける俺。くそう、こんな傷心の俺なのに帰ったら宿題が待っているのか。うん、現状確認してさらに落ち込んだ。何がしたいんだ俺。

目測にしておよそ200メートル。

だんだんと距離が近づくにつれて向こうもこっちに向かって歩いて

いるのがわかる。

「・・・・・・・・」

そして何故か急激に嫌な予感がした。第六感やら本能やらそんなあやふやなものではなく、まるですでに決定しているかのような感覚。

「・・・・・・・・」

目測にして100メートル。

お互いに近づいているのでぐんぐん距離が縮まる。そして冷や汗が止まらなくなった。

「・・・・・・・・」

目測にして50メートル。

視力が両目とも2.0の俺にはもうその人物がはっきりと見える。俺はチャリをこぐのを止めてその場に立ち止まる。

前方には、月の光を受けて白銀に輝く艶やかな肩まで伸びた白い髪。東洋人では見かけない、切れ長の青色の瞳と高い鼻筋。身長は160センチにも満たないほどの女性は、夜の静かな雰囲気と相まって触れてしまえば壊れてしまいそうな印象を与えてくる。

そんな女性が空を見上げながらこちらにゆっくりと歩いてきた。

そいつは、中学からの知り合いで。

そいつは、いつしか俺が橋に誘拐されたときに電話で助けを求めた相手で。

そいつは、俺に毎日電話をかけてきて。

そいつは、俺が1回電話をとりそこねてからから1度もかけてこなくなつて。

そいつは、いくらかけ直しても出てくれなくて留守番電話に直行で。

そいつは、俺の携帯に悪魔將軍と登録されていて。

そいつは、

「綺麗な夜空ですね。星や月があんなに輝いて」

外国人とは思えないほど流暢に日本語を話せて、

「でも知ってます？あんなに綺麗な星も月も近くで見えてしまえばお世辞にも綺麗ななんて言えないんですよ？」

俺の大切な仲間で、

「それに星や月は自分で光っているわけではありません。太陽という大きな光に照らされてその光が反射してるにすぎません」
俺が過去に傷つけてしまった人物で、

「やはり、景色にしる人にしる、近くでじっくり見るよりこうやって遠くでぼーっと眺めてるのが1番だと思っんです。醜い部分に気づかずに、何も知らずに、綺麗な面だけを見続けられるわけですか」

いびつな鎖で繋がっている。

「こんばんは。久しぶりですね、右片君」

上げていた視線を俺に向け、向こうも歩みを止める。「10メートルの距離”を保って。そして“虎かぶり”な彼女は囁くように言った。

「さっそくで申し訳ないのだけど、約束を果たしにきました」

そう、妖しく笑いながら。

俺の右の手の平が疼いた。

場所は街中。時間は夕方。

「……くそっ」

私は苛つきながら大通りを歩いている。思い出されるのはこの苛つき
きの原因である先程のこと。真剣に向き合った自分に対し、何も答
えてくれなかった元友達のことを。

「……くそっ」

そして私はますます苛ついた。さっきも触れたようにここは街中の
大通りなので周りには人、人、人。そんな中で、私の周りだけがま
るで円を描いて壁でもあるのかのようにスペースな空いている。街
中の大通りでのその光景は明らかに異常だった。その理由はわかっ
ている。私の機嫌が見るからに悪いからだろう。触らぬ神に祟りな
し。この現代で機嫌が悪い人に声をかけてくるような物好きはいな
「その人、申し訳ないが少し聞きたい事がある」

「……前言撤回。そんな物好きは滅多にいない。私は舌打ち一
つしてそちらを見もせず無視を決め込む。」

「おいおい舌打ちをしておいて無視か？全く、こんなだから最近
の若い者と言われるんだ。こつちとしてはいい迷惑だよ」

そんな私にまるで挑発するかのように話しかけてくる輩。

「ケンカ売ってるのか？」

ここで出る私の悪い癖。無視を続ければいいのに沸点が低いせいで
すぐ喧嘩を買ってしまう。自分でもわかってはいるのだが止められな
い。振り返ると、そこには私が想像したような不良ではなくポニー
テールの可愛い女の子がいた。

「ようやくこちらを見てくれたか。いきなりすまないね。貴女が苛
立っているのはわかるんだがどうしても聞きたいことがあるんだ。
なに、5分もあれば事足りるさ」

その少女は外見に似合わないクールな笑顔をでそう言った。

「……悪いが他をあたってくれ」

喧嘩を売ってくるぐらいだからどんな腕自慢の不良かと思いきや可愛らしい少女。明らかに喧嘩を売ってくるような人物には見えない。売られた喧嘩は買う主義だが自分からは滅多に売らない。ということはこの少女には喧嘩を売っているつもりはないのだろうと、無理矢理結論付けて少女に背を向け再び歩きだす。それに今は気分が悪い。しかし、ポニーテールの少女は気にした様子もなく私の背後についてくる。

「連れないこと言わずに頼む。ひよっとしたら貴女にとっても有益な話かもしれないぞ？」

「悪いけど興味が無い。他を当たってくれ」

少女のしつこさに苛々しながらもそう早口にそう言っただけ歩みを早めた。

「はあ、私の知り合いにもカルシウム不足なのがいるが君はそれ以上だな」

背後でやれやれといった感じのため息をつくのがわかるがそれすら無視をして歩き続ける。普段ならいくら見た目が少女でもこんなあからさまに挑発されたらのもってしまっているところだが、その気力が湧いてこない。どうやら私は苛ついていて以上に落ち込んでいるらしい。すると背後で少女が立ち止まる気配がした。ようやく諦めたかと思ったとき、

「そう怒るなよ、“須藤茜”」

そう、トーンの低い声が聞こえた。瞬間、思わず足を止めて振り返ってしまう。

「は？何で私の名前？」

そしてその先の言葉は出てこなかった。何故なら、

「橘柚希の事で聞きたいことがあるだけだ」

それ以上に驚きの言葉を聞いたから。そこには真剣な眼差しで私を見上げる少女がいた。

「……お前は、誰だ？」

警戒しながらも尋ねる。

「これはすまない、自己紹介が遅れてしまったね」
そう言っつて少女は続ける。

「私の名前は柏木優奈。橘柚希の友達だ」

堂々とこちらから目を逸らさずに。こうして、柏木優奈と須藤茜が対峙した。

第二章 前門の虎、後門も虎

意味

前に行ったら虎がいて食べられる。後ろに行っても虎に食べられる。このことから出来たことわざ。

？追込まれた、あるいは逃げ場がない状態。絶体絶命。

？どう足掻こうが最終的には同じ結末が待っている状況をさす。

またごく稀に、『2匹の敵対していた虎が、をもらったの 恩を返すため、前と後ろに別れて を から をかけて た』という昔話から、別の意味合いをもつときもある。

〈虎辞典より抜粋〉

第1話 何も忘れちゃいやせんぜ

「久しぶり、だな。ソフィア」

言われた事には触れず、挨拶だけなんとか返す。彼女の名前はソフィア・ビクトロブナ・ソーンツェワ。ロシア系のアメリカ人で、アメリカ生まれの日本育ち。今は訳あってアメリカにいる……はずだったんだけど。

「こっちに帰って来てたのか」

「はい、おかげさまで病気も完治しましたし」

「そっか……」

ソフィアは生れつき重い病気で完治するかどうかはわからなかったんだけど、発展した医療のおかげで命の危険は無かった。そして、母国アメリカの最先端技術で完治する可能性があるとのことでした。それで治療に専念するため日本を離れていたのだ。それが見事完治し、経過を確認し次第日本に帰ってくるというのは電話で聞いていた。だけど、向こうに行っただのは去年の11月。まさかこんなに早く帰ってくると思っていなかった。確かに最近電話に出てくれなかった。連絡はとれていなかったけど、おおよその期間ぐらいはわかるだろう。まあ恐らくわざと黙ってたんだろうけどな。

「いつ帰って来たんだ？」

「自宅に着いたのは1時間程前です。それでご挨拶にと右片君の家を訪ねたら留守だったので。疑問に思っ調べてみたらこっちの方

に反応があつたので散歩がてら歩いて来ました」

「は、反応って……。お前はいつたいどんなハイテク機械使つたんだよ」

「ただの携帯のGPS機能です。右片君の携帯についてるじゃないですか。知らなかったんですか？」

「……さいですか」

こいつ、俺が機械に弱いのが知ってわざと黙ってたな。てかアメリカに帰る前に半ば強制的に携帯を買い替えさせたのにはこういう訳だったのか。

「……………」

そして訪れる気まずい沈黙。久しぶりに会つたのと、罪悪感とでなかなか話しかけづらい。

「あのさ、……ゴメン」

そんな言い訳をいつまでもしてもらえないので、俺は腹を括って頭を下げた。

「……………」

それを黙って聞くソフィア。

「あの日さ、夜から友達が来てて。悩み相談を徹夜で聞いてたら朝になっちまってさ。うわー朝になっちゃってるよとか思ってたらい

つの間にか寝てしまってたんだ」

頭をポリポリと書く。

「だから、ゴメン。許して欲しい」

そう言ってもう1度頭を下げた。今までの経験上、てかソフィアとは2年くらいしか一緒にいなかったけど。まあそんな短い期間でもわかったことがある。彼女は今少なからず怒っている。そして俺より彼女の方が1枚も2枚も上手。だから、下手な小細工がますより素直に全てをさらけ出して謝った方が俺のためだ。

「……………」

二人を長い長い沈黙が包む。最近本当にこのパターンが多くて、胃のストレスが半端ないことになっている。例えるならかつすかすのへチマ状態。このストレスが頭にきてハゲるのはやだなあと現実逃避を始める。

「……………冷えて、来ましたね」

そんなとき、声が聞こえた。

「あ、ああ。夏ももう終わりだしなあ」

そう答えながらソフィアの方を見ると、彼女はまた空を見上げていた。

「……………」

んでまた沈黙。

「じゃあ、帰るか」

「いえ、私はもう少しここにいます」

「そ、そうか」

あれ？間接的に帰りたいつてアピールをしてたんじゃなかったか？
くそっさすがソフィア、相変わらず何考えてるのかわからねえ。

……ん？

「おいちよつと待て。ソフィアって病気が治ったばかりだよな？それ
でこんな夜中の外出、両親は許可したのか？」

「はい、もちろん無断です」

「はい1名様自宅にご案内です」

ソフィアの前まで駆け足で近寄り手をとる。

「……」

のを無言でかわされた。

「はあ、とにかく帰るぞ。両親に迷惑かけるな」

ため息をつきながらも説得を試みる。いくら何でもこれははっちゃ
けすぎだ。

「……………」

無言で俺をじっと見るソフィア。しかし、それも一瞬のことだ

「チエンジ」

そう言った。

「はい？」

「私についてくれた子が気に入らないの。だからチエンジ。NO・1の子に変えて」

そう続ける彼女は無表情のまま。

「お客様、申し訳ありません。僭越ながら私がクラブ右片のNO・1ホスト『修司』でございます」

「これでトップ？どおりで動物園みたいなホストクラブだと思ったわ」

「ほうほう。お客様はクラブ右片のメンツを動物呼ばわりされるのですね？」

「へえ、カバって喋れるんだ」

「ドンペリ奢らせるぞ」の野郎

「六本木にマンション買ってくれたら考えてあげる」

そして無言の睨み合い。結果。

「・・・俺の負けだ」

俺が折れた。

「負け？私、勝負なんてしてたかしら？」

シラを切るソフィア。

「はいはい私が悪うござんした。ですのでどうか自宅に帰って頂けないでしょうか？」

頭を下げる俺。端から見なくても格好悪さMAXだろうな。

「それが人にモノを頼む態度？頭が高いわ」

「・・・俺に土下座をしろと？」

「えっ？そ、それはちょっと・・・」

「何でお前がドン引きしてんだよ！？」

「だって押してダメなら引いてみるっていつじゃない」

「仮にそれで土下座をしてもらえと思ったお前がわからねえ！」

「だって右片君ってどMじゃない」

「よしっ、警察行くぞ！これはもう立派な犯罪だ！」

「安心して。DMは気持ち悪いけど罪にはならないわ」

「予定変更、病院行くぞ。状況はかなり深刻だ」

こいつは精神的におかしいに違いない。

「ふふっ、相変わらずの道化っぷりね。嬉しいわ」

人をいじくりまわして満足したのか、そう言っただけで彼女はようやく笑った。普通よりかなりニヒルにだけ。言いたいことは山ほどあったが、それを全て飲み込む大人な俺。うん、自分で褒めてちよっとだけ心の傷が回復した。

「・・・はあ、こっちはお前の相変わらずの毒舌にびっくりだよ」

そして急な話題転換に苦笑して返す俺。そしてようやく本来の彼女の表情と口調に戻ってくれたことにホッと安堵のため息をついた。おそらく許してくれたのだろう。やっぱりこいつはこうでなくちゃな。

「褒め言葉ありがと。・・・さてと」

ソフィアがこちらを向く。

「罰ゲームは何がいい？」

そして笑顔でそう言った。

「はい？」

「だから罰ゲーム。私としては一発ギャグ百連発とかがいいんだけど。あつ、もちろん私が笑わなかったらノーカウントね」

「いや、罰ゲームの内容のことじゃなくてなんで罰ゲームをしなきゃいけないのかが知りたいんだけど」

「ん？だって約束破ったじゃない」

牛井はツユダクに決まってるでしょ？みたいな顔して小首を傾げるソフィア。ロシア系アメリカ人が牛井をツユダクで頼むかどうかは知らないけど。

「いや、あのさ。さっき謝ったのではない終わりってのは確かにかおしいかもしれないけどさ。あれは不慮の事故みたいなもんだろ？あの時は徹夜明けで死ぬほど眠かったし。うん、やむを得なさMAXみたいな感じだよ」

「要約すると？」

「えーっと、水に流そう」

「死に晒せ」

「そこまで!？」

許してもらえてなかったらしい。いや、約束破るのは悪いことだけど『約束破る=死』ってどんなジャイアニズムだよ。

「さあどうする？死ぬまでギャグやり続けるか潔く死に晒すか」

「あれ？何でだろう。2択のはずなのに結果が同じだ」

「ちつ、気付いたか。じゃあその顔で生きて恥を晒し続けるか潔く死に晒すかに変えてあげる。まあ聞くまでもないとは思っけど」

「あれ？おかしいな。改善されたはずなのにさっきより傷付いてる俺がいる」

現状維持の選択肢があるのに。

「はいはいわかったから。じゃあ死に晒し方はどうがいい？」

「俺は迷いなく死ぬ方を選ぶと思われるほど顔が残念なのか？ビュ ティ・コ シアムで数字とれるほどののか？」

「いや、出るなら劇的ビフォー フターでしょ？」

「動物から建物に格下げされたっ！？」

まさか生き物として見られていないとは。

「まあ本音はさて置いて」

「置くもの間違ってるからな。そしてそれは言い間違いだと信じてるからな」

「その意見華麗にスルーするわよ。で、本題に戻るけど。約束破って何もないっておかしいと思わない？」

「いや、だから」

「理由はわかった。謝罪もしてもらった。でもそれだけでいい。何人が救われるんでしょうね？」

「あー……」

いや、ソフィアの言いたいことはわかる。わかりやすくいえば「ごめん、済んだら警察はいらない」だ。価値観の違い。俺にとっては謝って済む友達間の揉め事。ソフィアにとってはその程度で済ませられる問題ではない一大事。それほど彼女にとっては許せない出来事。でも、それは。別の見方をすれば、彼女にとってそれほど俺との電話が大きなファクターだったということ。

「ごめん……」

だからやっぱり俺が折れるしかなかった。

「ギャグ10連発で勘弁してくれないか？」

せめてもの妥協案を用意して。

「……はあ、仕方ないわね。それで手をうつてあげるわ」

そう言って彼女が“10メートルの距離”を縮めてこちらに歩いてくる。

「優し過ぎる私に感謝してむせび泣きなさい」

どうやら今度こそ許してくれたようだ。

「その優しい優しいソフィアさん。お願いだから前回のギャグ5連発のときみたいに30分無表情でガン見とかは止めてください」

「あら、それは右片君のギャグに問題があるんじゃない?」

それに合わせて俺も前に歩き始める。

「ならせめて全部「ふんっ」だったり「はんっ」だったりする鼻で笑うだけでも」

「それこそ右片君のギャグ次第じゃない。私のお腹がよじれるくらいのをかましてきたらいいじゃない」

そして2人並んで帰路に着く。

「はははっ、またまたご冗談を。ソフィアのお腹がよじれるなんて話、時空が捻れるって話の方がまだ信じられるね」

「正直者の右片君。貴方が味わいたいののは右手にあるスタンガン? それとも左手にあるチーズケーキ?」

「それで前者を選ぶのはもう異常だと思っんだ」

「じゃあチーズケーキね。あっ、それ作るとき小麦粉切らしてたから片栗粉で代用したけど大した問題じゃないわよね、はいどうぞ」

「ごめん、異常なのはお前だったわ」

どんだけカチカチのチーズケーキ作りたいんだ？逆にどうなったんのちよつと見てみたいよ。

「冗談よ、ちゃんとお母さんと一緒につくったわ」

そう言つてソフィアはカバンから箱を取り出す。

「えっ？本当に作つてきてたのか？」

「失礼な言い方ね。それじゃあ作つてきたらダメみたいなニュアンスがあるじゃない」

「いや、決してそんなことはないぞ！？うん！」

珍しく拗ねるソフィアに慌てて弁解する。だってこいつがお菓子作りをするなんて初耳だ。それにふざけた会話してるところにいきなりだったし余計に驚いた。

「そう、じゃあ食べてみて」

「へ？今？」

俺チャリ押してるんですけど。

「自転車は私が押してあげるから。はい」

そして半ば強引に箱を渡してきて無理矢理自転車を奪っていく。

「まあ、そこまでいうなら。どんなの入ってるのかなあ」と

そして箱を開けて中を見る。そこには想像してたより可愛らしいケーキがあった。

「おおっ、それっぽい見た目だな」

「それっぽいってどういことよ」

「いや、いかにも女の子が作りそうなケーキってことだ。うん、馬子にもケーキだな」

「からかわれてるのはわかるけど、それだと孫に甘いおじいちゃんみたいね」

「ごもつともで」

言いながらケーキを取る。

「んじゃ頂きます」

少し恥ずかしいのもあって口数が少なくなる。んで食べてみた。もぐもぐもぐ……。食感はふわふわしたのではなく、どちらかというところチーズケーキのようなしっとりとした感じでいい舌触りだ。

「うん」

口に入れた半分ほどを食べ終わる。

「味がしない」

んでぶっちやけた。

「味がしない？」

ソフィアが気に食わないのか顔をしかめる。

「おう、薄いんじゃないなくて全くしない。むしろここまで味を消せることに驚きだよ。下手すりゃソースやケチャップかけて食べられるぞ？」

本音をぶつける。遠慮しあつような仲でもないしな。

「そう・・・」

ソフィアが下を向く。全身からどんよりオーラを出している。

「えっ？おいつ、ソフィア？」

ひ、ひょっとしてあのソフィアが落ち込んだる？この程度の弄りなら倍にして返してくるはずだろ？

「いや、でも味さえすれば絶対美味しいぞ。うん、間違いないなこれ」

と思いつつ、テンパリながらも慌ててフォロー。前のあいつならこんなこと無かったのにな。やっぱり退院したばっかだから本調子じゃないのか？

「ありがとう右片君。でも大丈夫よ」

そう言うてはかなげに笑うソフィア。

「本当に大丈夫だから。だってー」

ソフィアが再びカバンの中をこそこそ。

「私にはこれがあるから」

そう言うて取り出されたのはケチャップとソースだった。

「これで味付けはばっちりよ」

「……………何でんなもんあるんだよ」

「まあ建前は日頃の行いが良すぎる私への神様からのささやかなプレゼントで、本音はこの1ポケをするために持ってきただけだね」

「おいおい、ソフィア。お前はいつからギャグ要員に……………ちよいと待て」

「またそのフレーズ？今度は何？」

「このポケの為にってことはそういう答えが返ってくると思ったんだよね？」

「ええそうね。右片君で「えっ？この子病気なの？」って心配になるくらい単純だし」

「その意見今回は特別に見逃して聞くけどさ、わざとあんなケーキ

作ったのか？」

「当たり前じゃない。私はそんなドジっ子キャラで売ってるつもりはないんだけど」

「お前は芸人の鏡だよ。ここまでして笑いをとりにくるとは」

苦笑しながら答える。なんて笑いに貪欲な奴なんだ。

「はあ？そんな訳ないじゃない」

と思っただらそういう訳ではないらしく、ソフィアが顔を歪めながら言う。

「へっ、そなの？じゃああのケーキは嫌がらせか？それともどつきりか何かか？」

「違うわよ、ただの確認。右片君が“嘘をつかないか”どうかのね
そう言うソフィアの顔は無表情に戻っていて。始めて会ったとき
のような氷のような冷たい危うさを放っていた。

「……今更、嘘で取り繕うような関係でもないだろ」

即答出来なかったものの、なんとかかどもらずに言葉を返す。

「そうね。だから「確認」って言ったの。「試した」じゃなくてね」

「そっか」

つぶやく。

「……………」

「……………」

お互いが無言になり、不穏な空気が流れる。

ふと。

2人の間に、俺達を繋ぐ、いびつな鎖が見えた気がした。

「さてとっ」

この空気を変えるかのように大きめの声を出すソフィア。

「はい、これ」

そして笑顔で差し出してきた。ケチャップとソースを。

「……………えーっと、気づかない振りもといソフィアがそんなこと強要するはずがないと信じきってあえて的外れなこと聞くけど、
- くれるのか?」

「はい残念はずれの罰ゲーム。現実を突き付けるけど、そのチーズ
ケーキ、味しないんでしょ?そしてケチャップとかソースかけて食
べられるんでしょ?だから、はい」

そして突き出される黒と赤。
ソース ケチャップ

「いや、あれは例えであって。ほら、「へそで茶を沸かす」とかい

うだろ？あれと一緒にだよ」

「私、ロシア系アメリカ人だからことわざとか難しい日本語わかんない」

「少なくともことわざってことは理解してるんじゃないかこの野郎」
ことわざどころか現文古文なんでもござれなくせにしれっとしやがって。

「またまたその意見華麗にスルーするわよ。・・・信じたくはないけど、ひょっとしてさ、あの言葉は嘘だったの？」

今にも泣きそうな表情でこちらを上目遣いで見るソフィア。

「うっ・・・」

くそっ、相変わらず完璧な猫かぶり。いや、その上をいく凄さだから虎かぶりか？まあ何にせよ完全に演技だと見破ってるのにこっちがものすごく申し訳ない気持ちになってくるんだから恐ろしい。

「そんな不倫してる男の離婚するって言葉を信じて待っている愛人みたいな言い方するなよ・・・あーもっっ」

そしてその必殺技に敗れる俺。左手でぐしゃぐしゃと髪を掻きむしる。ええええどうせ馬鹿ですよ。そして深呼吸をし、覚悟を決める。

「よっしゃーやったるやないか！どんとこいやー！」

幼稚園のころから「修司君はやれば出来る子」と言われ続けた俺の
実力、とくと見せてやるぜ！「キーキにケチャップがなんぼのもん
じゃい！」と関西弁で必死に闘魂注入。

「気合い入れたとこ悪いけど、私の家に着いたわ」

したのがもれなく全て盛大に出てった。

「そんなオチだと思ったよこんちくしょう！」

まあ俺ん家のすぐ近くにあるソフィアん家が視界に入ったからひよ
つとしてとは思ってたよ！

「こんな夜中にわざわざ家の前まで送ってくれてありがとね」

「訴えるからな！俺がストレスで胃潰瘍になったら絶対に！円形脱
毛症になった場合は慰謝料倍額払って貰うからな！」

それぐらい俺の心はズタズタだ。下手すりゃ毛根までズタズタだ。

「相変わらず見てて愉快ね。右片君は」

相変わらずのニヒルに微笑みながら言うソフィア。

「じゃあまた明日」

そう言って俺の言葉なんかお構いなしにソフィアは自宅の玄関へと
向かって行った。

「ちよっ、ソフィア！」

それを大きな声を出して止める。

「何？文句なら明日受け付けるから今日はもうお開きにしてくれな
いかしら。さすがに長時間の飛行機で疲れが溜まってるの」

その表情からは確かに疲れが見てとれる。

「悪いけど、その話じゃないんだ」

かといってこれは俺も譲れない。

「………何？」

思いが通じたのか、ソフィアは無表情へと表情を戻しながらもこちらに向き直ってくれた。俺は目をつむり、もう1回深呼吸をする。さっきよりもゆっくり、さっきよりも深く。よし、集中完了。そして、俺は自らの力120%を引き出し、さりげなく言った。

「た、退院おめでとう。んで、お帰り」

はずなのに初っ端で噛んだ。やばい、逆に力み過ぎた！後半なんて完全に声裏返って震えてたよ！

これじゃせつかくの「さりげなく挨拶、そして颯爽と帰る俺にソフィアも見直すかも？」作戦がパーだ！1人パニクる俺を余所にソフィアは目を軽く見開いて驚いている。

「右片君、私の好感度でも上げたいの？」

「だったら何だ！？文句あるのか！？裁判所でケリつけるか！？勝訴もぎ取って叩き返すぞこのどさんぴんが！」

「ヤクザもびつくりなくらい下手くそないちゃもん付け方ね。・・・
「はあ」

心底呆れたようにため息をつくソフィア。でもそれは一瞬で、

「・・・・・・・・ありがとう。あと、ただいま」

屈託な笑顔というには程遠いけど。年相応の、そしてソフィアにしては珍しい、照れが入りながらも小さく微笑で言ってくれた。その笑顔でボルテージが下がった俺。

「・・・・・・・・おう」

何を言っていていいかわからなかったので、そうとだけ言って頭をかきながら答える。ぶつちやけ演技かもしれないけど。それでも俺は、そうじゃないと信じれた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

でと。今、ぶつちやけかなり気まずかったり。まあ理由は言わずもがな。

「よしっ、言いたいことも言ったし帰るわ。じゃあな！」

そう言っただけでチャリに乗り走り出す俺。ダメだ、あのむず痒い空気、俺には堪えられそうにない。

「別に急に恥ずかしくなったとかそういうことじゃないぞただ宿題を早く終わらせる為に急いでるだけなんだよだから相手のリアクションも確認する暇が無いだけで決してこのあと何言われるかびくびくしてる訳じゃないぞ本当だからなそこんと勘違いすんなよ約束だぞってかそつだ宿題忘れてたー！」

そして相手のリアクションも確認しないまま、全力でチャリをこいで家へと向かった。

静かな夜に虫の泣き声が聞こえる。

「はあ、私に何を求めているのよ修司は」

そんな中、声が聞こえた。

「………ばか」

1人残されたソフィアは、最後にそう呟いて家へと入っていった。

第2話 回り出したら止まりゃんせ

「おはよー・・・」

「おはよーってうわっ、どしたの修司？ゾンビのメイクなんてして」

「決まってるだろ綾香？これからハリウッドで修司が主演やるRー？指定のホラー映画の撮影だよ」

「瀬上よく見る。バリバリのすっぴんだ。いつも通りぶるっぶるの卵肌だろ？んで雄馬、ふざけたことぬかしてると病院のベッドにぶち込むぞ」

「えっ、違うのか？だったら早くも『アバター』の次回作か。確かに今の修司の真っ青な顔色ならノーメイクでも大丈夫だろうけど、その顔を3Dで見るのはちょっとなあ・・・」

「喜べ雄馬。ご希望通り病院のベッドから棺桶に行き先変えてやる」
場所は教室の自分のクラス。

現在は8時25分ですでに予鈴は鳴り、もうすぐホームルームが始まる時間帯だ。

そんな中、自分の席に着くなりスライムと化した俺はぐでーっと机にへばり付いた。

「うひゃー重症だねえ。どんだけ寝れたの？」

「……0」

「はっはっはっ修司。付くならもーちよいマシな嘘付けよ」

「……はっはっはっ雄馬。ボケるならもーちよい歳くつてからボケろ。眠眠打つ破あーん飲んだんだよ……」

途切れ途切れになりながらも何とか言葉を返す。

が、だめだ。力が湧いてこない。

「あちゃーご愁傷様。残り5分しか無いけど少し寝たら？」

「心遣いは有り難いんだけど無理だ。こいつを飲んだが最後、生きる（起きる）か死ぬ（寝る）かの2択だ」

それに寝たくても効果がありすぎて眠気が全くこないしな、と苦笑しながら答える。

「宿題は終わったのか？」

「なんとかな。間違いの数は半端ないだろうけど」

さすがに心配したのか、雄馬が真面目に声をかけてきたので「ちらも真面目に答えた」

「まあ今日は始業式だけだし、帰ってゆっくりしてなよ。今日はバイトないんでしょ？」

「おう、あたぼーよ」

「こんなところで江戸っ子に出てこられても。んじゃ私達は席に戻るね」

そう言っつて瀬上が背を向ける。

「瀬上、ちよいと待っつてくれ」

「ん？何？」

可愛らしくちよこんと首を傾げる瀬上。

そのウェーブのかかった茶髪がふわつと揺れた。

「俺も昨日の夜知つたんだけどさ」

息を吸う。

「ソフィアが帰つて来た」

そして言つた。

「………っ」

それを聞いて、瀬上の顔が少しだけ苦痛に歪んだ。

「おい修司、それマジか？」

雄馬の真剣な表情で尋ねてくる。

「俺だつてつく冗談くらい選んでるよ」

「・・・そうか」

そして3人が黙り込ん静かになる。

それにひきかえ、ホームルーム開始まで1分をきつた教室内は大分賑やかになってきている。

「瀬上、あのさ」

「心配してくれてありがとう」

俺が何かを言う前に瀬上の言葉が遮った。

「でも私は大丈夫だから。雄馬もいるしね」

笑いながら話を続ける。

「おう、任せとけ」

胸を叩きながら雄馬が力強く賛同する。

「ただ、」

「本当に大丈夫か？」

俺には、

「もう、修司は心配性だなあ」

何故か瀬上が橘とダブって見えた。

「はい、皆さん席に着いて下さい」

担任の先生が教室に入ってくる。

「今日は始業式ですが、もう一つ大きなイベントがあります」

クラスがざわめく。

俺の額に一筋の汗が流れた。

「なんと転校生がやってきます」

その言葉をスタートに、おおーっとクラスが一気に盛り上がった。

「重要なのは性別。そして容姿だ。あとは萌え属性が1つあるたびにランクが+1だ」

「イケメンかなイケメンよねイケメンでしょ！あーテンション上がるわー！」

生徒の大半があちこちで転校生についての話をしている。

俺はまず雄馬の方を見てみると、何やら難しい顔をしていた。

次に橘の方を見てみると、相変わらず窓の外を見ていた。

そして最後に恐る恐る隣の席にいる瀬上を見してみる。

そこには、

「じゃ、また明日ねー」

肩に鞆をかけ帰る準備万端の瀬上がいた。

「ちよいと待てい」

帰ろうとする肩を掴む。

「ごめん修司、私用事を思い出したの」

「学校来て1限目から帰るほどの用事ってなんだよ」

「それはあれよ」

「どれだよ」

「.....」

「.....」

「離して修司！やっぱ無理！私覚悟間に合ってない！」

「諦めるの早っ！？ちよっとぐらい言い訳してみろよ！」

ダメだ、瀬上が凄んだら俺なんて一発なのにそれを思い付けてないほどテンパってる。さっきのシリアスはいつたい何だったんだよ。

「ソフィさん私のことめっちゃ嫌ってるって！まだ許してくれてな

「いつて！」

「落ち着け瀬上！なんかキャラが壊れてるぞ！それにまだ転校生がソフィアだって決まってるないだろ！？」

「この時期でこのタイミングだよ！？それ以外なんてありえないって！フラグバリバリだって！」

「いやこの世に絶対なんてありえないね！微々たる可能性かもしれないけどありえないなんてことがありえない！」

「そこまで言うならもし転校生がソフィアさんじゃ“なかったら”その転校生に告白してくれる！？」

「よしその条件飲んでやろう！そのかわりソフィア“だったら”そっちが告白しろよ！」

「わかったわ！望むところよ！」

確かにこのタイミングだ、ソフィアじゃない確率は低いだろう。

でも、低いからって諦めてられない。

それを教えるために俺は転校生がソフィアじゃないことに賭ける！

それにもしミスっても瀬上がソフィアに告白するだけで俺へのダメージはゼロだからな！……あれ？

これっておかしいよな？

「では転校生の方入ってきてください」

俺が疑問に思ったところで先生が話し始める。

瀬上はその瞬間、確かににやりと笑った。

かなりたちの悪い方向で。

良く考える。この話の流れなら、俺はソフィアじゃ“ない”と主張してるんだからソフィア“だった”ときに罰ゲームになるのが普通だ。

だから俺は不利なはずなんだけど、これじゃ逆だし俺が有利になっ
てしまう。

これは何を意味するのか？瀬上の性格を考える。猫みたいな性格で
ちよつと愛情表現が過激な女の子。

そう猫を被った演技が得意なのだ。ドアが開いて転校生が入って
くる。

身長190ほどはあるだろうという長身。夏服から出る腕はかなり
の筋肉質。

そして失礼だが人相が悪そうな顔立ち。もうわかるだろうが、性別
は言うまでもなく男。

ソフィアが変装をするという可能性はなくてもないが体格的に無理だ
ろう。

つまり

(嵌められた!)

瀬上の奴、転校生が男だと知っていたな!?

だからあんな不利な条件で勝負を挑んできたのか!

自分の愚かさを呪いつつ、冷や汗ダラダラ流しながら横を見ると瀬上が目線で訴えてくる。

「約束したよね?」と。もし告白したとしよう。

俺はゲイもしくはホモとして残りの2年半の学園生活を過ごすことになるだろう。

もし仮に本当に俺がそっちの人なら覚悟も決めただろう。

しかし、断じて否。

俺は女性が大好きだ。

女性は引いて俺に近づかず、そっちの気を持った男性ばかりが寄ってくる。

そんな生活は耐えられない。それは俺にとっての社会的な死を迎えるという事に他ならない。

ではこのまま告白しなかったとしよう。

瀬上からチキンと言われるのはまだいい。

その後、生命的な死を迎える。

あのバーサーカー（的な般若の瀬上）によって。

何故だ？何故齡16にしてこんな究極の分岐点に立たされてるんだ？

「それでは自己紹介をお願いします」

先生に促されて転校生は黒板に何かを書き始める。

おそらく自分の名前だろう。

周りはざわざわだし、女子からは黄色い声が聞こえてきたりもするが今の俺はそれどころではない。

考える

俺はどちらの死も迎えたくない。

新しい選択肢を創りだせ

何もかもが無事というのは無理だろう。

目的の為に、その他は全て切り捨てる

だから、少しの犠牲は仕方がない。

手段も選んでいられない。

その結果、周りに何と言われようが構わない。

俺は、生きるため（いろんな意味で）に行動する。

転校生がこちらに振り替える。

そして沈黙を破り、第一声を発そうとする。

その前に、

「その筋肉に惚れました！兄貴と呼ばせてください！！」

がばつと頭を下げ、舎弟にして欲しいと告白した。

瞬間、俺の中のアイデンティティ的な何かがぶつとんだ。

静まり返る教室。

集まる多数の視線。

それに反比例して激減する俺への良いイメージ（微々たる量）。

「自己紹介もかねて、一つ、教えてやろう」

転校生が喋る。

背後の黒板には嵐山大地の文字。

「俺が最も嫌いなこと。それは」

ポケットに手を突っ込んだまま転校生が天を仰ぐ。ん？と思ったのは一瞬。

「俺よりド派手に目立たれることだ！」

その頭が一気に振り下ろされて俺の額にぶち当たった。

鈍い音がする。

痛みを感じることもなく俺はぶっ飛んだ。

そして、何かやわらかいモノに当たったのか少し衝撃があった。

その原因を確かめる間もなく、そこで俺の意識は途切れた。

どこかの景色のいい平原で。

俺は1人佇んでいる。

1人は嫌だ。

寂しいから。

かといって大勢の知人が欲しいわけでもない。

自分を出せないから。

少なくともいい。

1人でもいい。

年や性別なんて関係ない。

心を許せる、自分を出せる、信頼できる。

そんな人が欲しかった。

もう裏切られるのは、嫌だ。

私がいるわ

そんな声が聞こえた。

驚きと期待から勢いよく振り替える。

そこには、

このムキ子がいるわ

全身オイルまみれでケバすぎる化粧のムキムキマツチョなスキンヘ
ツドの海パン野郎がいた。

そこまでするならせめてその無精ヒゲも剃って欲しかった。

慌てて視線を逸らす。

照れることはないわ。ここにいるのはみんな貴方の仲間
周りをみる。

いつのまに増殖したのか、辺り一面ムキ子に囲まれていた。

あまりの恐怖に身が震える。

この歳でもトラウマになりそうなレベルだ。

安心なさい。ここには男も女もない。いるのはゲイかホモよ

恐怖が増した。

必死に逃げ口を探すがそれを許さないほどびつちり隙間なく増殖し
たムキ子達が迫ってくる。

ほら、全てを開放なさい。貴方の全てをさらけ出して、本当の貴
方を取り戻すの

やめろ、止めてくれ。

俺はそんなんじゃない。

女性が好きなんだ。

嘘おっしやい。正直になるの

本当だって。

信じてくれ。

怯えないで。ちゃんとわかっているから。女性のティーバックと男性のボクサーパンツ。貴方なら迷わず後者に飛びつくわ

距離にしてもう１メートルもない。

そんな至近距離でおっさん全てがそう話しかけてくる。

違つと心の底から否定させてくれ。

俺は女性が大好きなんだよ。

《んもう、焦らすのが好きなのね》

手が顔に触れられる。

オイルですごくぬめっていた。

《でも、そんなあなたが、好・き》

そして抱きつかれそうになったとき、俺は限界を超え、魂の雄たけびを上げた。

「うるせ　！！俺は大嫌いだ！俺が好きなのは女性のティーバックなんだよ！！」

肩で息をする。

その目の前には、

「・・・・・・・・」

目を見開いて驚くソフィアがいた。

「あれ？お、おっさんは？」

思わず呟きながら辺りを見渡す。

そこは学校の保健室だった。

俺はそのベットに寝かされていたらしい。

もちろんムキムキのおっさんなんて1人もいない。

「よかった、夢かぁ」

安堵のため息をつく。

途中までは俺の過去の話だったのに、途中から訳がわからないことになっていった。

夢から覚めた今だからこそあれは夢だと確信できるが、あのときはあれが現実だと思っていたから地獄だった。

「・・・・・・・・」

そこで未だに固まるソフィアと目が合い気付いた。

今のとんでもない状況に。

「ソフィア、お前が今1番にしななければならないことは落ち着くことだ」

まずいな、非常にまずい。

このままでは急にティーバックが好きだと言いだした変態セクハラ野郎になってしまう。

「・・・確かに、そうですね」

さすがソフィア。

俺に同意し頷いてくれた。

周りを気にしてか敬語モードだけど。

「よし、じゃあまずは何も考えないで深呼吸をしよう」

「ええ、わかりました」

お互いに吸ってはいてを数回繰り返す。

「落ち着いたか？」

「はい、大丈夫です」

「よし、じゃあ本題に入ろう。くれぐれも落ち着いて聞いてくれ」

「その前に右片君、1ついいですか？」

「おう、何だ」

「寝汗がすごいことになってますよ？」

言われて確かめる。

今は9月でまだ残暑が厳しいが、保健室にはクーラーがあるので部屋の温度は快適だ。

なのにもかかわらず確かに俺の夏服は汗でびしょびしょだった。

「うおっ、本当だな」

これは間違いなくムキ子のせいだ。

「水分補給をしなきゃ。待っててください、今すぐ醤油をペットボトルごと持って来ますから」

「ちょっと待てい」

がしつと腕を掴む。

「何ですか？」

「俺の聞き間違いじゃなきゃ今“醤油を”ペットボトルごとって聞こえたんだけど」

「そうでしょうね。だってそう言ったんですから」

「それだと俺、浸透圧の関係で下手すりゃ500ミリリットル程度でポックリ逝っちゃうんだけど」

「そうでしょうね。だってそのために1.5リットル飲ますつもりですから」

「いやそれ3倍じゃん!? 殺す気満々じゃん!? 全然落ちつけてないって!」

「やばい、あの敬語は周りに対してではなく俺に対してだったのか!

「いえ、落ち着きましたよ? その結果、極めて冷静にこの場で容易に苦しめることが出来て確実に殺す方法を考えることが出来ましたから」

「どこの性格破綻者だよ!? 怖すぎるわ!」

「砂糖1キログラムが致死量という説を確かめるというのも考えましたが、これでは確実性がないので断念しました」

「日本はまずこいつをどうにかしなきゃいけない! 将来が不安すぎる!」

「安心してください。『この物語はフィクションですがこの情報はノンフィクションです。絶対に真似しないでください。真似したとしても一切の責任をとりません』これで大丈夫です」

「何の心配をしてるんだよ!? ブラックジョーク過ぎるわ!」

怖い！普通に怖いよ！いつ！

「女の敵が煩いですね」

「ふう」

そんな俺の昂ったテンションが一気に地面に叩きつけられた。

「いや、あれはだな」

「言い訳は聞きましょう。しかし、私が納得できるだけの説得力がない場合はそれ相応の覚悟をしてください。貴方は女性である私に訴えられても文句が言えないレベルの発言をしたのですからね」

冷たい。

突き刺さる視線とか、この態度とか、何もかもが冷たすぎる。

夏の残暑、どこに行っちゃったんだよ。

「.....」

沈黙して必死に考える。

正直にムキ子のことを語るか？

いや、そんなことしたら普段から俺がそんな夢を見ている変態野郎
つてなつて社会的に死んでしまう。

かといってこのまま黙ったままなら俺は肉体的にソフィアに殺され

てしまう。

あれ何このデジャブ？

こうなったら第3の選択肢、謝り倒すしか

「あらかじめ釘を刺しておきますが、私は言い訳は聞くと言いましたが謝罪を聞く気は一切ないので。許す気が一切ありませんから」
ないってわけじゃないぞもつと頭を捻りに捻ったらきつと他にもまだ選択肢は残っているはずだ頑張れ俺！

諦めるな俺！

諦めたらそこで人生終了だぞ俺！

「もう一度だけ言います。言い訳は聞きましょう」

駄目だ。

いくつか考え付いたが、どの選択肢をとっても最終的にはDead
Endにしか辿り着かない。

「……ないのですね？」

ソフィアが念を押してくる。

「いやも ちょい待って！5分いや3分もう1分でいいから待って
くれ！」

そつだ諦めるな！

これには俺の人生がかかってるんだ！

挫けそうになつた心を奮い立たせる。

「無理ですタイムオーバーです」

のも無駄に終わってしまった。

「ジーザスッ」

最悪だ。

この世には神も仏もないらしい。

「……しかし、こちらが提示する条件を飲めば許してあげないこともないです」

「ジーザス！！」

いた！

お母さんいたよ！

ここにいたんだよ、ソフィアという名の神が！

「私に永遠の服従を誓いなさい」

「………ジーザス」

紛うことなきどん底だ。

あまりにもショックがでかすぎる。

まさかソフィアという名のものすんごくたちが悪いサディストの死神だったとは。

「そう落ち込まないでください。ちょっとした冗談です」

そう言っつてソフィアはふふつと笑った。

「お前の冗談は俺の寿命と胃、そして毛根にとっての天敵だ」

もうなんかすがすがしいほど振り回されてるよな、俺。

辛くないし、悲しくなんかもない。

でも、叶うことなら一泊二日で温泉旅行に行かせてくれ。

それで俺、また頑張れるから。

「なんかものすごい悟りを開き切った顔をしてるところ申し訳ありませんが、話を本題に戻します」

空気が少しピンとなる。

「何だ？」

少し身構えて、俺も真面目に尋ねる。

「条件といっても難しい話ではありません。ただ聞きたいことがあるだけです」

そう言ったソフィアはふうと一息つく。

そして、

「橘柚希さんのこと、そして右片君との関係について知りたいのです」

そう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0487h/>

虎かぶりっ！

2010年10月9日14時35分発行